令和4年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（実態把握が十分でない障害種の方のスポーツ実施に関する現状把握調査）」
報告書

令和５年３月

障害者スポーツ推進プロジェクト（実態把握が十分でない障害種の方のスポーツ実施に関する現状把握調査）要旨

背景・目的

第 3 期スポーツ基本計画において「国民のスポーツ実施率を向上させ、日々の生活の中で一人一人がスポーツの価値を享受できる社会を構築する」ことが政策目標として設定されており、この実現に向けて、令和 8 年度までに成人障害者が週1回以上のスポーツ実施率を 40%、年1回以上のスポーツ実施率が 70%程度を目標数値とすることが示されている。一方、成人障害者が週1回以上スポーツする人口率は 31%・年1回以上の率が 41%と、特に年 1 回以上のスポーツ実施率向上について大きな課題がある。

特に、障害者自身が運動・スポーツを実施する上で抱える課題については、個別性が高く類型化しにくい特性や実態把握が不十分な障害種も存在することによって、未だ明らかでなく、問題の全体像把握には至っていない。本調査では、現状、実態把握が不十分な医療的ケアを必要とする方、発達障害の方についてヒアリングを行い、課題の全体像を明らかにする。

調査方法

医療的ケアを必要とする方、発達障害の方に関係する団体（障害者支援団体、障害者施設、学校等）及び医療的ケアを必要とする方、発達障害の方個人に対してヒアリングを行い、ヒアリング結果を整理する。

また、医療的ケア、発達障害領域の有識者による有識者会議を実施し、調査方法やヒアリング項目についての協議、調査結果の内容について協議を行った。

主要な結果

団体 48 件、個人 26 人のヒアリングを実施し、各団体における工夫及び配慮、課題についての整理、個人における工夫及び配慮、課題についての整理を行った。

目次

第 1 章　調査概要 **1**

1.　調査目的 1
2.　有識者会議の設置 1
i.　有識者会議設置の目的 *1*
ii.　委員の選定について *1*
iii.　ヒアリング調査 *2*

第 2 章　医療的ケア **3**

1.　有識者会議 3
i.　第1回有識者会議 *3*
ii.　第2回有識者会議 *4*
iii.　第3回有識者会議 *5*
2.　ヒアリング調査 5
i.　調査概要（団体） *5*
A）　調査目的 5
B）　調査方法 5
C）　調査内容 6
D）　調査対象 6
E）　調査期間 7
ii.　調査概要（個人） *7*
A）　調査目的 7
B）　調査方法 7
C）　調査内容 7
D）　調査対象 8
E）　調査期間 8
iii.　調査結果及び分析（団体） *8*
A）　運動・スポーツの実施状況等の現状 8
B）　テキストマイニングによる分析結果 10
（ア）　使用した分析ツールについて 10
（イ）　分析方法 10
（ウ）　ヒアリング内容全体について 11
（エ）　競技・配慮に関すること 18
（オ）　課題に関すること 25
C）　具体的な工夫及び配慮について 32
D）　具体的な課題について 34
iv.　調査結果及び分析（個人） *36*
A）　運動・スポーツの実施状況等の現状 36
B）　テキストマイニングによる分析結果 37
（ア）　ヒアリング内容全体について 38
（イ）　競技・配慮に関すること 45
（ウ）　課題に関すること 51
C）　個人における具体的な工夫及び配慮について 58
D）　個人における課題 59

第 3 章　発達障害 **60**

1.　有識者会議 60
i.　第1回有識者会議 *60*
ii.　第2回有識者会議 *61*
iii.　第3回有識者会議 *62*
2.　ヒアリング調査 62
i.　調査概要（団体） *62*
A）　調査目的 62
B）　調査方法 62

C）　調査内容 62
D）　調査対象 63
E）　調査期間 63
ii.　調査概要（個人） 64
A）　調査目的 64
B）　調査方法 64
C）　調査内容 64
D）　調査対象 64
E）　調査期間 65
iii.　調査結果及び分析（団体） 65
A）　運動・スポーツの実施状況等の現状 65
B）　テキストマイニングによる分析結果 68
（ア）　ヒアリング内容全体について 68
（イ）　競技・配慮に関すること 74
（ウ）　課題に関すること 81
C）　具体的な工夫及び配慮について 88
D）　具体的な課題について 90
iv.　調査結果及び分析（個人） 92
A）　運動・スポーツの実施状況等の現状 92
B）　テキストマイニングによる分析結果 94
（ア）　ヒアリング内容全体について 94
（イ）　競技・配慮に関すること 100
（ウ）　課題に関すること 106
C）　個人における具体的な工夫及び配慮について 113
D）　個人における課題について 114

第1章　調査概要

1. 調査目的

第 3 期スポーツ基本計画にて「国民のスポーツ実施率を向上させ、日々の生活の中で一人一人がスポーツの価値を享受できる社会を構築する」ことを政策目標とし、令和 8 年度までに成人障害者が週1回以上のスポーツ実施率を 40%、年1回以上のスポーツ実施率が 70%程度を目標数値とすることを示した。一方、令和 3 年度の厚生労働省「国民健康・栄養調査報告」によれば、成人障害者が週1回以上スポーツする人口率は 31%・年1回以上の率が 41%と、特に年 1 回以上のスポーツ実施率向上について大きな課題がある。

こうした中、昨年度まで障害者スポ―ツ推進のため調査事業が複数行われ、障害者スポーツのスタッフ不足や障害者スポーツの推進体制・競技団体の活動基盤に問題があることが指摘されてきたところである（令和3年度障害者スポーツ推進プロジェクト各種報告書より）。しかし、障害者自体が抱える課題については、個別性が高く類型化しにくい特性や実態把握が不十分な障害種が存在することによって、未だ明らかでなく、問題の全体像把握には至っていない。

こうした状況下で、令和 8 年度までの政策目標達成のためには、多様なステークホルダーと協働しながら、問題の全体像を把握して効率的に施策を実施する必要がある。そのため、本事業では、現状把握が不十分な箇所の調査を行い問題の全体像を明らかにする。これにより障害者スポーツ団体の今後の発展に繋げ、障害の有無に関わらず「日々の生活の中で一人一人がスポーツの価値を享受できる社会を構築する」という政策目標を達成することが、本事業全体の狙いとなる。

2. 有識者会議の設置

i.　有識者会議設置の目的

調査内容や調査方法精査のため、本調査領域に知見のある有識者からなる有識者会議を設置し、各委員の意見を仰ぎながら効果的な調査実施を行う。

第1回有識者会議は、全員の出席の元で開催し、第2回及び第3回有識者会議については、医療的ケア、発達障害に領域を分けて開催した。

ii.　委員の選定について

事前のヒアリング調査により、本事業の対象障害種となる発達障害・医療的ケアの方々がスポーツを実施しているケースは少ないことが判明している。そのため、スポーツ実施上の課題以前に、スポーツを実施していない層の課題についての調査が必要になることが想定される。したがって、障害者のスポーツ実施を推進している団体関係者以外に、学識経験者および障害者自身の内面や家庭環境に知見のある有識者の参画が必要であると考え、以下の通り委員を選出している。

【委員一覧】（五十音順。敬称略）

委員名	領域	所属
上野　あかね	医療的ケア	一般社団法人こみゅと小平理事長
大濱　あつ子	発達障害	NPO 法人スマイルクラブ理事長
熊　仁美	発達障害	特定非営利活動法人 ADDS 共同代表
澤江　幸則	発達障害	筑波大学体育系准教授
飛松　好子	医療的ケア／発達障害	国立障害者リハビリテーションセンター研究所顧問
前田　浩利	医療的ケア	医療法人財団はるたか会理事長

宮副　和歩	医療的ケア	全国医療的ケアライン代表

iii.　ヒアリング調査

障害者自体が抱える課題については、個別性が高く類型化しにくい特性や実態把握が不十分な障害種が存在することが未だ明らかでなく、問題の全体像把握には至っていないという現状がある。

そのため、医療的ケア、発達障害、それぞれの領域について、（1）障害者支援団体※、障害者施設※、学校※等の団体に対してのヒアリング、（2）当事者（児童・生徒、卒業後の本人）や保護者に対してのヒアリングをそれぞれ実施し、問題の全体像把握を行う。

本事業の調査対象となる医療的ケア、発達障害は以下のように定義する。

医療的ケア：医療的ケアを必要とする方で、座位以上が取れる方（知的障害の有無は問わない）
発達障害　：発達障害の方で、知的障害を伴わない（診断の有無、手帳の有無は問わない）

※本調査において、障害者支援団体とは、「本事業が対象とする障害種の方が活動する団体で、保護者会や当事者の会等の現場団体」を指す。
また、障害者施設とは、「本事業が対象とする障害種の方が1～2名以上所属している団体で、運動・スポーツの機会を提供している団体」を指す。
学校とは、「本事業が対象とする障害種の方が1～2名以上所属している学校」を指す。

第2章　医療的ケア

1. 有識者会議

i. 第1回有識者会議

本事業全体の趣旨やゴールの共有を行った上で、団体ヒアリング及び個人ヒアリングにおける候補団体・者の共有及び討議、団体ヒアリング及び個人ヒアリングにおけるヒアリング項目の共有及び討議を行った。

医療的ケアに関して、有識者からの指摘事項と、その内容を踏まえた対応については以下のとおり。

＜有識者からの指摘事項と対応＞

指摘事項	対応について
【調査の進め方について】 スポーツの定義を揃えて調査・ヒアリングを実施した方がよい。	団体及び個人ヒアリングにおいて、運動・スポーツの定義を初めに明示する。具体的には、「競技スポーツのみならず、ぶらぶら歩きや階段の上り下り等の身体運動全般を含めたもの」という説明を行った上で、ヒアリングを実施した。
【調査の進め方について】 「できない」「難しい」という仮説を調査で明らかにするだけではなく、どのような支援、環境、工夫が整えばスポーツを「できる」「楽しめる」かという視点も加えた方が良い。	団体及び個人ヒアリングにおいて、実際にどのように「できる」ようにしているか、「楽しめる」ように配慮及び工夫をしているかのヒアリングを実施した。
【調査の進め方について】 医療的ケアに関しては、身体的障害だけではなく、ケアする人や使用している医療デバイスがセットになって課題が生じる。特にデバイスに関してはデバイスを守るという事も必要なので注視しておいたほうが良い。	使用しているデバイスに関しての注意点や配慮及び工夫について、ヒアリングを実施した。
【文献調査について】 医療的ケアに関しては、圧倒的に論文の数が少ないので、医療的ケア児・者そのものについての研究論文を調べたほうが良い。	医療的ケア児・者に関する論文を追加で3本、調査した。
【団体ヒアリングについて】 移動支援やヘルパーの方々もヒアリング対象として加えると良い。	対象を追加してヒアリングを実施した。
【団体ヒアリングについて】 障害者スポーツセンターが国内に数か所あるので加えると良いのではないか。	対象を追加してヒアリングを実施した。
【団体ヒアリングについて】 学校で座位以上の医療的ケア児が 5 名以上在籍というのは、ほぼない。医療的ケアにおいては	団体の選定基準を「1～2名程度」と変更してヒアリングを実施した。

団体の選定基準は変更した方が良いと思う。	
【個人ヒアリングについて】 サポートする人も同席してヒアリングしたほうが良い。	個人ヒアリングの際に、サポートする人（保護者や施設職員等）の同席を依頼し、ヒアリングを実施した。
【個人ヒアリングについて】 医療的ケアに関しては、座位以上をと流ことができ、一定程度、自身で動くことができるという条件で対象を特定した方が良い。	左記の条件で個人ヒアリングの対象者を特定し、ヒアリングを実施した。

ii.　第2回有識者会議

団体ヒアリング及び個人ヒアリングの調査結果を共有した。また、合わせて、団体のヒアリング先について（追加すべき属性の団体がないか、対象者の区分は適切か）、団体へのヒアリング項目について（深堀が必要な項目はないか）、個人ヒアリングについて（必要十分か、追加すべき属性の団体はないか）等について討議を行った。

有識者からの指摘事項と、その内容を踏まえた対応については以下のとおり。

＜有識者からの指摘事項と対応＞

指摘事項	対応について
【ヒアリング方法・項目について】 特別支援学校で実施されている、自立活動の時間についても、詳細をヒアリングしてみると良いのではないか。	団体ヒアリングにおいて、質問項目に追加してヒアリングを実施した。
【ヒアリング方法・項目について】 医療的ケア児のスポーツに対する意識・認識を把握する必要がある。医療的ケア児がスポーツをすることをどのように捉えているか？	個人ヒアリングにおいて、質問事項に追加してヒアリングを実施した。
【ヒアリング方法・項目について】 スポーツをする上でのサポートの具体的な内容を深堀してヒアリングしてほしい。どのようなサポートがあれば、スポーツに関わることが出来そうか。	団体及び個人ヒアリングにおいて、質問事項に追加してヒアリングを実施した。
【ヒアリング方法・項目について】 褥瘡への対応方法についてヒアリングする必要がある。	個人ヒアリングにおいて、質問事項に追加してヒアリングを実施した。
【ヒアリング方法・項目について】 学校側が事前に計画を立てているからスポーツを実施できているとしたら、そのノウハウは何なのかについて深堀してほしい。	団体ヒアリングについて、質問事項に追加してヒアリングを実施した。

iii. 第3回有識者会議

第3回有識者会議において、有識者から以下の点について指摘を受け、委託事業成果報告書の表現や、記載の修正を行なった。

＜有識者からの指摘事項と対応＞

指摘事項	対応について
現場のヒアリング内容を記載している場合でも、その内容が正しい内容とは限らないため、報告書として適切な表現に記載を修正するべき。	該当箇所についての修正を行なった。
障害の有無と個人の課題に相関関係がないケースもあるが、相関関係があるかのように記載されている部分がある。そのような表現は削除するべき。	該当箇所についての修正を行なった。
医学的な視点から、委託事業成果報告書を読んだ人が、意味が取りやすくなるよう、正しい用語を使う、別の用語に置き換える等の修正をするべき。	該当箇所についての修正を行なった。
テキストマイニングの分析結果について、分析結果の読み方が判別できないケースがあるため、修正をするべき。	該当箇所についての修正を行なった。
テキストマイニングの分析結果から考えられる点について記載をするべき。	該当箇所についての修正を行なった。
テキストマイニングの分析結果と、図示されている内容の対応関係が分かるように修正するべき。	該当箇所についての修正を行なった。

2. ヒアリング調査

i. 調査概要（団体）

A） 調査目的

障害者が所属する団体における、運動・スポーツの機会の提供の現状を把握するため、団体ヒアリングを実施した。合わせて、運動・スポーツの機会の提供に関する課題内容の把握、団体における運動・スポーツの機会の提供に関する工夫及び配慮の内容を把握する。

B） 調査方法

オンラインツール（Zoom）を用いてヒアリングを実施した。

C)　調査内容

以下の内容についてヒアリングを実施した。

各団体の基本情報	当事者の数、割合、障害の程度・類型、年齢、性別
	スタッフ数
	専門職のバリエーション（看護師の有無）
	スタッフ間での情報共有の方法
	当事者、保護者との連携方法
	施設運営方針、当該施設におけるスポーツの位置付け
スポーツ提供・実施状況	スポーツ施設の状況（広さ、数、種類）
	実施できるスポーツの種類
	スポーツ種別ごとの実施頻度、実施形式
スポーツ提供の課題、障害者スポーツ実施の課題	受け入れ可能であることの表示方法（団体としての発信、行政との連携）
	ステークホルダー（当事者、家族、支援者）の関係性について
スポーツ提供にあたっての配慮・工夫点	当事者の特性理解に関して実践していること
	施設等のハード面での工夫
	他機関との連携の有無（支援団体、スポーツ提供施設、医療機関）
	スタッフ間の研修の有無（指導方法、評価手法）
	スポーツ提供を実施していることの周知方法について

D)　調査対象

以下の団体区分ごとに要件を設定し、ヒアリング先の選定を行った。

障害者団体	本事業が対象とする障害種の方が活動する団体である
	スポーツを提供する団体（障害者スポーツを実施する団体）と、そうでない団体（当事者が集まりスポーツ以外の活動の場を提供する団体）のバランスをとる
	「障害者の保護者会」「障害当事者の会」等の現場団体を想定し、統括団体は含まない
障害者施設	本事業が対象とする障害種の方が、1～2名以上所属している
	障害者の方が集団で集まる場所がある
	スポーツレクリエーションを提供する施設と、そうでない施設のバランスをとる
	施設タイプのバランスを取る （参考）施設タイプ • 学校卒業後：入所、通所（生活介護等の日中活動系サービス）、訓練系・就労系（就労継続支援 A 型、B 型等）、訪問看護ステーション • 児童・生徒対象：放課後等デイサービス、生活介護サービス
	直接のヒアリング対象者としては、障害当事者と直接関わっている方、実態をよく理解されている方（現場担当者）を対象とする

学校	本事業が対象とする障害種の方が、1～2名以上所属していること
	普通学校の場合は、支援級を併設していること
	直接のヒアリング対象者としては可能な限り、現場を統括する管理職と、障害当事者と直接関わっている方、実態をよく理解されている方（現場担当者）を対象とすること（担当教員など）

E）　調査期間

令和4年12月～令和5年2月

ii.　調査概要（個人）

A）　調査目的

障害を抱える当事者のこれまでの運動・スポーツの実施状況を把握することを目的にヒアリングを実施した。ヒアリングに当たっては、障害を抱える当事者がスポーツを実施するにあたっての課題内容を把握し、当該課題を解決するための、当事者本人や支援者の工夫及び配慮を把握する。

B）　調査方法

オンラインツール（Zoom）を用いたヒアリングを行う。

C）　調査内容

以下の内容についてヒアリングを実施した。

障害児・者の基本状況	障害の程度・類型、年齢、性別
	障害者手帳の保有状況
	在籍する学校種別
	支援の強度、必要性の有無（医療専門職のサポートの有無）
	保護者の関わり
	スポーツレクリエーションの実施状況
	実施しているスポーツレクリエーションの種類、頻度、形式
	どこで実施しているのか（学校、一般的なスポーツ施設、障害者センター等）
スポーツに取り組む際の課題・スポーツに取り組むことができない理由	始めたきっかけ／選んだきっかけ
	取り組む上で感じる／感じた難しさ、課題
	取り組むことができない理由
	どのような条件／支援が、スポーツに取り組むのに必要か
（児童・生徒のみ）学校体育、部活動への参加状況	どのようなスポーツに参加しているか
	参加の経緯（自発的、学友の誘い、支援者の誘い）
	参加していない理由（施設環境、支援者の負担、当事者のハードル）
	加入した／選んだきっかけ
	どのような団体が主催しているか

スポーツ以外のクラブや同好会・サークルへの加入状況	あって良かったと感じる配慮

D） 調査対象

団体ヒアリングで話を伺った学校・障害者団体・障害者施設等からの紹介を元に個人ヒアリング先の選定を行った。

具体的な条件としては、7歳以上であり、調査対象となる障害（医療的ケア）を抱えていること、とした。

E） 調査期間

令和4年12月～令和5年2月

iii. 調査結果及び分析（団体）

A） 運動・スポーツの実施状況等の現状

本事業を行う上で事前に行ったヒアリングでは、「都市部」と「地方部」に運動・スポーツの実施状況や、運動・スポーツの提供場所等に大きな違いがあるのではないか、という仮説があった。

したがって、団体ヒアリングを通じて、この仮説を検証するため、対象となる方がどのような場所で、どのような運動・スポーツに取り組んでいるか、どのくらいの頻度で行っているか等の現状を明らかにし、「都市部」と「地方部」に分けて整理を行った。（「都市部」は、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、愛知県、大阪府、京都府及び兵庫県と定義した。以下、同じ。）

都市部の方が地方部よりも、運動・スポーツができる場所の選択肢が豊富であり、地方部の場合、施設の空きスペースや駐車場を用いている例がみられた。

実施される運動・スポーツの種類について、都市部と地方部に共通して、ボッチャを実施している団体が多くあった。また、風船バレーやボール遊び等のいわゆるレクリエーションを実施している団体も多くあった。

頻度については、共通して、学校においては週2～3回（1回あたり 40～50 分程度）、それ以外の団体では週1回（1回あたり1時間程度）で実施している団体が多かった。

＜都市部＞

施設種別	運動・スポーツの提供場所	運動・スポーツの種類	頻度
障害者支援施設	体育館、多目的室（体育館の小さい版）、U ターンプール、サウンドテーブルテニス室、卓球室	競技スポーツ、レクリエーション、パラリンピック競技の車椅子テニス、ボッチャ	利用者の利用頻度に合わせて実施
障害者団体	大学病院内	レクリエーションとして、的当てやボール投げ	月に1回程度
障害者支援施設	利用者の自宅等、訪問看護先にて	散歩、ステップの上り下り、バランスボールを用いた運動	訪問看護の頻度に合わせて実施
障害者支援施設	体育館、プール、陸上競技のトラック、テニスコート、野球場、近隣の公園	パラリンピック種目であればほとんど可能（アーチェリー、冬季スポーツ以外）	週に 2 回（体力アップトレーニングまたは競技種目を実施）

学校	運動場、プール、体育館	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般	小学校の体育の授業に合わせて実施（週2～3回）
学校	運動場、プール、体育館	卓球、ボッチャ	週1回
学校	運動場、プール、体育館、屋上、公園	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般 基礎的な体づくり運動から競技まで幅広く実施	小学校の体育の授業に合わせて実施（週2～3回）
障害者支援施設	体育館、テニスコート	ボッチャ、テニス、サッカー、フラダンスなど。	週1回
障害者支援施設	施設内の活動室	綱引き、サッカー、ホッケー、バスケット、レクリエーション（ピンポン玉リレー等）	週1回程度
障害者支援施設	イベントごとに場所が異なる（外部施設）	スキー、トライアスロン、水泳	月1回程度
障害者支援施設	特別支援学校やオンライン開催	アレンジボッチャ、ピンポン玉入れ、紙コップ飛ばし、ストレッチ等（アダプテッドスポーツ※中心） ※ここでは、性別、年齢、体力、障害の有無に関わらず誰でも気軽に参加して楽しむことができるよう、ルールや用具を工夫したスポーツの意味で使われている	2月の場合、2回程度実施している（年間6回程度）

＜地方部＞

施設種別	運動・スポーツの提供場所	運動・スポーツの種類	頻度
学校	運動場、プール、体育館、武道場	卓球、バドミントン、器械運動（マット、跳び箱）、陸上、球技、水泳、遠足、登山など	小学校の体育の授業に合わせて実施（週2～3回）
障害者支援施設	身体障害者総合福祉センター内の体育館	ボッチャ	2～3か月に1度実施
学校	運動場、プール、体育館、地域のスキー場、スケート場	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般に加え、スキー、スケート	小学校の体育の授業に合わせて実施（週2～3回）
障害者支援施設	施設内のスペース、駐車場の空きスペース	運動会で玉入れ、ボーリング大会、ボッチャ、サイコロ遊び	週1回程度
障害者支援施設	運動スポーツに関するイベントを、外部施設を活用して実施	ソリ大会、スケート、プール、海水浴、マラソン大会、気球に乗るイベント、登山等	月1回程度
障害者支援施設	施設内のスペース、駐車場の空きスペース	レクリエーションとして体のストレッチやボール投げ	不定期（空いた時間があれば）

学校	体育館、プール	スラローム、フライングディスク、水泳学習、グラウンドゴルフ、卓球、バレー、ボーリング等	週2回
学校	体育館、自立活動室、運動場	サーキット運動、ボール運動等	自立活動の時間に運動を実施（週2～3回）
障害者支援施設	施設内の運動室、施設の駐車場	ボーリング、車椅子でのレース、凧揚げ、バランスボール等	週替わりで実施（20～30分）
障害者団体	施設内の運動室、外部施設（プール）	プール、風船バレー、車椅子ダンス、レクリエーション等	月2回程度
障害者支援施設	地域の体育館、特別支援学校の体育館	ボッチャ、マット運動、ボート遊び等	月1回（第4土曜日）、2時間から3時間程度
障害者支援施設	施設内及び近隣の公園等	プール、散歩、ストレッチ、バギーでの鬼ごっこ、風船バレー	週1～3回

B）　テキストマイニングによる分析結果

（ア）使用した分析ツールについて

ウェブサービスの「ユーザーローカル AI テキストマイニング」を用いて、分析した。

（イ）分析方法

①　頻出語に関する分析

「係り受け解析」機能を用いて分析を行った。この「係り受け分析」では、「名詞」に係る「形容詞」「動詞」「名詞」についての解析結果を表示している。
「スコア」は、出現回数やその係り受け関係が全組み合わせのうちに占める割合などを複合的に判断し、独自に算出した数値となる。「スコア」が高いほど、よりその係り受け関係が重要であることを示している。
また、単語の後に「（否: 50%）」等とついている場合、集計された係り受け関係のうち 50%が否定表現（例:「高い」→「高くない」）として使われていることを意味している。ネガポジは名詞にかかる形容詞がポジティブ（ネガティブ）な単語かどうかを表している。

②　相関関係の分析

「共起キーワード」機能及び「2次元マップ」機能を用いて分析を行った。
「共起キーワード」機能においては、文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結び、図示している。出現数が多い単語ほど大きく、また共起の程度が強いほど、太い線で描画される。
「2次元マップ」機能においては、文章中での出現傾向が似た単語ほど近く、似ていない単語ほど遠く配置される。距離が近い単語はグループにまとめ、色分けしている。

③　クラスター分析

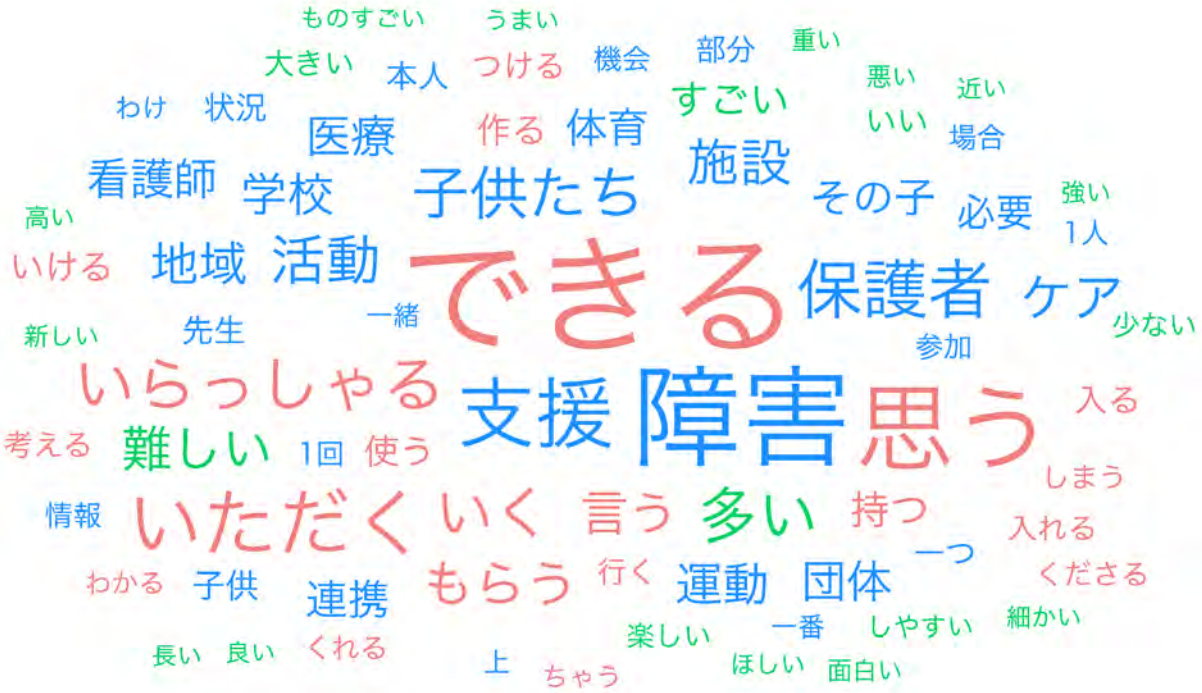
「階層的クラスタリング」機能を用いて分析を行った。文章中での出現傾向が似た単語をまとまりとして捉えるよう樹形図で表し、グループは色分けして表示している。

④　頻出率の分析

「単語出現頻度」機能を用いて分析を行った。文章中に出現する単語の頻出度を表にして示している。単語ごとに表示されている「スコア」の大きさは、テキストマイニング分析に入力した文書の中で、その単語がどれだけ特徴的であるかを表している。

（ウ）ヒアリング内容全体について

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ⅰ）からⅳ）のとおり。



① 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：医団1】の赤枠囲みのように、「体育ー授業」「学校ー先生」の出現頻度が高くなっており、医療的ケアを必要とする方の運動・スポーツの機会として、学校における体育の授業が大きな役割を果たしていることが、この分析結果からも見ることができる。個別のヒアリング結果においても、学校における体育の授業を通じて、運動・スポーツに参加する機会を得ている個人が多くおり（後述）、テキストマイニングの分析結果と同一の傾向が見られた。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：医団2】の赤枠囲みのように、「体調ー悪い」の組み合わせの出現頻度が高くなっており、医療的ケアを必要とする方の運動・スポーツの機会を創出するにあたって、体調面のケア、体調面が不安定であることを踏まえた対応が必要であることが推察される。このことは、ヒアリングにおいても、「体調の管理が難しく継続的に運動・スポーツの機会を作りにくい」という課題が聞かれており、分析結果と同一の傾向を示していた。

また、【表：医団2】の青枠囲みのように、「ハードルー高い」や「障害ー重い」という組み合わせの出現頻度も高い傾向があり、運動・スポーツの機会創出にあたり、課題感を持っている団体が多いと考えられる。ヒアリングにおいても、様々な工夫や配慮を行いながらも、スタッフの数の問題、継続性確保の問題等の課題を感じている団体が多くあったことと、同一の傾向であると考えられる。

【表：医団1】頻出語に関する分析結果（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
体育 - 授業	6.91	19
学校 - 先生	1.69	13
ケア - 必要	1.05	12
担任 - 先生	1.02	10
東京都 - 事業	2.06	8
教室 - 運営	1.83	6
障害 - ある子供	3.00	5
機会 - 提供	1.07	5
痰 - 吸引	0.88	5
医療 - ケア	0.36	5
支援 - 先生	0.28	5
先生 - 先生	0.28	5
地域 - 学校	0.15	5
理学療法士 - 作業療法士	2.50	4
機能 - 低下	1.82	4

【表：医団2】頻出語に関する分析結果（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
体調 - 悪い	ネガティブ	2.10	6
ハードル - 高い	中立	1.07	5
非常 - 多い	中立	0.09	4
障害 - 重い	ネガティブ	0.63	3
非常 - 高い	中立	0.43	3
イベント - 楽しい	ポジティブ	0.13	3
病院 - いい	ネガティブ	0.06	3
大会 - いい	ネガティブ	0.06	3
施設 - 多い	中立	0.06	3
団体 - 多い	中立	0.06	3
子供 - 多い	中立	0.06	3
ケース - 多い	中立	0.06	3
圧倒的 - 多い	中立	0.06	3
外来 - 若い	ポジティブ	1.00	2
垣根 - 低い	中立	0.86	2

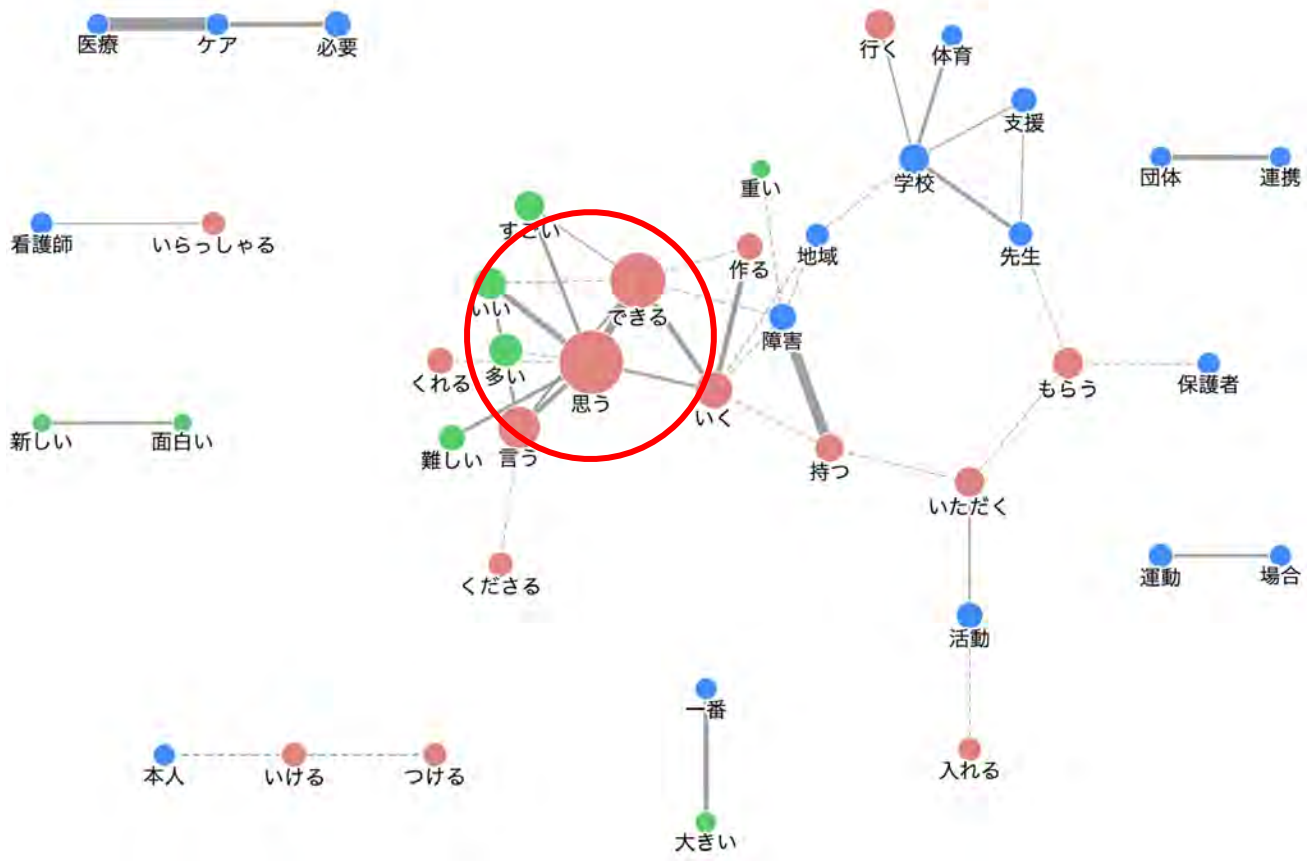
② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：医団１】の赤丸囲みのように、「思う」「できる」という単語と連動して「すごい」「いい」「多い」という形容詞が出現しており、運動・スポーツの機会の創出にあたって、ポジティブな感情や対応をしている団体の実態が推察される。

一方、同時に「難しい」という単語も出現しており、ヒアリング結果を踏まえると、様々な工夫や配慮を行っているが、それでも運動・スポーツの機会提供に対して難しさを感じている団体が多いと考えられる。個別のヒアリングにおいても同様の問題意識を多くの団体が有しており、相関関係の分析結果と整合的であると考えられる。

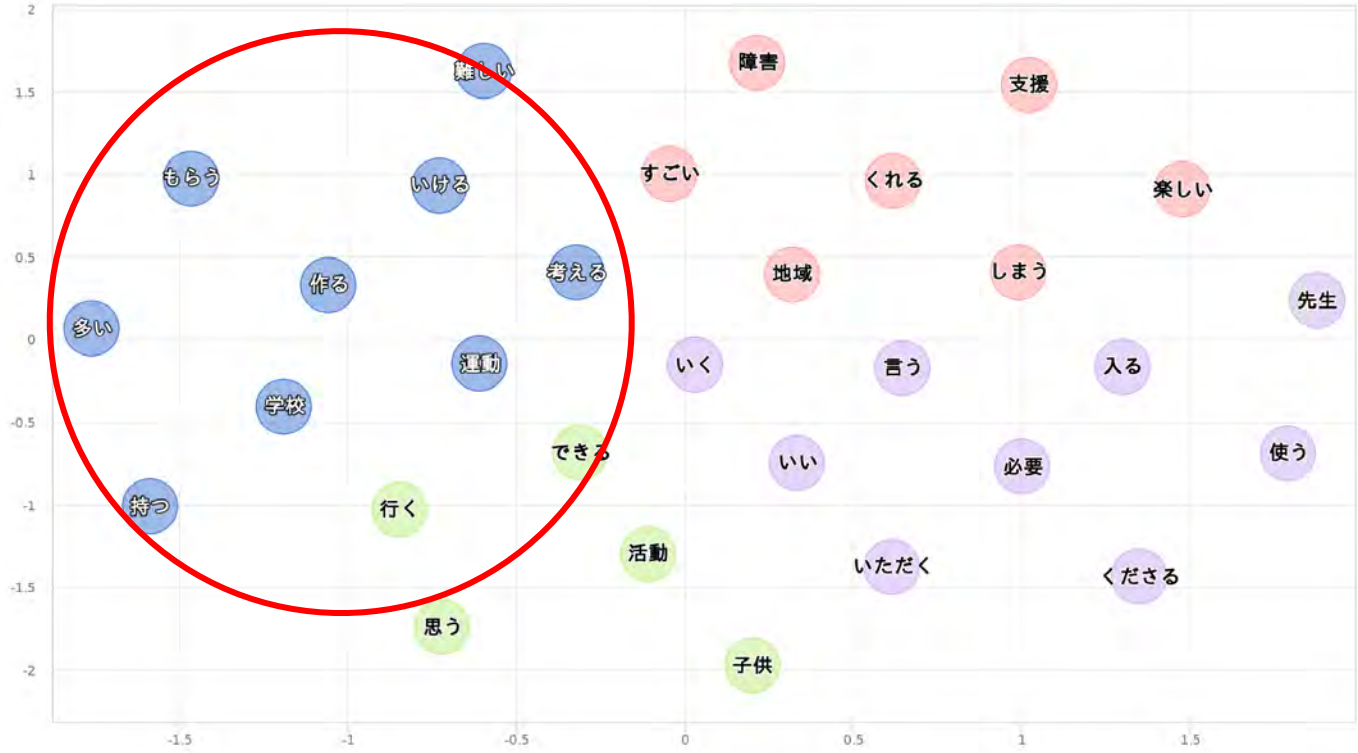
【図：医団１】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った（【図：医団2】）。図中の赤丸囲みのように、「学校」と似た出現傾向がある単語として、「運動」「考える」「作る」「持つ」「もらう」という単語が同じグループに分類されており、学校現場で運動・スポーツの機会を創出する上で、様々な工夫が必要と考えている団体が多いと考えられる。また、「難しい」という単語も近接して出現しており、実際の対応に難しさを感じている団体が多いことが推察される。この分析結果は、個々のヒアリング結果とも同一の傾向であると考えられる。

同時に「難しい」という単語も同じグループに分類されており、工夫や配慮と同時に課題感を持っている団体が多いと考えられる。

【図：医団2】相関関係の分析（2次元マップ）

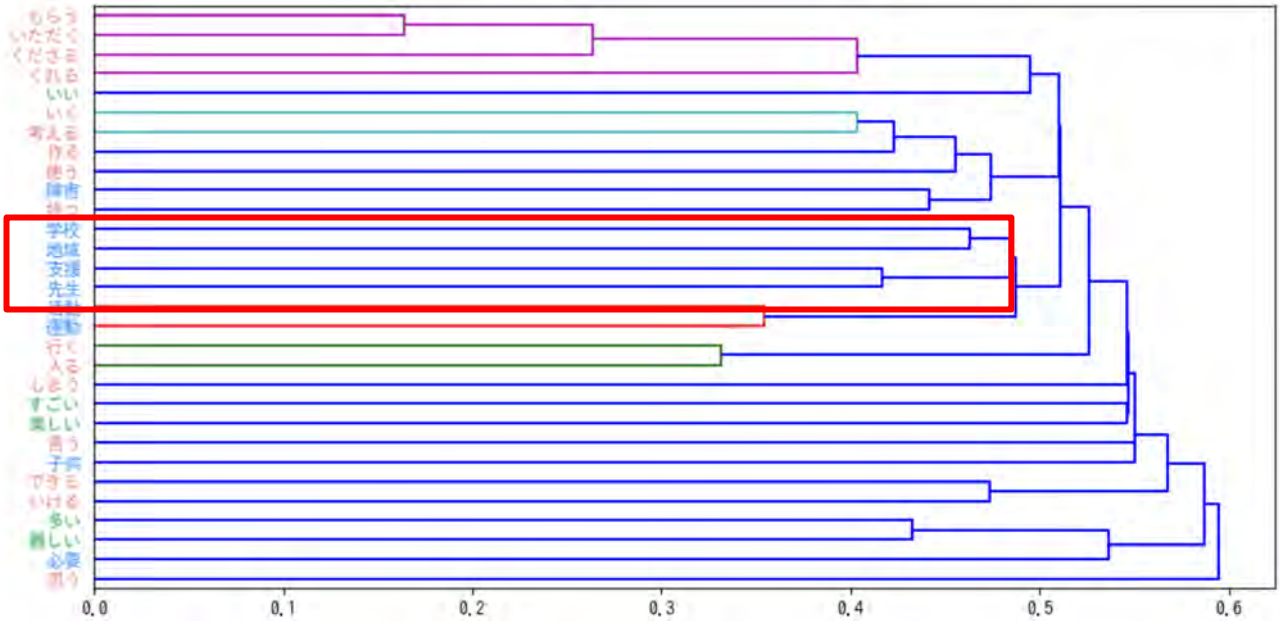


③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：医団3】の赤枠囲みのように、「学校」「地域」「支援」「先生」「活動」「運動」が同じグループに分類されており、運動・スポーツの機会創出を考える上で、学校だけでなく、地域での支援や活動の重要性を示唆している。

【図：医団3】クラスター分析結果



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

名詞については、【表：医団3】のとおり、「学校」「障害」「必要」「活動」「支援」の5つの単語の出現頻度が高く、運動・スポーツの機会を考える上で、学校の果たす役割が大きいことが推察される。他の分析結果とも整合的であり、個別のヒアリングにおいても同様の傾向が得られた。

【表：医団3】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
学校	219.01	204
障害	616.99	162
必要	141.62	148
活動	280.79	142
支援	424.45	132
先生	68.35	107
運動	216.76	106
子供	89.92	104
地域	241.90	100
一緒	31.48	88
保護者	347.68	86
子供たち	304.50	86
施設	257.86	83
ケア	263.17	82
看護師	187.32	81

【表：医団4】頻出率の分析（動詞）

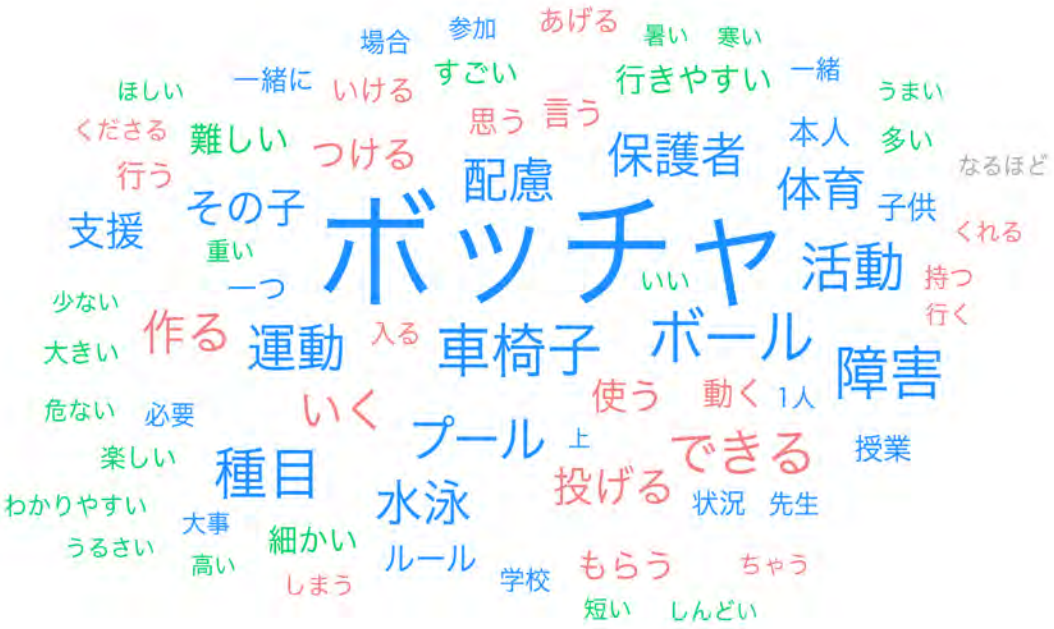
動詞	スコア	出現頻度
思う	193.04	614
できる	265.65	501
言う	82.06	326
いく	106.17	251
もらう	91.57	180
行く	21.18	170
いただく	142.80	165
持つ	53.59	144
使う	36.57	131
入る	30.88	121
作る	38.52	120
くれる	15.75	117
しまう	14.84	99
いける	35.57	95
くださる	16.09	92

【表：医団5】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
多い	109.89	212
いい	25.64	188
すごい	54.81	165
難しい	86.05	117
楽しい	17.77	90
大きい	18.13	44
少ない	15.07	38
良い	1.06	28
高い	4.14	27
うまい	5.41	24
悪い	1.33	19
ほしい	1.12	19
重い	5.84	18
長い	3.52	18
新しい	2.07	16

（エ）競技・配慮に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ｉ）からⅳ）のとおり。



② 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：医団6】の赤枠囲みのとおり、「体育ー授業」「学校ー先生」「担任ー先生」の出現頻度が高くなっており、学校における体育の授業が果たす役割の大きさが推察される。個人ヒアリングにおいても、運動・スポーツの参加機会として学校を第一にあげる方が多く、ヒアリング結果とも同様の傾向であると考えられる。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：医団7】の赤枠囲みのとおり、「ハードルー高い」の出現率が高くなっており、運動・スポーツの具体的な取組みについて話す内容の中にも「ハードルが高い」という感覚があると考えられる。例えば、学校ではできるが、学校の外で運動・スポーツを実施することに対しての「ハードルの高さ」が一例として想定される。

【表：医団6】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
体育 - 授業	2.50	5
学校 - 先生	1.33	4
担任 - 先生	1.33	4
体幹 - トレーニング	1.71	3
障害 - 理解	1.20	3
体育 - 内容	3.00	2
車椅子 - 娘	2.00	2
地域 - 啓発	1.20	2
トレーニング - トレーニング	0.86	2
立ち上がり - 練習	0.75	2
あたり - 配慮	0.46	2
装具 - 必要	0.40	2
車椅子 - 車椅子	0.35	2
地域 - 活動	0.17	2
活動 - 活動	0.17	2

【表：医団7】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

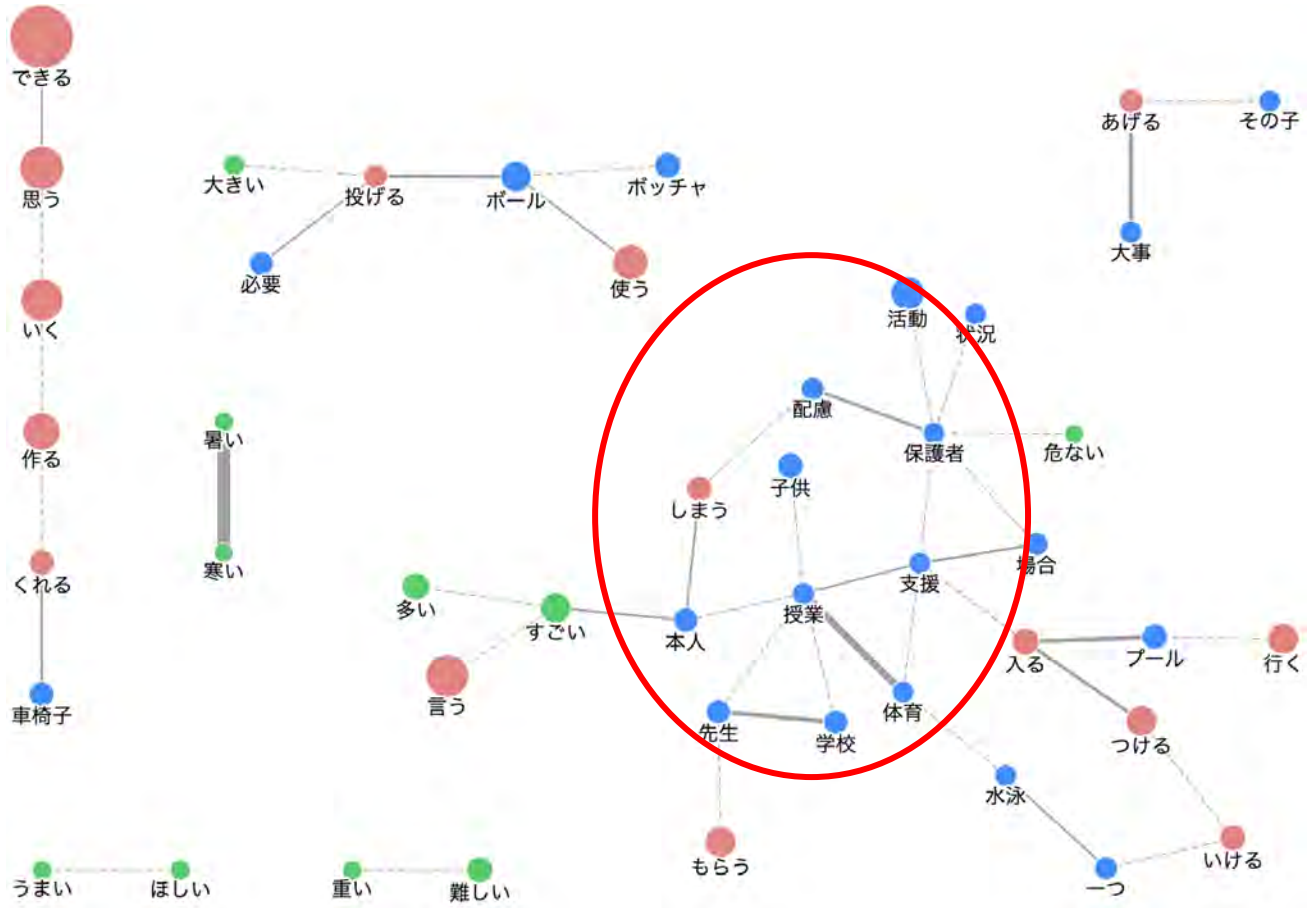
名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
ハードル - 高い	中立	1.00	2
一つ - 多い	中立	0.33	2
練習 - いい	ネガティブ	0.21	2
タイプ - いい	ネガティブ	0.21	2
大会 - いい	ネガティブ	0.21	2
特性 - 出やすい	中立	1.00	1
教室 - 近い	ネガティブ	1.00	1
ケース - しやすい	中立	1.00	1
自体 - ありがたい	ポジティブ	1.00	1
音 - しやすい	中立	1.00	1
音 - 素晴らしい	ポジティブ	1.00	1
とこ - 行きづらい	中立	1.00	1
子供たち - 行きづらい	中立	1.00	1
自分たち - 使いやすい	中立	1.00	1
衝動 - 出やすい	中立	1.00	1

② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

競技や配慮に関する発言の分析であるため、【図：医団4】の赤丸囲みのように、「授業」「体育」「学校」「先生」「支援」「子供」の相関関係が強く出ていることが推察される。また「保護者」という単語を軸に、「配慮」「支援」「活動」等の単語が相関しており、運動・スポーツの機会を創出する上で、保護者の果たす役割が大きいことが推察される。実際、有識者会議においても保護者の果たす役割についての指摘やコメントがあり、ヒアリングの分析結果とも同様の傾向を示していると言える。

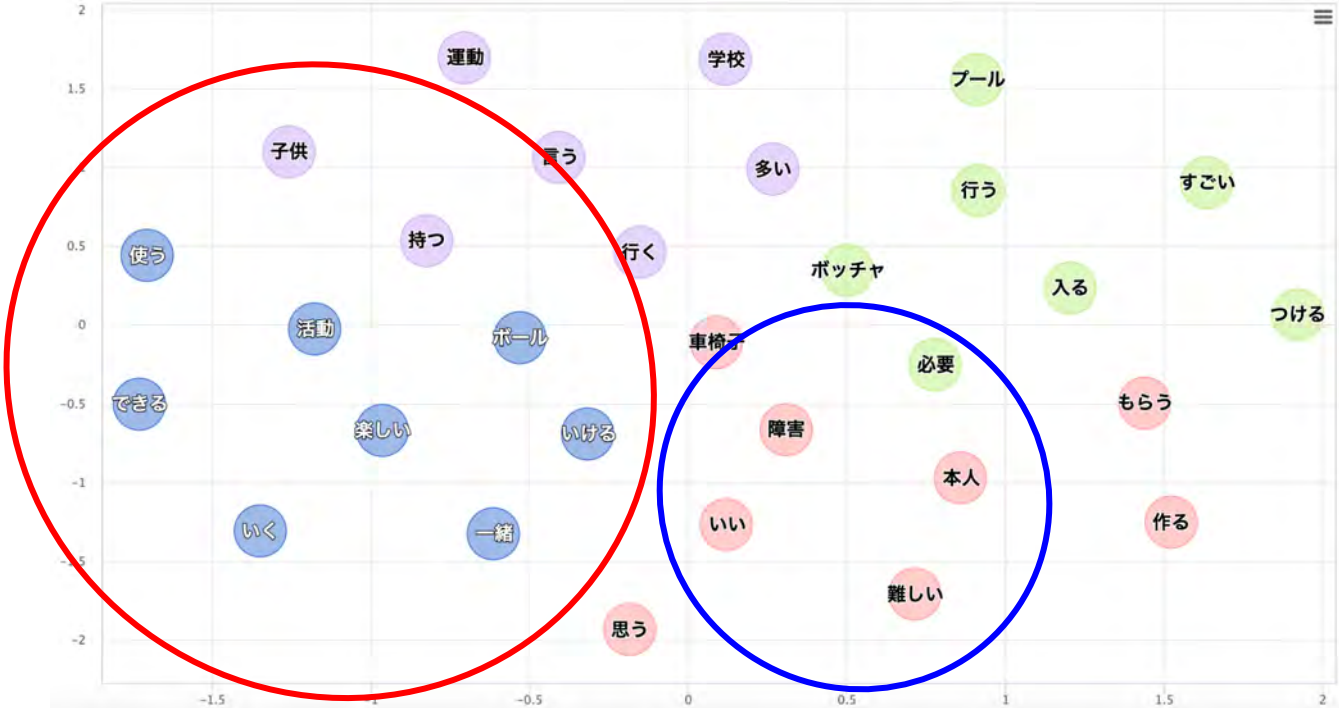
【図：医団4】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。【図：医団5】の赤丸囲みのように、「楽しい」と似た出現傾向がある単語として、「一緒」「できる」「使う」「いける」「ボール」という単語が分類され取り、各団体において、運動・スポーツの機会を創出するにあたり、ポジティブなスタンスで工夫がされていると考えられる。

また、【図：医団5】の青丸囲みのように、「本人」と同じグループに「障害」「難しい」「もらう」という単語が分類されており、運動・スポーツの競技や配慮について、各団体で様々な工夫がされているが、なお難しさを感じる場面が多いことが推察される。

【図：医団5】相関関係の分析（2次元マップ）



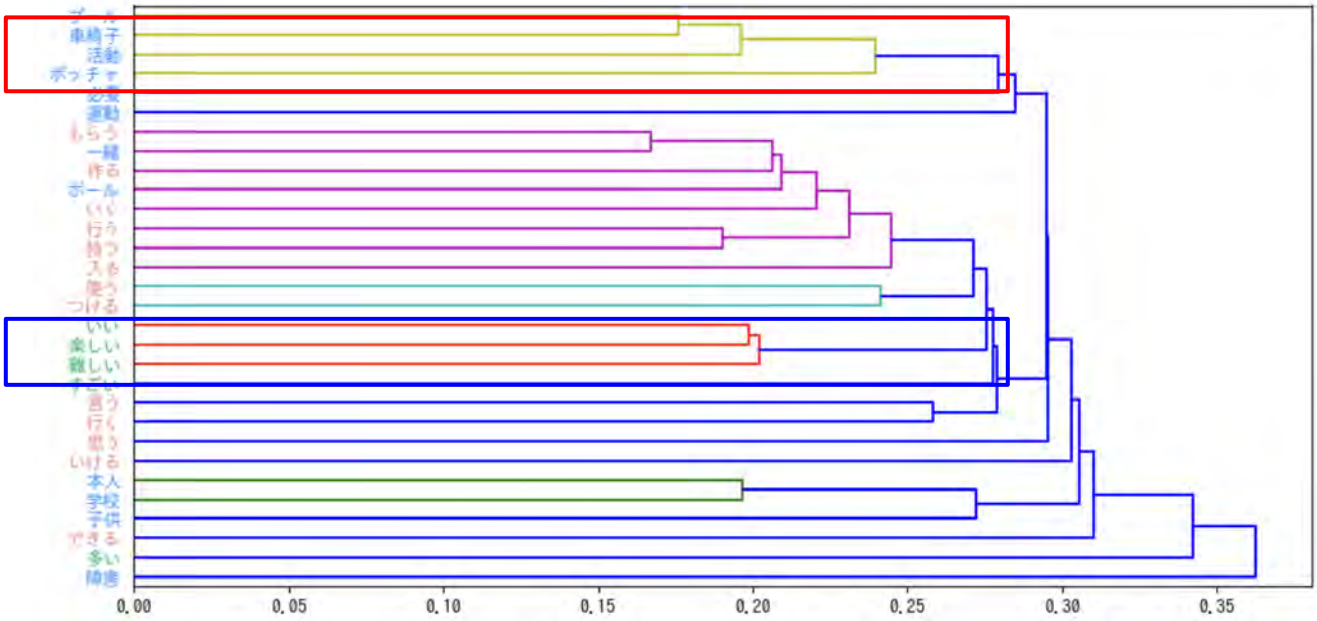
③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

競技に関連して、【図：医団6】の赤枠囲みのとおり、「プール」「車椅子」「活動」「ボッチャ」が同じグループに属しており、医療的ケアを必要とする方にとっての運動・スポーツとして、あまり動かずにできる、車椅子でもできる等の理由からプールやボッチャしか選択肢がない状況であると考えられる。

また、【図：医団6】の青枠囲みのとおり、「いい」「楽しい」「難しい」が同じグループに属しているのは、各団体において運動・スポーツの機会を提供する際に、楽しさを重視していることが推察されるが、同時に難しさを感じていることが推察される。

【図：医団6】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

名詞については、【表：医団8】のとおり、「ボール」「ボッチャ」「プール」という単語の頻度が高く出ており、競技・工夫としてのキーワードであることが推察される。

形容詞については、【表：医団 10】のとおり、「いい」「すごい」「多い」「難しい」「楽しい」の出現頻度が高く、ヒアリング結果を踏まえると、前向きに対応しようとしているが、日々の対応の中に課題感を抱えている団体が多く存在していることが推察される。

【表：医団8】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
活動	26.13	34
ボール	37.67	28
運動	21.35	26
障害	34.72	23
ボッチャ	169.00	19
子供	3.45	18
一緒	1.45	18
プール	18.98	17
車椅子	32.51	16
本人	4.21	15
学校	1.69	15
必要	1.72	14
先生	1.42	14
一緒に	2.27	13
場合	1.89	13

【表：医団9】頻出率の分析（動詞）

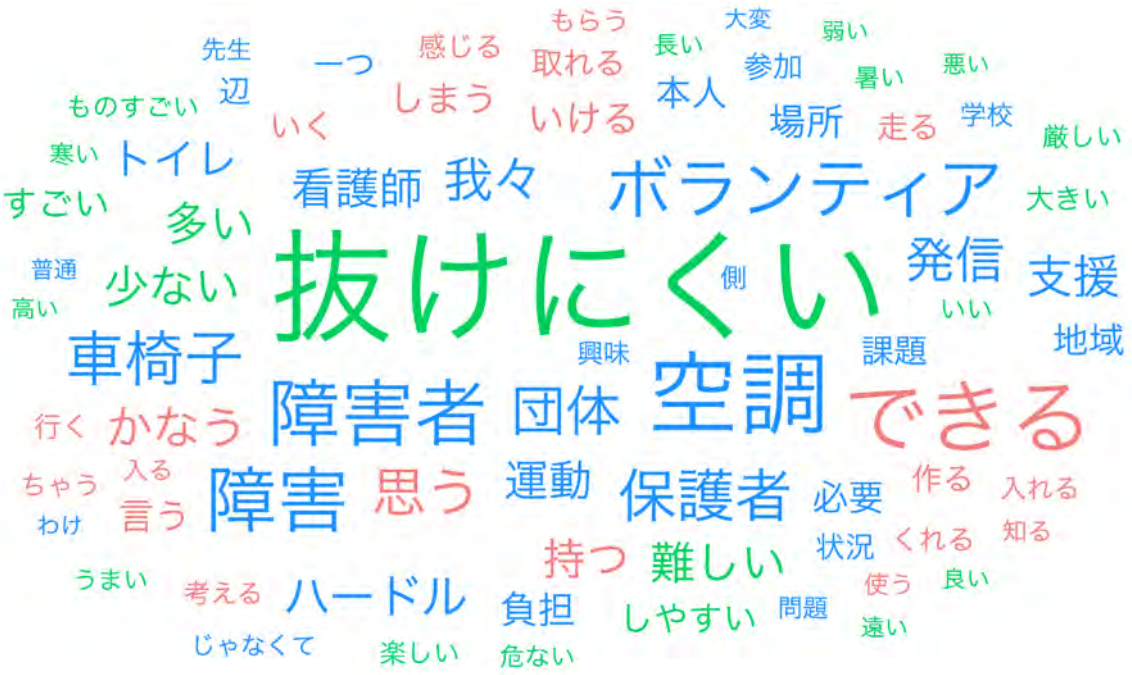
動詞	スコア	出現頻度
できる	7.34	77
思う	1.15	45
言う	1.54	43
いく	3.36	42
作る	3.35	34
使う	2.07	30
つける	2.11	23
もらう	1.75	23
行く	0.40	23
行う	1.16	17
入る	0.66	17
いける	0.99	15
持つ	0.65	15
しまう	0.31	14
くれる	0.23	14

【表：医団 10】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
いい	0.55	27
すごい	1.08	22
多い	0.84	17
難しい	1.77	15
楽しい	0.52	15
大きい	0.52	7
細かい	1.21	5
高い	0.15	5
ほしい	0.08	5
重い	0.31	4
暑い	0.17	4
うまい	0.16	4
危ない	0.37	3
短い	0.28	3
しんどい	0.07	3

（オ）課題に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ｉ）からⅳ）のとおり。



① 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：医団 11】の赤枠囲みのように、「特別支援学校ー卒業」「機能ー低下」「保護者ー送迎」という、具体的な課題を想起させる単語の組み合わせが高い頻度で出現していると考えられる。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：医団 12】の赤枠囲みのように、「イベントー楽しい」というポジティブな単語の組み合わせの出現頻度が高いが、運動・スポーツの機会が一過性であることを指摘するような文脈で出現しており、運動・スポーツの継続性に関する課題であると考えられる。また、【表：医団 12】の青枠囲みのように、「ハードルー高い」「歩きー厳しい」の組み合わせの出現頻度が高くなっており、医療的ケアを必要とする方の運動・スポーツの機会を創出する上で、歩くことに取り組むことについても課題があると考えられる。

【表：医団 11】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
特別支援学校 - 卒業	2.00	2
機能 - 低下	1.50	2
保護者 - 送迎	1.50	2
運動 - 機会	1.00	2
学校 - 先生	0.75	2
確認 - 必要	0.38	2
種目 - 設定	1.00	1
シューズ - ユニフォーム	1.00	1
道具 - 事象	1.00	1
必要 - マニュアル	1.00	1
用意 - 付き添い	1.00	1
場所 - 整備	1.00	1
リハビリ - 回数	1.00	1
障害 - 方々	1.00	1
運動 - 熱心	1.00	1

【表：医団 12】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
ハードル - 高い	中立	2.00	2
歩き - 厳しい	ネガティブ	1.50	2
イベント - 楽しい	ポジティブ	0.55	2
団体 - 多い	中立	0.29	2
圧倒的 - 多い	中立	0.29	2
道具 - られにくい	中立	1.00	1
必要 - なるい	中立	1.00	1
非常 - 重い	ネガティブ	1.00	1
障害 - 重い	ネガティブ	1.00	1
導 - 忙しい	ネガティブ	1.00	1
尿 - 忙しい	ネガティブ	1.00	1
設備 - やりやすい	中立	1.00	1
状況 - もったいない	ネガティブ	1.00	1
かなり - 忙しい	ネガティブ	1.00	1
参加 - しにくい	中立	1.00	1

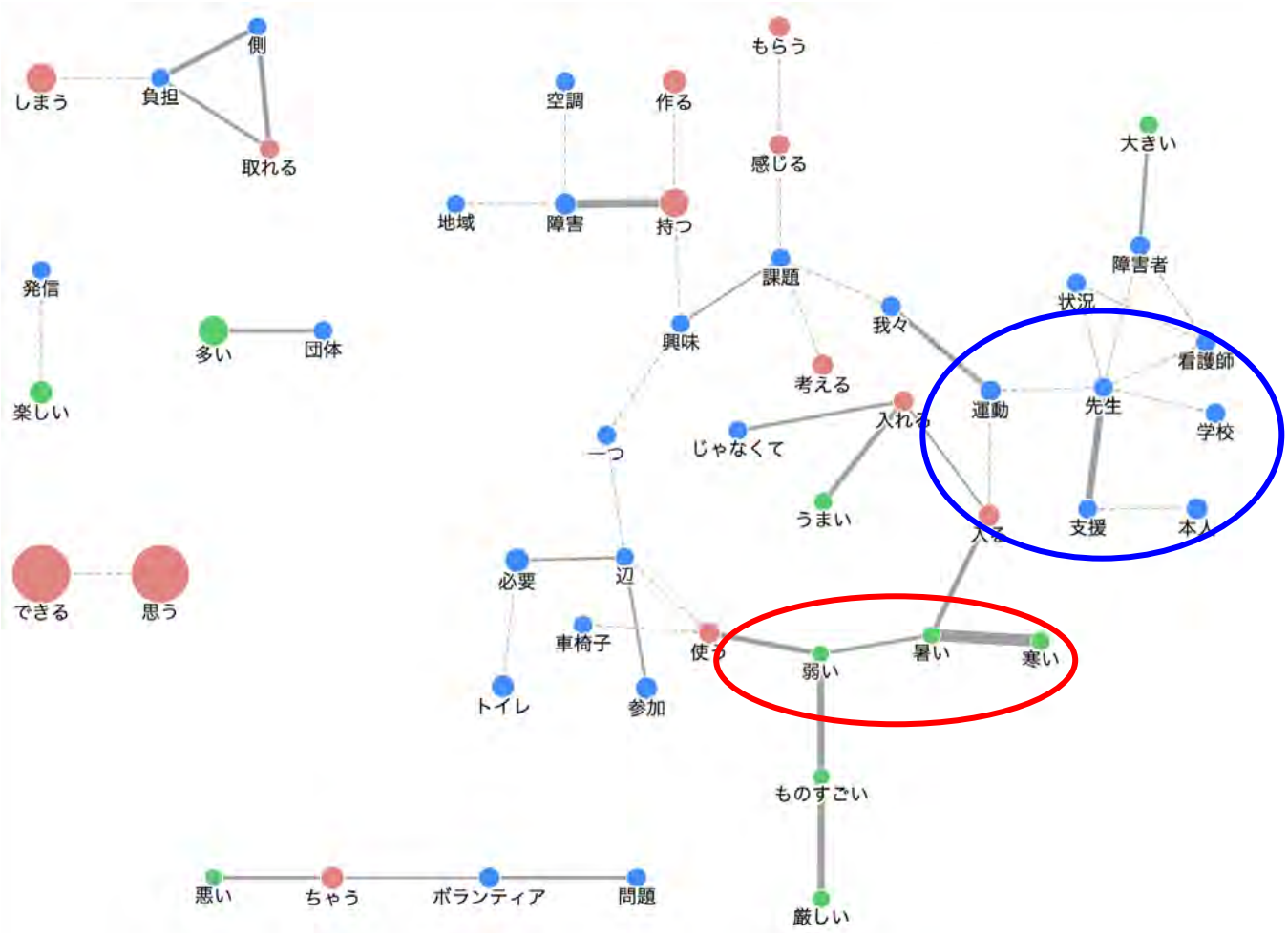
② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：医団7】の赤丸囲みのように、「弱い」という単語と連動して「暑い」「寒い」「厳しい」という単語が出現する傾向があり、医療的ケアを必要とする方の中で、体温調整が難しい方がおり、運動・スポーツの実施に際して課題となっていると考えられる。ただし、障害の有無と体温調整の困難さは相関関係がないとの有識者からのコメントもあり、個別性の高い課題であると考えられる。

また、【図：医団7】の青丸囲みのように、「先生」という単語を中心に、「看護師」「支援」「学校」「運動」という単語が出現しており、医療的ケアを必要とする方の運動・スポーツの実施に際し、教員や看護師の関与が重要であると考えられる。

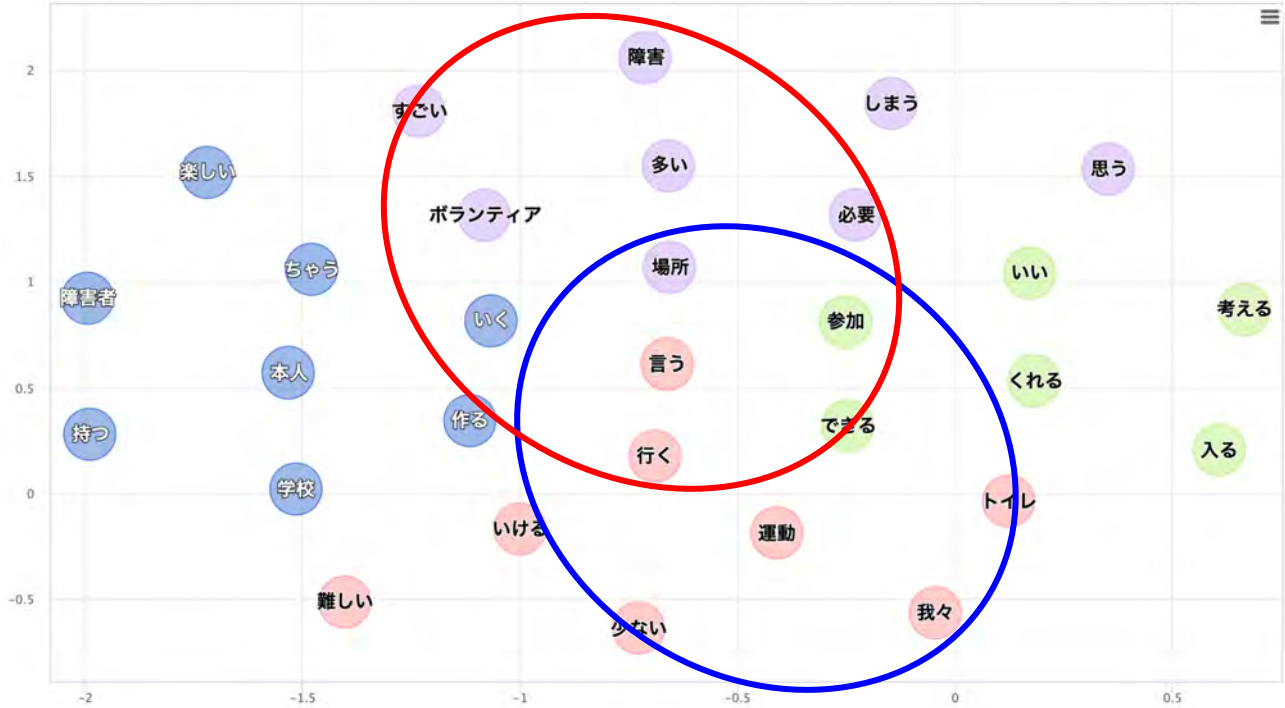
【図：医団7】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。【図：医団8】の赤丸囲みのように、「ボランティア」「場所」「必要」という単語が同じグループに分類されており、運動・スポーツの機会を創出するために、場所やサポートするスタッフの数や質に関する課題を感じている団体が多いことが推察される。

また、【図：医団8】の青丸囲みのように、「運動」「トイレ」「難しい」「少ない」という単語が同じグループに分類されており、医療的ケアを必要とする方のスポーツの実施に際し、トイレの確保が難しいことが推察される。

【図：医団8】相関関係の分析（2次元マップ）



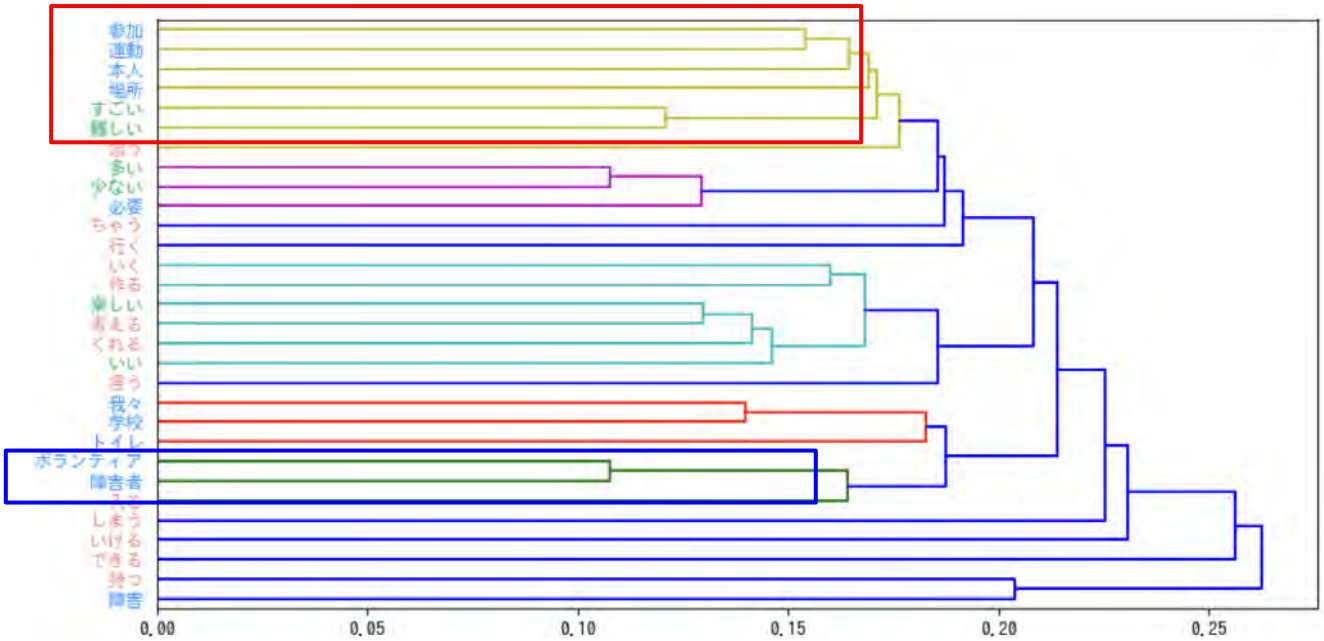
③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：医団9】の赤枠囲みのように、「参加」「運動」「本人」「場所」「すごい」「難しい」という単語が同じグループに分類されており、運動・スポーツへの参加そのものに対する課題感や場所に関する課題感を発言している団体が多いことが推察される。

また、【図：医団9】の青枠囲みのように、「ボランティア」「障害者」という単語が同じグループに分類されており、スポーツの機会の創出において、ボランティアの方の関与の重要性が伺える。

【図：医団9】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

名詞については、【表：医団 13】のとおり、「場所」「トイレ」「ボランティア」「空調」といった単語の出現頻度が高くなっており、医療的ケアを必要とする方の課題に直結する単語であることが推察される。

【表：医団 13】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
必要	1.97	15
場所	2.19	14
トイレ	2.85	12
障害	10.05	11
参加	1.12	11
本人	1.93	10
ボランティア	8.76	9
運動	3.06	9
障害者	10.51	8
我々	4.28	8
学校	0.49	8
空調	14.79	7
団体	5.72	7
支援	3.68	7
看護師	2.98	7

【表：医団 14】頻出率の分析（動詞）

動詞	スコア	出現頻度
できる	4.49	60
思う	1.97	59
言う	0.70	29
しまう	0.70	21
持つ	1.04	19
行く	0.25	18
いく	0.50	16
くれる	0.31	16
いける	0.75	13
作る	0.43	12
ちゃう	0.18	10
もらう	0.21	8
考える	0.18	8
使う	0.15	8
入る	0.15	8

【表：医団 15】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
多い	1.15	20
すごい	0.65	17
いい	0.22	17
難しい	1.14	12
少ない	1.15	10
楽しい	0.23	10
大きい	0.27	5
うまい	0.16	4
寒い	0.12	4
しやすい	0.58	3
厳しい	0.20	3
長い	0.10	3
暑い	0.09	3
悪い	0.03	3
良い	0.01	3

C） 具体的な工夫及び配慮について

現状及びテキストマイニングの結果も踏まえ、個別のヒアリング内容について詳細を以下に整理した。団体については、「小中学校」「高等学校」「学校外」「卒業後（卒業後の当事者のサポートをする団体。以下同じ。）」の4区分に整理した。

（ア）複数の団体で共通していた工夫及び配慮

- 運動・スポーツに取り組む目的、モチベーションを上げてもらうための丁寧な説明を本人や家族等に対して行っている。また、段階的に運動・スポーツへの参加のハードルを下げていく工夫（最初は見学、2回目は参加するが結果は重視しない、3回目は参加し結果も見ていく等）を行っている。
- 本人の特性や身体機能を理解して、スモールステップで指導する、既存の道具を改変して利用する等の工夫をし、一人一人の身体機能、特性を考慮し、本人に伝わりやすいように指導を行っている。
- 胃ろうや導尿の方の場合、定期的な排泄処理等が必要となるため、横になれる場所の確保やトイレ、洗浄場所の確保等の配慮をしながら、取り組む機会を作っている。
- 家の周りでの散歩や家の中で実施可能な運動・スポーツの形に落とし込み実践している。また、本人が楽しみながら取り組むことができるよう、遊びの要素（歌と一緒に行う、太鼓をたたきながら体を動かす等）を採り入れている。また、本人に目標を持ってもらい、ステップアップしていく感覚を持ってもらえるようコミュニケーションしている。
- 本人の能力に合わせて、運動・スポーツの選択肢を豊富に用意し、世間一般の「運動・スポーツ」の定義に捉われず、体を動かすこと全般を「運動・スポーツ」と定義して、本人が「運動・スポーツに参加した」と思える機会を増やしている。

（バランスボールを活用した運動、バドミントン、テニス、バレーボール、車椅子バスケットボール、釣りに参加する、綱引きを行う等）

（イ）「小中学校」における工夫及び配慮

- 中学年、高学年になり、「自分の力でなんとか実施したい」、「みんなと同じように取り組みたい」と考えるようになった際に、それが実現できるように動きをサポートするような自作の道具を用いることで、本人にやる気をサポートしている。
- サーキット運動や水遊び、ボール運動等、他の児童・生徒と一緒にできる運動・スポーツ、基礎的な体の動かし方を学ぶことのできる内容を体育の授業の中に採り入れている。例えば、ボッチャの場合、ボールを投げることが難しいため、専用のレール（ランプ）を用意し、そのレールの上にボールを這わせて、ボッチャがプレーできるようにしている。
- 保護者が胃ろうの操作がしやすいように穴を開けた衣服を作っており、教員がその衣服の着用の仕方の確認や、運動をする際にずれが生じていないかを確認しながら、体育の授業に参加している。
- 小学校のプールの授業の際に、教員だけでは不安という場合に、病院スタッフが参加し、一緒にプールに入り、サポートの仕方を見せながら伝えることで、学校の教員がプールのサポートの仕方を学んでいる。次回以降、病院スタッフのサポートなしにプールの授業が提供できる。
- 人工呼吸器をつけた児童・生徒が海に入る場合、スタッフが人工呼吸器の機械を担いでサポートを行っている。
- 自立活動の時間を活用しながら、自分の意思表示をサポートするために、タブレットを活用してどの運動・スポーツに取り組みたいかを選択できるようにすることで、本人が取り組みたい運動・スポーツを選んで実施できる。
- 経管栄養の児童・生徒については、栄養摂取に長時間を要することから、摂取時間帯をコントロールすることで、運動・スポーツの参加機会を作っている。具体的には、栄養摂取のタイミングと運動・スポーツ実施のタイミングを調整し、健康面を考慮しながら、時間調整を行っている。

（ウ）「高等学校」における工夫及び配慮

- オンラインツールによって、病棟にいても運動・スポーツに参加できる工夫をしている。具体的には、生徒が病棟から出られないときは、オンラインツールを活用し、リモートでボッチャに参加できるようにカメラなどを用意している。
- グラウンドゴルフについて、ルール上、電動車椅子の勢いを使ってボールを打つことを可能とすることで、車椅子の生徒も参加できるようにしている。
- 気温の変化で体調を崩しやすいため、冷暖房完備の校舎内のフロアや体育館で、スラローム、フライングディスク、水泳学習、ストレッチ（自立学習の一環として）等、体育館または校舎内での運動・スポーツを行う。

（エ）「学校外」における工夫及び配慮

- 対面での指導だけでなく、オンラインで身体の可動域を見ながら、ストレッチ方法の指導を実施。肩や足の関節の可動域を広げるための運動について、家にある布団や座布団等を使いながら体を支える方法等を伝達しつつ、具体的な動きを指導している。

- サポートを行うスタッフが、義肢装具士とコミュニケーションを取ることによって、利用者の義肢の特徴を理解した上で、日常生活で実施可能な運動・スポーツ種目を提供している。
- 呼吸状態の確認、顔色の確認、排痰の対応等を丁寧に行いながら、運動・スポーツに取り組んでいる。
- 一人で来所しても一緒に運動・スポーツができるような役割を担えるだけの人員数を配置している。
- 運動・スポーツの実施に関連して、例えばボール拾いや道具の片付け等、スタッフが全て行うのではなく、本人ができることは自ら実施してもらうことを意識して、本人が主体性を意識して、運動・スポーツに参加できるような機会を作っている。
- 勝ち負けを決めるのではなく、動きそのものを楽しむことができるようルールを設定している。例えば、的にボールを当てると音がなるような道具を自作したり、かごにボールが入ったら音がする道具を自作し、音が出たことを楽しむような機会にしている。
- スタッフ間で必要最低限の配慮するべき事項（例えば、胃ろうの方の場合、長時間うつ伏せにしない等）を共有した上で、保護者と役割分担しながら運動・スポーツの機会を提供している。

（オ）「卒業後（卒業後の当事者のサポートをする団体）」における工夫及び配慮

- （特に学校卒業後の当事者は体も大きくなっているケースもあり）呼吸器について、医師が設定している機器の設定は運動・スポーツを行うことを前提としていないため、適切な設定となるように調整、工夫を行っている。具体的には、スポーツで活動量が増えたとき、身体の酸素需要量が増えたときに、酸素を呼吸器に流したり、呼吸器の設定を調整したりしている。
- 気管切開をしていても、管が抜けないように気をつけたり、水が入らないようにすることで、プールや海での遊びを行うことができている。
- スポーツゲームの参加もスポーツ・運動の機会として捉え、本人が楽しむことを大前提にして、目線を動かしゲームを行う視線入力等でスポーツ参加等の機会を提供している。
- スタッフが近くに居ながら、運動・スポーツの機会を作るため、駐車場の空きスペースや、施設内のスペースを有効活用して、スポーツを実施している。
- 資金的に余裕があるわけではないため、自作の小道具や既存の製品をうまく組み合わせて、いかに日常的に運動・スポーツの機会を提供できるかを工夫している。

D） 具体的な課題について

（ア）複数の団体で共通していた工夫及び配慮

- 専用の道具（車椅子バスケット用の車椅子等）をどのように準備して良いのかが分からず、運動・スポーツに関心を持っても、そこから一歩踏み出せない。
- 怪我をさせないように配慮することと、本人の運動・スポーツに関わりたいという思いとのバランスを取ることに課題を感じる。
- 体調に左右され、毎週、運動・スポーツに参加できないことも多く、運動・スポーツの継続性をどのように担保するかに課題を感じる。

- 指導にあたるスタッフに継続的に関わってもらうためには、対価を支払う必要性を感じるが、利用者から料金を受け取り、スポーツを提供すると利用ハードルが上がると感じており、継続的な運動を実施することが難しい。
- 運動・スポーツができるかどうかは、住む地域の施設の整備状況や移動手段の有無が関係している。

（イ）「小中学校」における工夫及び配慮

- 体育の授業と次の授業の間の休み時間に導尿の処理を行い、着替えをして、移動するということを行わなければならず、時間的な余裕がない。
- 体育の授業以外に、総合的な学習の時間を使って近隣のスポーツセンターを使った運動・スポーツの機会を作ろうとしたことがあるが、送迎の問題や、本人のモチベーションの問題があり、参加につながらない。

（ウ）「高等学校」における工夫及び配慮

- 学校の特定の場所にはスロープがないため、物理的に移動が難しいため、運動・スポーツの機会が制限されるケースがある。
- 外部の練習会や大会に出場して欲しいが、トイレ介助や移動のサポート等が必要となり、学校だけで対応することが困難である。

（エ）「学校外」における工夫及び配慮

- 体温調整が難しい方の場合、運動・スポーツを行う施設の機能として室温調整ができる場所でないと参加することが難しい。
- ADL を向上させる機能を有する車椅子の利用が可能なスポーツセンターまでの距離が遠く、取り組むことができる日が限られており、いつでも取り組むことができる状況にない。
- 訪問リハビリの場合、回数が限られており、毎日訪問することができないため、運動・スポーツが定着しない。
- 「生涯スポーツ」の場所として、身の回りにはスポーツ団体が多くあるが、それらの多くは競技系のスポーツ団体であり、ルールや勝ち負けにこだわらず、運動そのものを楽しむという発想で運動・スポーツの機会を提供している団体が少ない。
- 本人がどのような種目で、どの程度の時間、どの程度の強度で運動・スポーツに参加できるのかについて、医師が基準を示し、この基準に基づき、学校、学校外、外部施設で共通して運動・スポーツに参加できる体制が必要。しかし、医師に指示を仰いでも、前例がないため難しいと判断されてしまうケースが少なくない。

（オ）「卒業後」における工夫及び配慮

- 障害を持った方の余暇活動を保護者がサポートし続けることには限界があるが、余暇活動であるが故に、優先度が下げられ、結果として本人の身体機能の低下を招いている。
- 学校卒業に伴い、動くこと自体の機会が減ってしまう。作業所等においても、座ったままでの作業が中心となり、運動の機会を作りにくい。
- 医療器具が運動・スポーツを行うことを前提としていないため、抜けにくいカニューレや、運動・スポーツに適した器具を 3D プリンターで作るプロジェクトを行ったが、医療デバイスとしての承認を得ることにハードル（認可を得るための安全

基準等の法令、器具を作るための費用に対しての補助が出ない）があり実現しなかった。

- グループホームという施設の特性上、運動・スポーツの時間を既存スタッフで作ることに限界を感じる。既存スタッフでは人員不足であり、外部機関等の協力が必要。

iv. 調査結果及び分析（個人）

A） 運動・スポーツの実施状況等の現状

本事業を行う上で事前に行ったヒアリングでは、「都市部」と「地方部」に運動・スポーツの実施状況や、運動・スポーツの提供場所等に大きな違いがあるのではないか、という仮説があった。

したがって、この仮説を検証するため、個人ヒアリングを通じて、対象となる方がどのような場所で、どのような運動・スポーツに取り組んでいるか、どのくらいの頻度で行っているか等の現状を明らかにし、「都市部」と「地方部」に分けて整理を行った。

都市部及び地方部ともに、自宅で運動・スポーツに取り組む方が多かった。学校やリハビリテーションセンター、地域の運動施設を利用するケースもあった。

実施される運動・スポーツの種類については、ボッチャに取り組む方が多く、都市部と地方部で大きな違いはみられなかった。また、自宅での階段の上り下り、掴まり歩き、自宅周辺の散歩に取り組む方が多かった。

頻度については、自宅では、週1回～毎日、1日 20 分～2時間程度、運動・スポーツに取り組んでいる方が多かった。施設利用の場合、週1回～月1回、1時間程度、運動・スポーツに取り組んでいる方が多く、都市部、地方部に差はなかった。

＜都市部＞

運動・スポーツの提供場所	運動・スポーツの種類	頻度
自宅、学校	ボッチャ、バスケットボール、四つ這い移動	週2～3回（各2～3時間）
学校、児童発達支援センター	リハビリを目的としたマッサージ、手や背中のマッサージ、マット運動	・リハビリを目的としたマッサージ（週1回） ・手や背中のマッサージ、マット運動（週数回・体育の授業）
自宅	座りながらお尻歩きでの移動	1日1～2時間
自宅	掴まり歩き、マンションの階段の上り下り	1日1～2時間。マンションの階段上り下りは週に2～3回 30 分以内。
学校（体育館、運動部屋）	ボッチャ、サッカー、フライングディスク、シッティングバレー	毎朝 20 分程度 ボッチャは月1回、1時間程度実施
体育館、自宅近辺	ボッチャ、散歩	ボッチャ：月1回、2時間弱 散歩：週1回、1時間
学校	学校での運動・スポーツ種目	週2回、40 分程度

地域のテニス練習場、障害者スポーツセンター	テニス	月1回

＜地方部＞

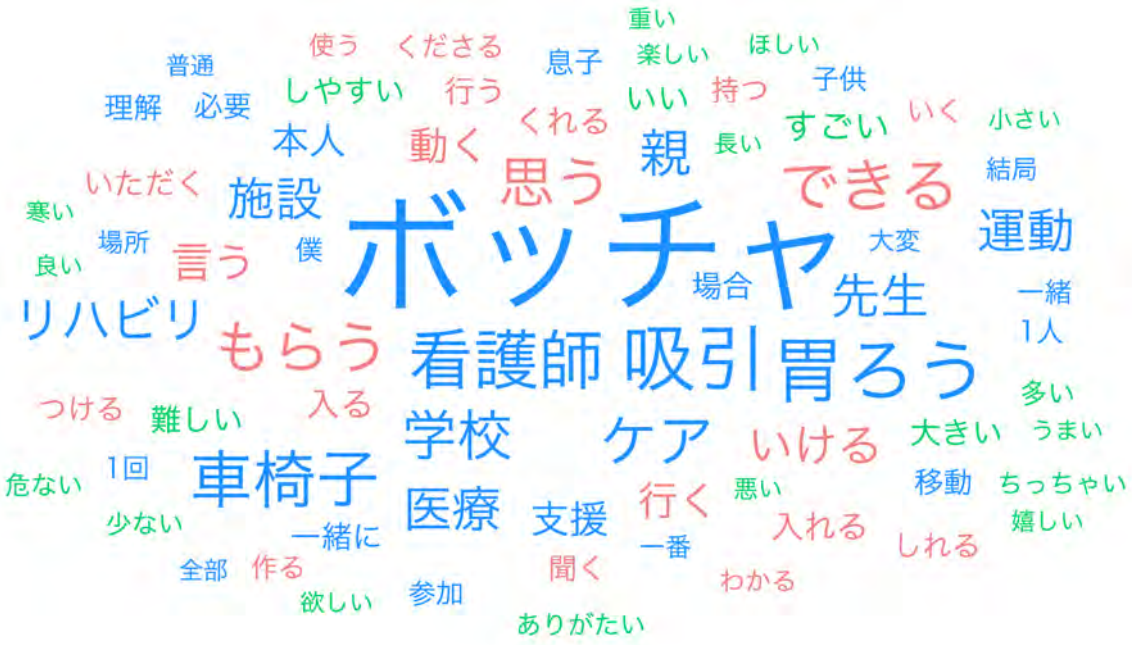
運動・スポーツの提供場所	運動・スポーツの種類	頻度
車椅子陸上 散歩（近所）	散歩、車椅子陸上	車椅子陸上（週1回） 散歩（週1回）
障害者スポーツセンター	ボッチャ	月2回の定例練習 1回あたり3～7時間
学校	ウォーキングでぶらぶら歩き、少しゆっくり歩く感じでスロープを上ったり下ったり、階段の上り下り、体を動かす軽い　ストレッチ、フォークダンス、ハンドサッカー、ボッチャ	週1～2回
学校、自宅、放課後等デイサービス	体操、座位での跳躍器具での運動、ブランコ、バランスボール、つたい歩き、四つ這いでの移動など	毎日、1時間程度

B）　テキストマイニングによる分析結果

個人ヒアリングの内容を文字起こしし、その上でテキストマイニングツールを活用して分析を行った。スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。

（ア）ヒアリング内容全体について

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ⅰ）からⅳ）のとおり。



① 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：医個1】の赤枠囲みのとおり、「学校ー先生」「吸引ー必要」「薬ー注入」の組み合わせの頻度が高く出現している。このことは、ヒアリングにおいても、具体的な医療的ケアについての発言が多くあったことと、この分析結果は整合的な結果と考えられる。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：医個2】の赤枠囲みのとおり、団体ヒアリングと同様に「体調ー悪い」の組み合わせの出現頻度が高くなっており、運動・スポーツに参加する際に、安定した体調であるかどうかが重要であると考えられる。また、【表：医個2】の青枠囲みのとおり、「練習ー楽しい」の組み合わせの頻度が高くなっていることから、運動・スポーツに対してポジティブな感情を持っていることが伺える。

【表：医個1】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
学校 - 先生	0.56	8
吸引 - 必要	1.17	7
息子 - 娘	1.11	5
ケア - 必要	0.62	5
薬 - 注入	1.82	4
ボッチャ - 教室	0.71	4
体育 - 授業	0.69	4
サブ - 先生	0.16	4
普通 - 学校	0.13	4
親 - 大事	1.33	3
階段 - 上り	1.20	3
本人 - 体調	0.86	3
運動 - 部分	0.63	3
障害者 - 教室	0.43	3
先生 - 先生	0.09	3

【表：医個2】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
体調 - 悪い	ネガティブ	1.25	4
でく - ださい	中立	2.40	3
練習 - 楽しい	ポジティブ	0.52	3
体操 - 丸い	中立	3.00	2
風邪 - ひきやすい	中立	2.00	2
アドバイス - 欲しい	ネガティブ	0.46	2
理解 - 良い	ポジティブ	0.46	2
看護師 - ありがたい	ポジティブ	0.46	2
言い方 - 悪い	ネガティブ	0.38	2
学校 - 楽しい	ポジティブ	0.26	2
病院 - 大きい	中立	0.20	2
本人 - 大きい	中立	0.20	2
コンパス - 難しい	ネガティブ	0.18	2
人数 - 多い	中立	0.14	2
意味 - いい	ネガティブ	0.05	2

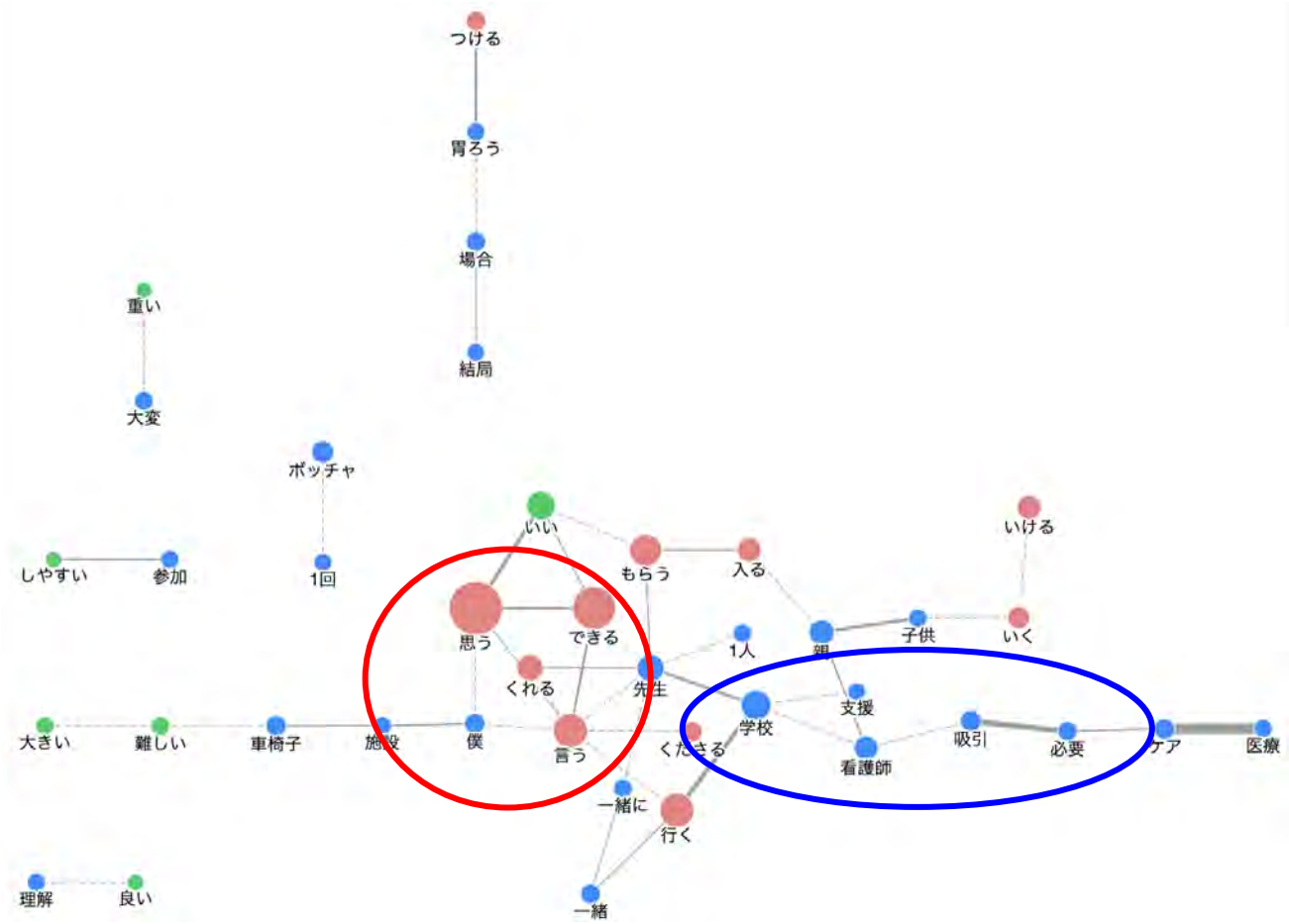
③　相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：医個１】の赤丸囲みのとおり、「思う」「できる」という単語と連動して「僕」や「先生」「学校」という単語が関連して出現しており、教員や学校の協力を得ながら、運動・スポーツに参加できているという状況が想定される。

また、【図：医個１】の青丸囲みのとおり、「看護師」「吸引」「支援」「学校」も一つのグループになっており、医療的ケアを必要とする方が運動・スポーツに参加する際に、看護師の存在が非常に重要であることが、個人ヒアリングの結果からも推察できる。

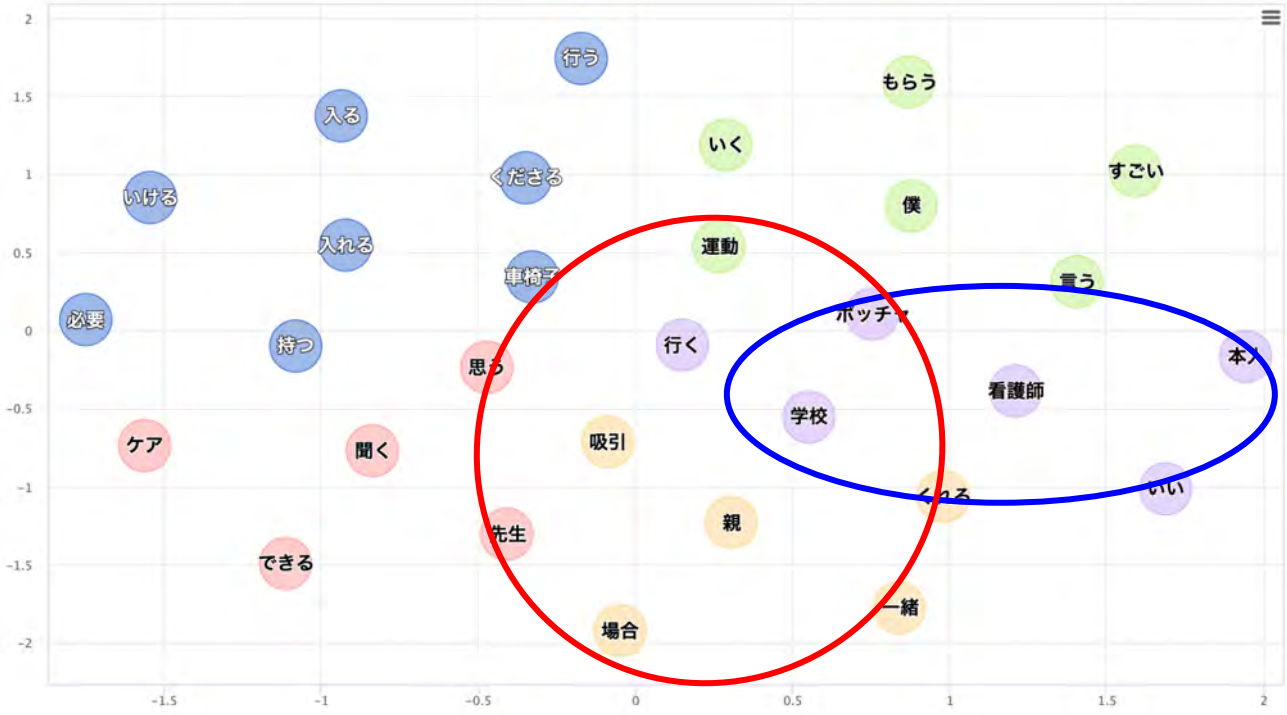
【図：医個１】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。【図：医個2】の赤丸囲みのとおり、「親」「吸引」「一緒」が同じ出現パターンとなっており、個人の運動・スポーツの機会を想定した際に、保護者の果たす役割が大きいと考えられる。

また、【図：医個2】の青丸囲みのとおり、「学校」「看護師」「本人」が同じ出現パターンとなっており、学校において、看護師の果たす役割の大きさが伺える。

【図：医個2】相関関係の分析（2次元マップ）

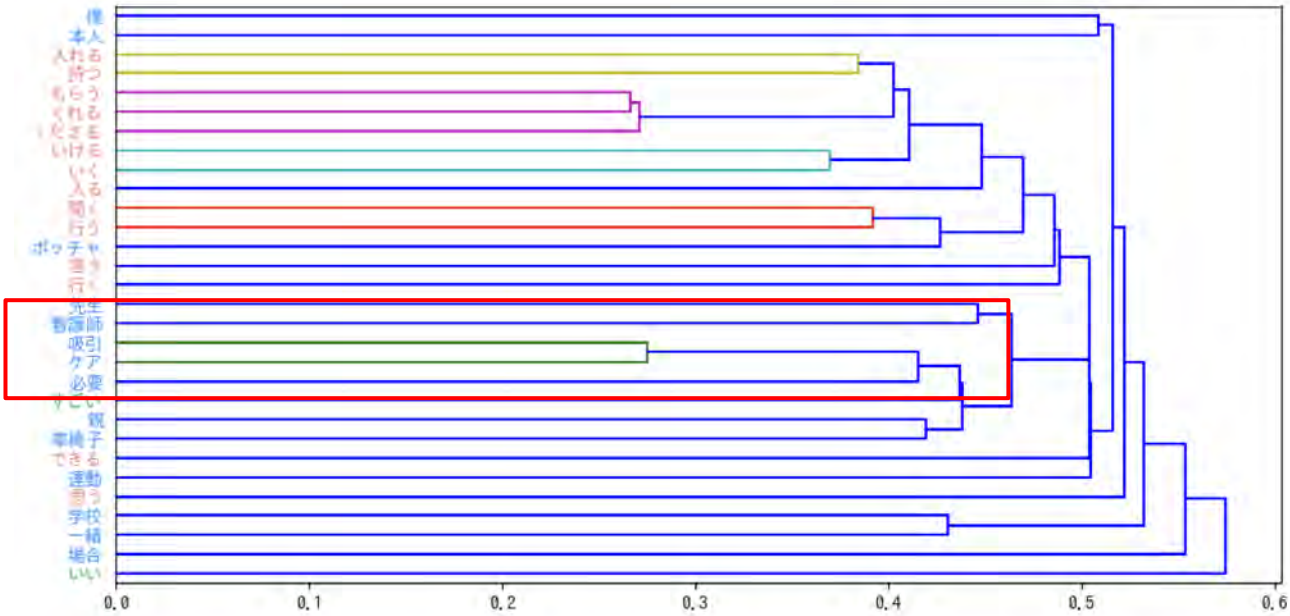


④　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：医個3】の赤枠囲みのとおり、「先生」「看護師」「吸引」「ケア」「必要」が同じグループに分類されており、個人ヒアリングの場合、具体的な医療的ケアのニーズに関する発言が多くあったことと同様の傾向である。

【図：医個3】クラスター分析



⑤　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

名詞については、【表：医個3】のとおり、団体ヒアリングと同様、「学校」「先生」という単語の出現頻度が高く、加えて「障害」「必要」「活動」「支援」の5つの単語の出現頻度が高く、運動・スポーツの機会を考える上で、学校の果たす役割が大きいと考えられる。

【表：医個3】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
学校	140.92	158
先生	94.30	128
親	113.28	109
看護師	237.42	95
ボッチャ	827.83	76
吸引	305.09	64
車椅子	224.20	61
運動	90.58	61
ケア	168.89	60
僕	14.94	59
本人	46.05	55
一緒	11.97	53
場合	22.90	48
必要	17.73	47
一緒に	22.02	43

【表：医個4】頻出率の分析（動詞）

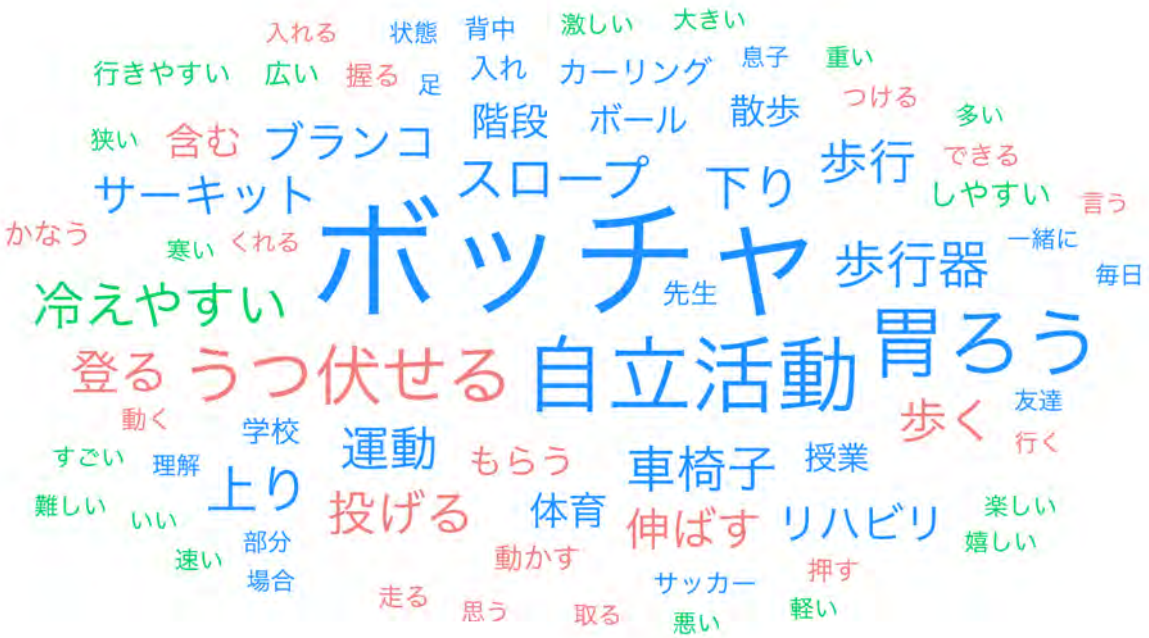
動詞	スコア	出現頻度
思う	57.18	326
できる	66.27	239
言う	21.93	165
行く	19.74	164
もらう	62.11	146
くれる	10.69	96
いける	24.51	78
入る	12.58	76
いく	6.78	60
入れる	10.17	54
持つ	7.58	52
聞く	5.97	50
くださる	4.32	47
行う	7.82	45
わかる	3.84	45

【表：医個5】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
いい	10.11	117
すごい	14.32	82
多い	4.75	41
難しい	8.18	33
大きい	8.25	29
楽しい	1.12	22
ほしい	1.12	19
少ない	2.89	16
悪い	0.83	15
しやすい	7.86	12
ありがたい	2.56	12
長い	1.60	12
欲しい	0.31	12
良い	0.20	12
危ない	3.74	10

（イ）競技・配慮に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ｉ）からⅳ）のとおり。



① 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。
「名詞ー名詞」の関係性については、【表：医個6】の赤枠囲みのとおり、「体育ー授業」「階段ー上り」「スロープー上り」といった、運動・スポーツに関する具体的な工夫に関する単語の出現頻度が高くなっている。
また、「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：医個7】のとおり、どの組み合わせの出現頻度も同じ程度であり、発言内容の個別性が高いことが推察される。ただし「素材ー大きい」については、運動・スポーツに参加するために、使用する道具の素材を変更したり、大きさを工夫する、という発言に基づくものであり、「大きいボールを利用することで、参加のハードルを下げる配慮を団体がしてくれた」といった、配慮に関するキーワードと考えられる。

【表：医個6】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
体育 - 授業	1.09	3
ボッチャ - カーリング	1.50	2
先生 - 一緒に	1.00	2
階段 - 上り	0.75	2
スロープ - 上り	0.75	2
ボッチャ - 休み	1.00	1
ボッチャ - 選手	1.00	1
移動 - おもちゃ	1.00	1
最初 - 準備	1.00	1
先輩 - 勉強	1.00	1
車椅子 - 姿勢	1.00	1
体重 - 安全	1.00	1
足 - 顔	1.00	1
運動 - 技	1.00	1
技 - 習得	1.00	1

【表：医個7】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
素材 - 大きい	中立	1.00	1
体重 - 行きやすい	中立	1.00	1
相当 - 寒い	ネガティブ	1.00	1
運動 - いい	ネガティブ	0.50	1
仰向け - いい	ネガティブ	0.50	1
開き - 悪い	ネガティブ	0.50	1
血流 - 悪い	ネガティブ	0.50	1
顔色 - 悪い	ネガティブ	0.50	1
座 - 広い	中立	0.50	1

② 相関関係の分析

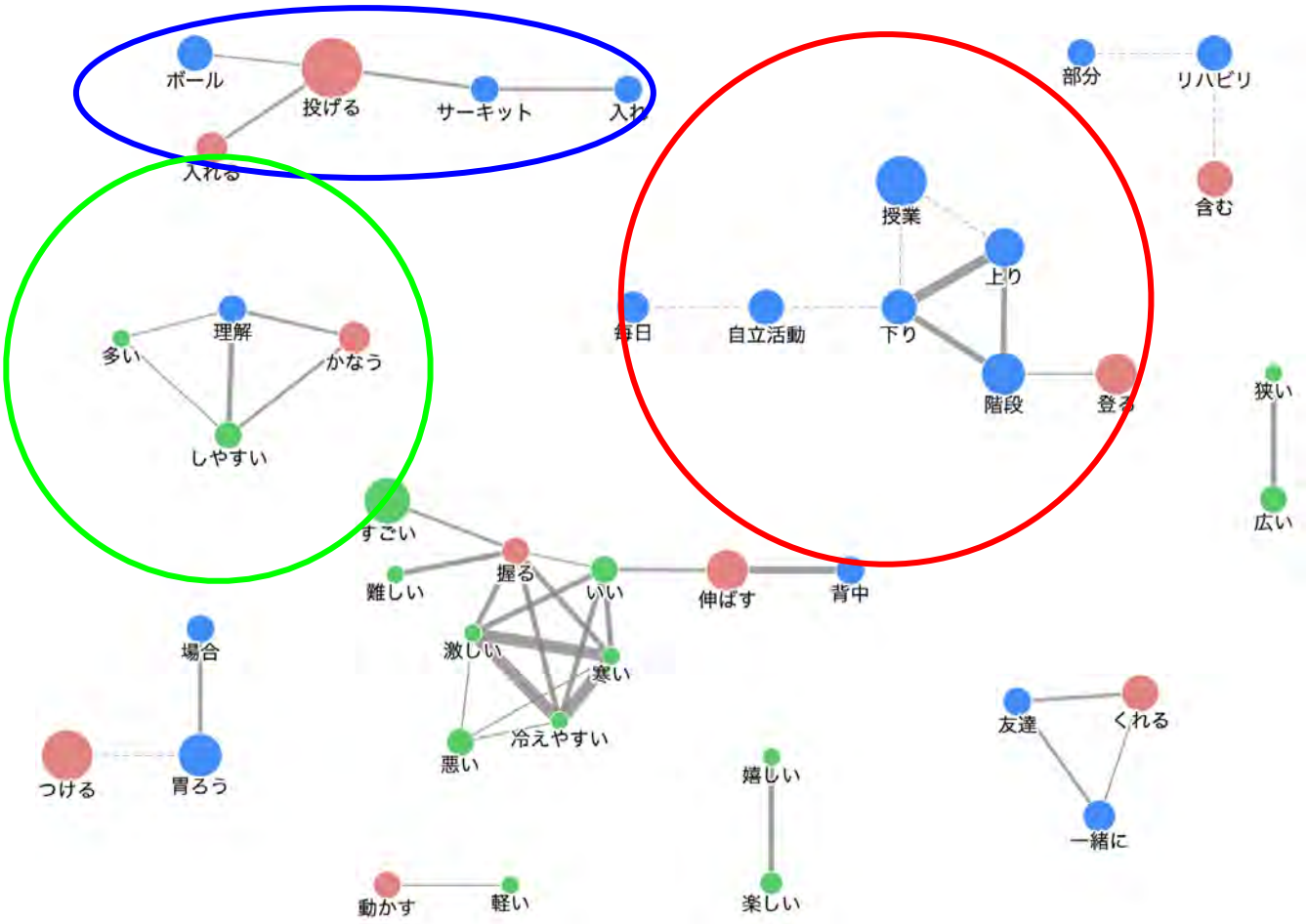
出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

競技や配慮に関する発言の分析であるため、【図：医個4】の赤丸囲みのとおり、「階段」「上り」「下り」「授業」「自立活動」の単語が、出現パターンが似ていることが分かる。医療的ケアを必要とする方が取り組みやすい運動・スポーツとして階段の上り下りがあることと考えられる。

また、【図：医個4】の青丸囲みのとおり、「投げる」という単語を中心に「入れる」「ボール」「サーキット」という単語が、似た出現パターンで出てきており、気軽に参加できる運動・スポーツとして、ボールを使った運動やサーキットトレーニングが選択されていると考えられる。

加えて、【図：医個4】の緑丸のとおり、「理解」「かなう」「しやすい」「多い」が一つのグループとして出現していることから、運動・スポーツの参加において、本人の特性を理解してもらうことで、本人や保護者の思いが叶うという体験をしている個人が多くいることと同様の傾向となっている。

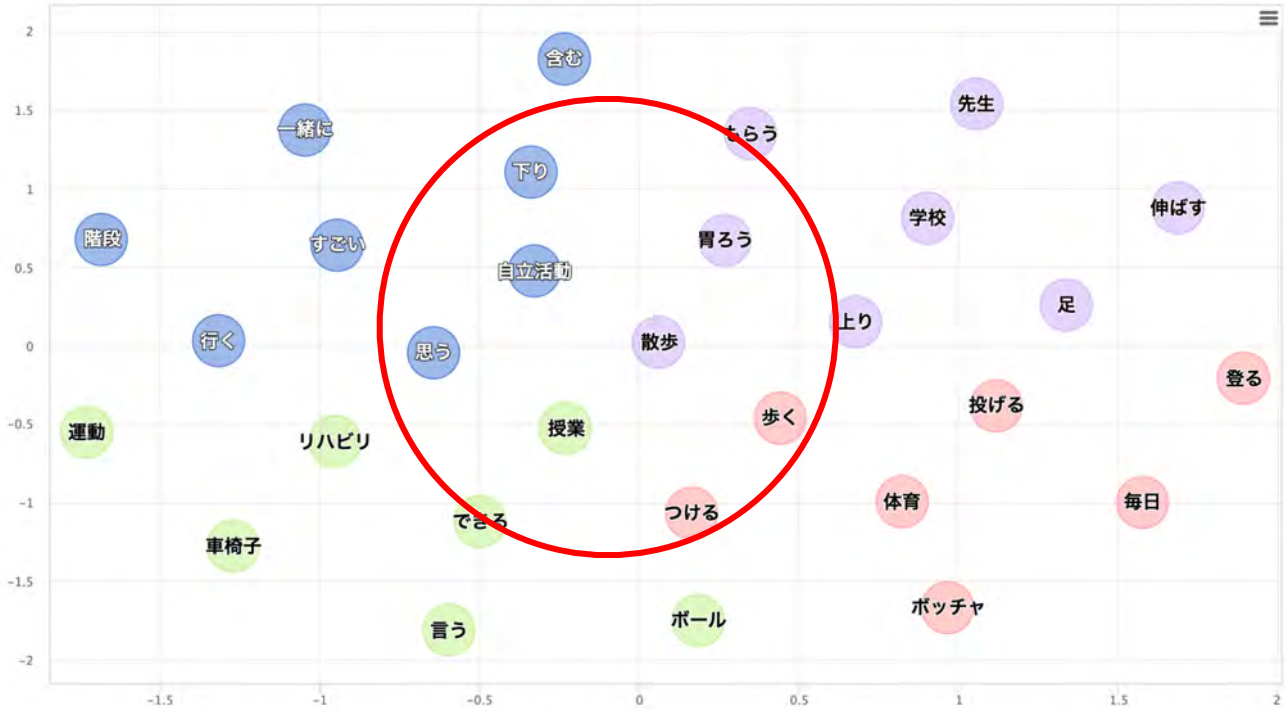
【図：医個4】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

グループの色分けは異なるが、【図：医個5】の赤丸囲みのとおり、「自立活動」「散歩」「授業」が近接した場所に現れており、運動・スポーツの機会としての授業や自立活動の位置付け、散歩という無理のない運動が選択されていることが推察される。

【図：医個5】相関関係の分析（2次元マップ）

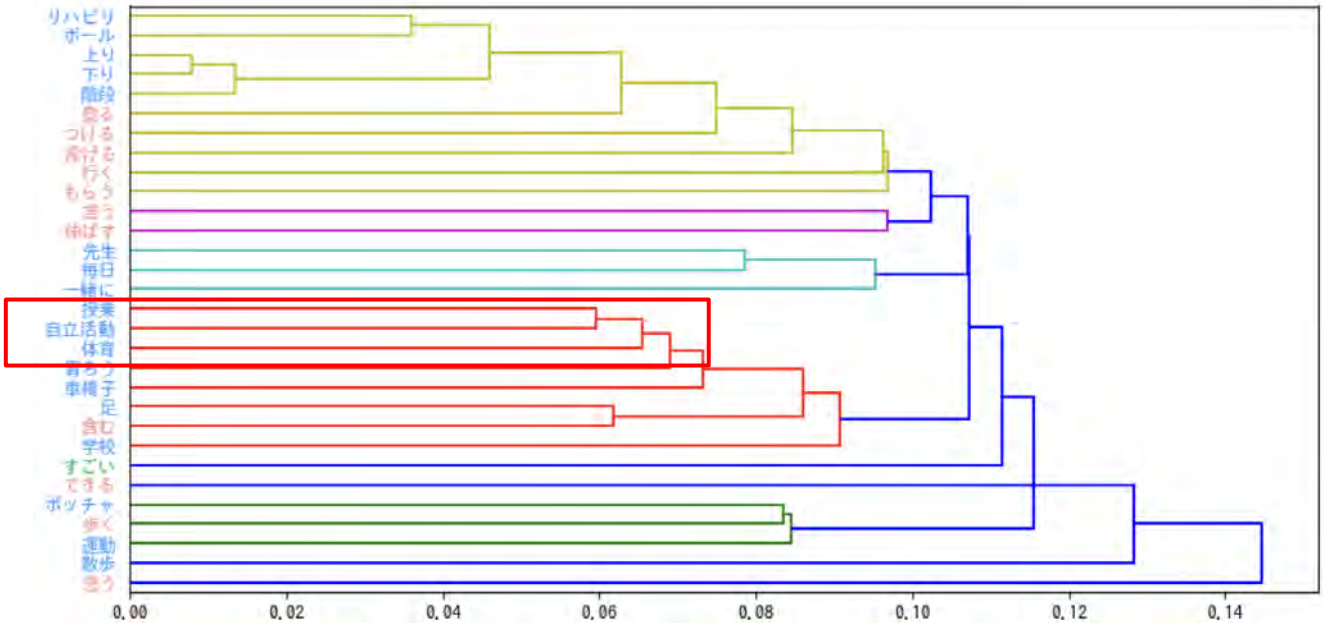


③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：医個6】の赤枠囲みのとおり、運動・スポーツの機会として「授業」「自立活動」「体育」が同じグループに属していることが分かる。

【図：医個6】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

名詞については、【表：医個8】のとおり、「ボッチャ」の頻度が最も高く出ており、車椅子でもできる運動・スポーツであり、また安全性等を考慮して、保護者や指導者側が、ボッチャを選択している可能性が推察される。

動詞については、【表：医個9】のとおり、「歩く」「投げる」「登る」「伸ばす」といった、単語の出現頻度が高く、運動・スポーツの種目としてのボッチャやボール運動、ストレッチ等が選ばれていたというヒアリング結果を裏付ける傾向であると考えられる。

【表：医個8】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
ボッチャ	128.32	15
運動	6.09	13
学校	1.28	13
先生	1.05	12
授業	2.26	10
胃ろう	51.92	8
階段	3.93	8
散歩	2.93	8
上り	11.96	7
車椅子	8.63	7
自立活動	61.38	6
下り	8.34	6
リハビリ	4.78	6
体育	4.01	6
ボール	2.47	6

【表：医個9】頻出率の分析（動詞）

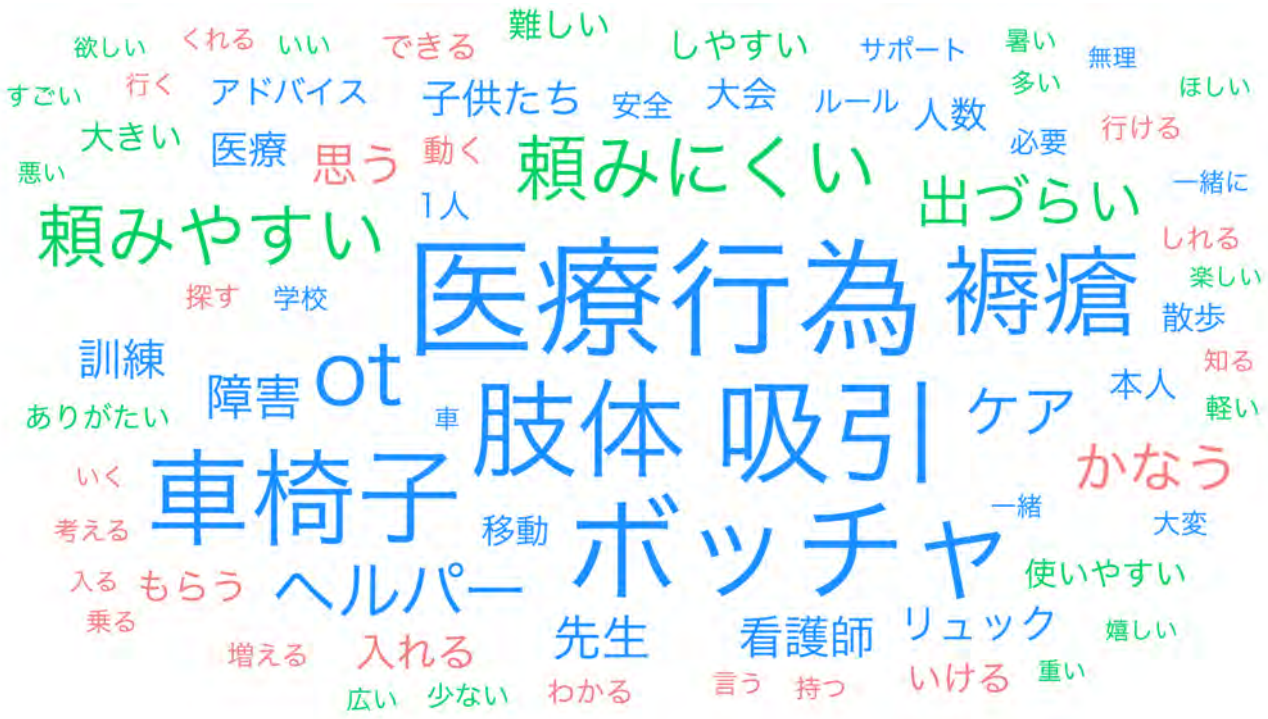
動詞	スコア	出現頻度
もらう	1.08	18
歩く	2.28	13
できる	0.21	13
行く	0.13	13
思う	0.07	11
投げる	2.35	10
つける	0.26	8
登る	2.93	6
伸ばす	1.91	6
言う	0.03	6
うつ伏せる	11.89	5
含む	1.32	5
くれる	0.03	5
かなう	0.43	4
走る	0.19	4

【表：医個 10】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
すごい	0.11	7
しやすい	0.58	3
広い	0.33	3
悪い	0.03	3
いい	0.01	3
楽しい	0.01	2
冷えやすい	4.39	1
行きやすい	0.41	1
速い	0.07	1
狭い	0.05	1
激しい	0.04	1
重い	0.02	1
軽い	0.02	1
大きい	0.01	1
難しい	0.01	1

（ウ）課題に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ｉ）からⅳ）のとおり。



③　頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：医個 11】の赤枠囲みのとおり、具体的な医療的ケアを想起させるような「ケアー必要」「痰ー吸引」「必要ー注入」「ケアー仕方」の組み合わせの単語の出現頻度が高くなっており、運動・スポーツの実施に際する課題であると考えられる。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：医個 12】の赤枠囲みのとおり、団体ヒアリングと同様に「体調ー悪い」の組み合わせの出現頻度が高くなっており、「医療的ケアを必要とすることが、ただちに体調が悪いと判断されることがある」といった声が複数あったことと同様の傾向を示している。

【表：医個 11】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
ケア - 必要	0.55	2
痰 - 吸引	0.50	2
学校 - 先生	0.26	2
必要 - 致し方（否: 100.00%）	1.00	1（否: 1）
必要 - 注入	1.00	1
ケア - 仕方	1.00	1
運動 - 部分	1.00	1
いいんじゃない - かって	1.00	1
意識 - 浸透	1.00	1
スポーツ界 - 浸透	1.00	1
車椅子 - 装備	1.00	1
腰椎 - 胸椎	1.00	1
ヘルパー - 職業	1.00	1
ヘルパー - 希望	1.00	1
障害 - 度合い	1.00	1

【表：医個 12】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

名詞 - 形容詞

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
体調 - 悪い	ネガティブ	1.50	2
必要 - なるい	中立	1.00	1
ヘルパー - 数少ない	中立	1.00	1
障害 - 詳しい	ポジティブ	1.00	1
私達 - 頼みやすい	中立	1.00	1
先生 - まずい	ネガティブ	1.00	1
サイズ - 小さい	中立	1.00	1
選手 - 頼みにくい	中立	1.00	1
選手 - 頼みやすい	中立	1.00	1
パパ - 動きやすい	中立	1.00	1
意味 - 出づらい	中立	1.00	1
濃度 - 低い	中立	1.00	1
車椅子 - 重い	ネガティブ	0.67	1
本当 - 欲しい	ネガティブ	0.67	1
職業 - 欲しい	ネガティブ	0.67	1

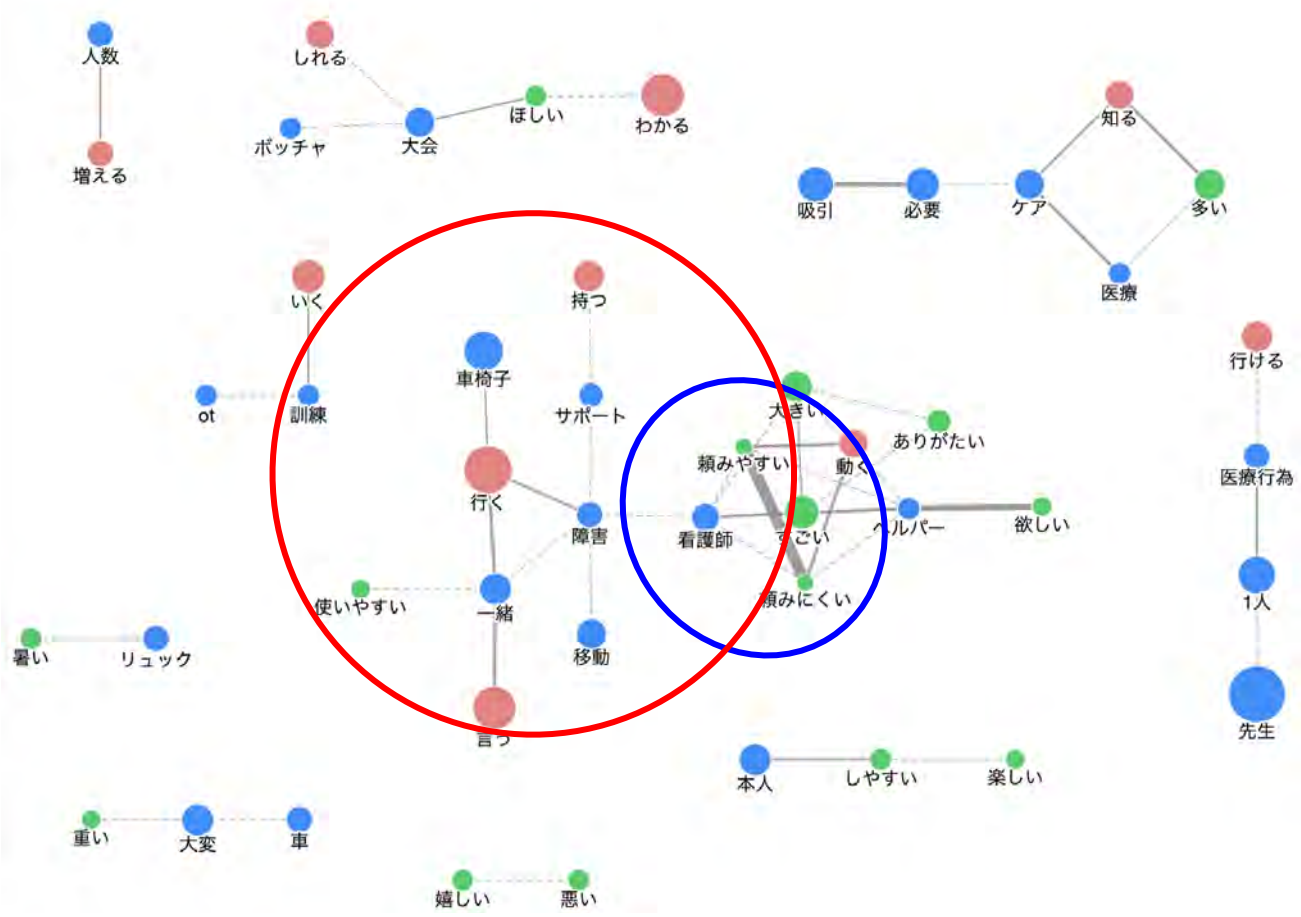
④　相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：医個7】の赤丸囲みのとおり、「障害」という単語を中心に、「移動」「一緒」「行く」「サポート」「看護師」という言葉の出現パターンが類似しており、医療的ケアを必要とする方にとって、運動・スポーツへの参加の際には移動に関する課題が多くあることを表している。

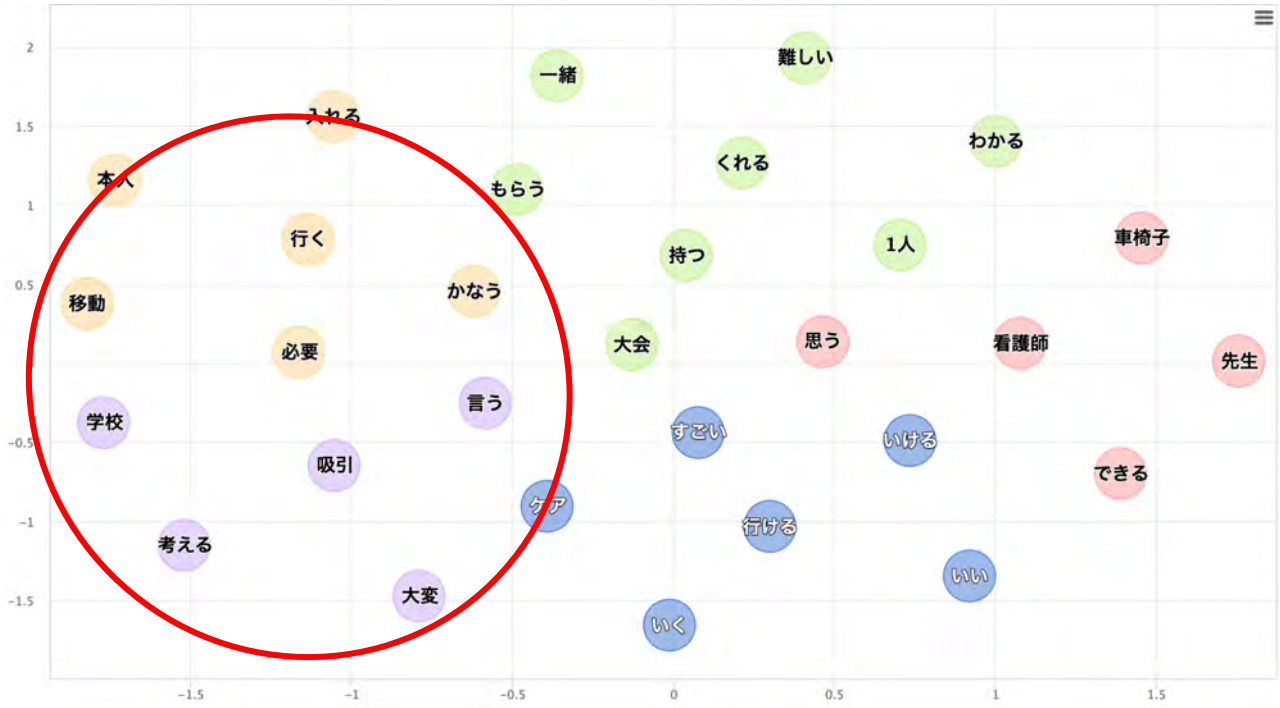
また、【図：医個7】の青丸囲みのとおり、「頼みやすい」と「頼みにくい」という相反する言葉の出現パターンに強い関係性がみられ、当事者本人や保護者にとって、頼みやすいことと頼みにくいことの線引きの難しさや葛藤があると考えられる。

【図：医個7】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。【図：医個8】の赤丸囲みのとおり、色分けは異なるが、「吸引」という単語を中心に「必要」「大変」「ケア」「学校」「考える」という単語が出現しており、日常的に行う吸引が運動・スポーツへの参加を考える上でも課題となっていることと同様の傾向であると考えられる。

【図：医個8】相関関係の分析（2次元マップ）

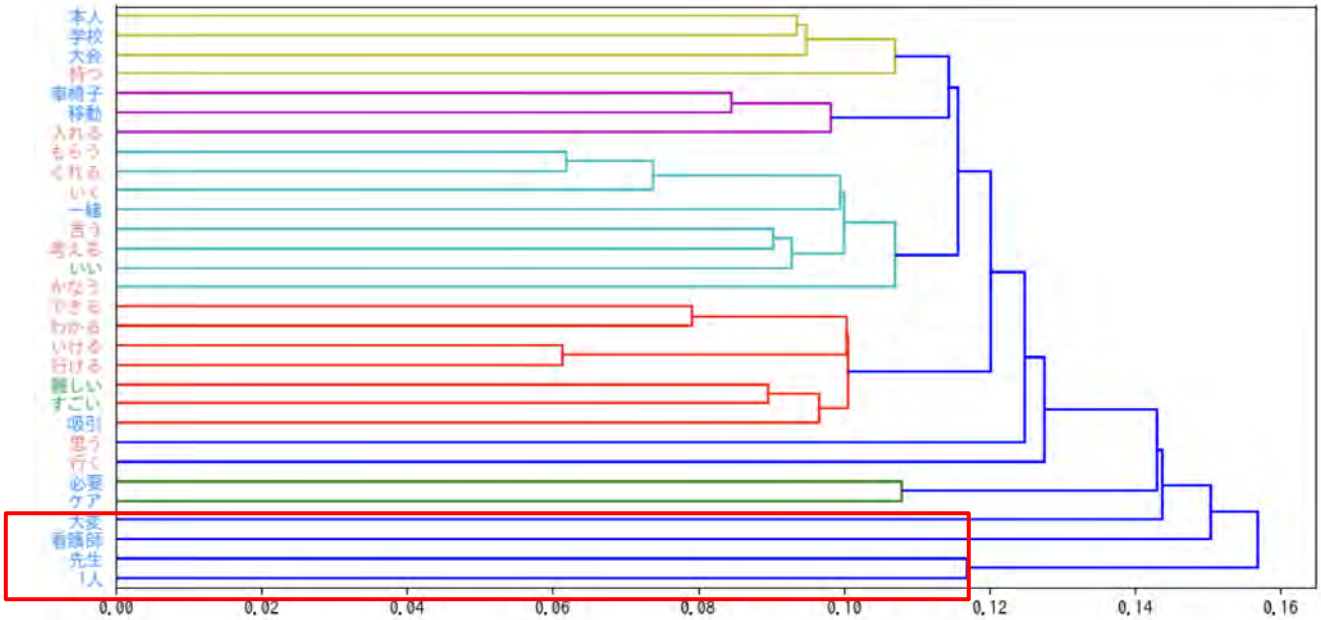


⑤　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：医個9】の赤枠囲みのとおり、「大変」「看護師」「先生」「１人」が同じグループに分類されており、誰が医療的ケアを担うのかについての課題が示されていると推察される。このことは、個別のヒアリングを実施した際に、現場や家庭で悩むポイントであるという声が多くあったことと同様の傾向であると考えられる。

【図：医個9】クラスター分析



⑥　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

名詞については、【表：医個 13】のとおり、「先生」という単語の出現頻度が高くなっているが、学校の教員という意味で使われているケース、医師という意味で使われているケースの両方が存在している。課題としては、教員については数に言及する声、医師については一人あたりの担当人数が多すぎるという声があったことと合致する傾向が示されている。

【表：医個 13】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
先生	3.44	22
車椅子	23.55	13
1人	1.25	12
吸引	27.08	11
必要	0.89	10
本人	1.57	9
大変	0.55	9
一緒	0.37	9
ケア	6.81	8
大会	1.71	8
移動	1.39	8
学校	0.49	8
看護師	2.98	7
医療行為	32.15	6
障害	3.40	6

【表：医個 14】頻出率の分析（動詞）

動詞	スコア	出現頻度
思う	1.15	45
できる	0.46	19
入れる	0.82	15
もらう	0.65	14
行く	0.15	14
いける	0.64	12
わかる	0.28	12
言う	0.12	12
くれる	0.12	10
かなう	2.08	9
いく	0.12	8
行ける	0.24	7
持つ	0.14	7
考える	0.14	7
動く	0.43	6

【表：医個 15】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
いい	0.17	15
難しい	0.51	8
すごい	0.14	8
大きい	0.52	7
多い	0.14	7
ありがたい	0.30	4
少ない	0.19	4
しやすい	0.58	3
軽い	0.17	3
暑い	0.09	3
悪い	0.03	3
ほしい	0.03	3
嬉しい	0.02	3
使いやすい	0.41	2
広い	0.15	2

C） 個人における具体的な工夫及び配慮について

現状及びテキストマイニングの結果も踏まえ、12 名の個人に対して行ったヒアリングについて、工夫及び配慮の共通点、個別の工夫及び配慮について、得られた情報はそれぞれ以下のとおり。

（ア）工夫及び配慮の共通点

＜保護者等から得られた工夫及び配慮＞

- 教員や友達等と一緒にマッサージ運動やマット運動、お風呂上がりのストレッチを行う等、日常生活の中に運動・スポーツの要素を組み込む工夫をしている。
- 胃ろうの管によって本人が傷つかないように、例えば鉄棒運動の際に圧迫しすぎないように、教員が近くで観察することで、日頃の動きに注意している。

（イ）個別の工夫及び配慮

＜本人から得られた工夫及び配慮＞

- 車椅子を利用するに際や、ADL を改善するための機能を有した陸上競技用車椅子を使う際に、褥瘡ができないように自身で管理しながら、運動・スポーツに参加することができている。
- 持ち運び可能な吸引器を一緒にサポートしてくれる人が持ち運びしてくれており、ボッチャに参加できている。

＜保護者等から得られた工夫及び配慮＞

- 家の中での四つん這い運動、おもちゃを使った遊びも運動・スポーツの機会と捉えて、日常生活に採り入れる工夫をしている。
- 診療所のアドバイスを受けながら、補助靴を作り、体のバランスが取りやすいようにして、歩行運動ができるように工夫している。
- 顔色が悪くなったら酸素吸引をしてもらう、胃ろうについてはうつ伏せにならないように指導してもらうという、学校や放課後等デイサービスでの助言のおかげで運動・スポーツに参加できている。

D） 個人における課題

共通の課題点及び個別の課題点について、得られた情報はそれぞれ以下のとおり。

（オ）課題の共通点

＜本人から得られた課題＞

- 家族の付き添いが運動・スポーツに取り組む上で基本となっており、本人の運動・スポーツの機会を継続する上での課題となっている。また、スポーツ大会で遠征に行く際、ヘルパーや看護師を手配する場合にも経費は自費負担となる。

（カ）個別の課題

＜本人から得られた課題＞

- ADL を改善するための機能を有した車椅子を使って本人が希望する競技をするため、片道3時間かけて移動しており、移動をサポートしてくれる人の数が不足している。また、必要な車椅子がある場所が限られている。高機能の車椅子については、購入費用が高額であり、手が出せない。

＜保護者等から得られた課題＞

- 吸引は本人にとっては日常生活の一部であるが、周囲の理解が十分に得られず、体調が悪いように見えてしまうため、運動・スポーツへの参加を断られることが多い。
- 本人の体に合わせて補助具を作るため、測定に時間がかかり、本人が長く待つことができない。また、測定器のある場が遠方にあるため、移動の負担も課題であると感じる。
- 障害特性と成長段階に応じた運動・スポーツの実施について作業療法士や理学療法士に相談したいものの、リハビリの時間も限られているため相談する機会が少ない。
- 胃ろうを開放し、胃内を減圧するというケアのための場所確保が難しく、特に散歩している際に、このようなケアをする必要性が急に発生すると対応が難しい。
- 中心静脈の輸液製剤とポンプを常にリュックに背負っているので、特に夏場は暑く、家の周りを散歩することを含めて、運動・スポーツに取り組むことができない。
- 医学的には問題がないにも関わらず、人工鼻をつけているために、砂が混入しないように安全第一で指導される。結果として、屋内のスポーツしか学校ではできない状況であり、屋外で行う運動・スポーツの機会や参加の幅が制限されている。

第3章　発達障害

1. 有識者会議

i. 第1回有識者会議

本事業全体の趣旨やゴールの共有を行った上で、団体ヒアリング及び個人ヒアリングにおける候補団体・者の共有及び討議、団体ヒアリング及び個人ヒアリングにおけるヒアリング項目の共有及び討議を行った。

発達障害に関して、有識者からの指摘事項と、その内容を踏まえた対応については以下のとおり。

＜有識者からの指摘事項と対応＞

指摘事項	対応について
【調査の進め方について】 スポーツの定義を揃えて調査・ヒアリングを実施した方がよい。	団体及び個人ヒアリングにおいて、運動・スポーツの定義を初めに明示する。具体的には、「競技スポーツのみならず、ぶらぶら歩きや階段の上り下り等の身体運動全般を含めたもの」という説明を行った上で、ヒアリングを実施した。
【調査の進め方について】 「できない」「難しい」という仮説を調査で明らかにするだけではなく、どのような支援、環境、工夫が整えばスポーツを「できる」「楽しめる」かという視点も加えた方が良い。	団体及び個人ヒアリングにおいて、実際にどのように「できる」ようにしているか、「楽しめる」ように配慮及び工夫をしているかをヒアリングを実施した。
【調査の進め方について】 発達障害においては、知的障害ではなく認知特性として評価されるので、知的障害という言葉を使わない方が良い。	団体及び個人ヒアリングにおいて、左記の点に配慮してヒアリングを実施した。
【団体ヒアリングについて】 移動支援やヘルパーの方々もヒアリング対象として加えると良い。	対象を追加してヒアリングを実施した。
【団体ヒアリングについて】 障害者スポーツセンターが国内に数か所あるので加えると良いのではないか。	対象を追加してヒアリングを実施した。
【個人ヒアリングについて】 サポートする人も同席してヒアリングしたほうが良い。	個人ヒアリングの際に、サポートする人（保護者や施設職員等）の同席を依頼した上で、ヒアリングを実施した。
【個人ヒアリングについて】 発達障害に関しては個人差が大きいのでヒアリングの際には個人に十分に配慮して行ってほしい。	話すスピードの確認（速すぎないか、遅すぎないか）、時間の確認（長すぎないか）を行いながら、ヒアリングを実施した。

ii.　第2回有識者会議

団体ヒアリング及び個人ヒアリングの調査結果を共有した。また、合わせて、団体のヒアリング先について（追加すべき属性の団体がないか、対象者の区分は適切か）、団体へのヒアリング項目について（深堀が必要な項目はないか）、個人ヒアリングについて（必要十分か、追加すべき属性の団体はないか）等について討議を行った。

有識者からの指摘事項と、その内容を踏まえた対応については以下のとおり。

＜有識者からの指摘事項と対応＞

指摘事項	対応について
【調査内容の整理方法について】 障害があっても、障害者手帳の取得をしないこともある。手帳の有無と障害の有無はイコールではない。	「グレーゾーン」「手帳の有無」という区分を設けず、整理することにした。
【調査内容の整理方法について】 仮に「グレーゾーン」という言葉を使う際には定義をどう置くかを検討した方が良い。	
【調査内容の整理方法について】 障害特性はあっても、手帳を持たず、普通級に通い運動・スポーツに取り組む児童・生徒もいる。	
【調査内容の整理方法について】 本調査においては、グレーゾーン、手帳の有無を区別しない方が良いのではないか。	
【団体のスタッフの資格や研修について】 サポートスタッフの資格の有無について実態を把握したい。	どのような資格を持っているのかを質問項目に追加して、ヒアリングを実施した。
【団体のスタッフの資格や研修について】 発達障害に関する研修はほとんどないと思われる。どのような研修が必要だと感じているかヒアリングで聞けると良い。	団体ヒアリングにおいて、研修の有無や頻度について質問項目に追加して、ヒアリングを実施した。
【個人ヒアリングについて】 発達障害児・者や保護者にとっての、スポーツの価値をヒアリングして欲しい。	個人ヒアリングにおいて、質問項目に追加して、ヒアリングを実施した。
【個人ヒアリングについて】 スポーツが嫌いになっている人に理由やエピソードをヒアリングして欲しい。	個人ヒアリングにおいて、質問項目に追加して、ヒアリングを実施した。
【個人ヒアリングについて】 外出頻度を質問に加えてはどうか。活動量を測る上で指標になるのではないか。	個人ヒアリングにおいて、質問項目に追加して、ヒアリングを実施した。

iii. 第3回有識者会議

第3回有識者会議において、有識者から以下の点について指摘を受け、委託事業成果報告書の表現や、記載の修正を行なった。

＜有識者からの指摘事項と対応＞

指摘事項	対応について
現場のヒアリング内容を記載している場合でも、その内容が正しい内容とは限らないため、報告書として適切な表現に記載を修正するべき。	該当箇所についての修正を行なった。
テキストマイニングの分析結果について、分析結果の読み方が判別できないケースがあるため、修正をするべき。	該当箇所についての修正を行なった。
テキストマイニングの分析結果から考えられる点について記載をするべき。	該当箇所についての修正を行なった。

2. ヒアリング調査

i. 調査概要（団体）

A） 調査目的

障害者が所属する団体における、運動・スポーツの機会の提供の現状を把握するため、団体ヒアリングを実施した。合わせて、運動・スポーツの機会の提供に関する課題内容の把握、団体における運動・スポーツの機会の提供に関する工夫及び配慮の内容を把握する。

B） 調査方法

オンラインツール（Zoom）を用いてヒアリングを実施した。

C） 調査内容

以下の内容についてヒアリングを実施した。

各団体の基本情報	当事者の数、割合、障害の程度・類型、年齢、性別
	スタッフ数
	専門職のバリエーション（看護師の有無）
	スタッフ間での情報共有の方法
	当事者、保護者との連携方法
	施設運営方針、当該施設におけるスポーツの位置付け
スポーツ提供・実施状況	スポーツ施設の状況（広さ、数、種類）
	実施できるスポーツの種類
	スポーツ種別ごとの実施頻度、実施形式

スポーツ提供の課題、障害者スポーツ実施の課題	受け入れ可能であることの表示方法（団体としての発信、行政との連携）
	ステークホルダー（当事者、家族、支援者）の関係性について
スポーツ提供にあたっての配慮・工夫点	当事者の特性理解に関して実践していること
	施設等のハード面での工夫
	他機関との連携の有無（支援団体、スポーツ提供施設、医療機関）
	スタッフ間の研修の有無（指導方法、評価手法）
	スポーツ提供を実施していることの周知方法について

D）　調査対象

以下の団体区分ごとに要件を設定し、ヒアリング先の選定を行った。

障害者団体	本事業が対象とする障害種の方が活動する団体である
	スポーツを提供する団体（障害者スポーツを実施する団体）と、そうでない団体（当事者が集まりスポーツ以外の活動の場を提供する団体）のバランスをとる
	「障害者の保護者会」「障害当事者の会」等の現場団体を想定し、統括団体は含まない
障害者施設	本事業が対象とする障害種の方が、1～2名以上所属している
	障害者の方が集団で集まる場所がある
	スポーツレクリエーションを提供する施設と、そうでない施設のバランスをとる
	施設タイプのバランスを取る （参考）施設タイプ • 学校卒業後：入所、通所（生活介護等の日中活動系サービス）、訓練系・就労系（就労継続支援 A 型、B 型等） • 児童・生徒対象：放課後等デイサービス、生活介護サービス
	直接のヒアリング対象者としては、障害当事者と直接関わっている方、実態をよく理解されている方（現場担当者）を対象とする
学校	本事業が対象とする障害種の方が、1～2名以上所属していること
	普通学校の場合は、支援級を併設していること
	直接のヒアリング対象者としては可能な限り、現場を統括する管理職と、障害当事者と直接関わっている方、実態をよく理解されている方（現場担当者）を対象とすること（担当教員など）

E）　調査期間

令和4年12月～令和5年2月

ii.　調査概要（個人）

A）　調査目的

障害を抱える当事者のこれまでの運動・スポーツの実施状況を把握することを目的にヒアリングを実施した。ヒアリングに当たっては、障害を抱える当事者がスポーツを実施するにあたっての課題内容を把握し、当該課題を乗り越えるための、当事者本人や支援者の工夫及び配慮を把握する。

B）　調査方法

オンラインツール（Zoom）を用いたヒアリングを行う。

C）　調査内容

以下の内容についてヒアリングを実施した。

障害児・者の基本状況	障害の程度・類型、年齢、性別
	障害者手帳の保有状況
	在籍する学校種別
	支援の強度、必要性の有無（医療専門職のサポートの有無）
	保護者の関わり
	スポーツレクリエーションの実施状況
	実施しているスポーツレクリエーションの種類、頻度、形式
	どこで実施しているのか（学校、一般的なスポーツ施設、障害者センター等）
スポーツに取り組む際の課題・スポーツに取り組むことができない理由	始めたきっかけ／選んだきっかけ
	取り組む上で感じる／感じた難しさ、課題
	取り組むことができない理由
	どのような条件／支援が、スポーツに取り組むのに必要か
（児童・生徒のみ）学校体育、部活動への参加状況	どのようなスポーツに参加しているか
	参加の経緯（自発的、学友の誘い、支援者の誘い）
	参加していない理由（施設環境、支援者の負担、当事者のハードル）
スポーツ以外のクラブや同好会・サークルへの加入状況	加入した／選んだきっかけ
	どのような団体が主催しているか
	あって良かったと感じる配慮

D）　調査対象

団体ヒアリングで話を伺った学校・障害者団体・障害者施設等からの紹介を元に個人ヒアリング先の選定を行った。

具体的な条件としては、7歳以上であり、調査対象となる障害種（発達障害）を抱えていること、とした。

留意事項としては、過去1年間の運動・スポーツ実施の有無に偏りがないこと、若年層が半数以上であること、正確な障害種の把握と確認を行なった。

E）　調査期間

令和4年12月～令和5年2月

iii.　調査結果及び分析（団体）

A）　運動・スポーツの実施状況等の現状

本事業を行う上で事前に行ったヒアリングでは、「都市部」と「地方部」に運動・スポーツの実施状況や、運動・スポーツの提供場所等に大きな違いがあるのではないか、という仮説があった。

したがって、団体ヒアリングを通じて、この仮説を検証するため、対象となる方がどのような場所で、どのような運動・スポーツに取り組んでいるか、どのくらいの頻度で行っているか等の現状を明らかにし、「都市部」と「地方部」に分けて整理を行った。

都市部及び地方部において、運動・スポーツができる場所の選択肢の違いは少なく、学校や民間のスポーツ施設等が使われているケースが多くあった。

実施される運動・スポーツの種類についても、都市部と地方部で大きな違いはみられず、多くの団体でボッチャに取り組んでいたが、その他の種目（卓球、バレーボール、テニス等）の参加機会を提供している団体も多くあった。

頻度については、共通して、学校においては週2～3回（1回あたり 40～50 分程度）、それ以外の団体では週1回（1回あたり1時間程度）で実施している団体が多かった。

＜都市部＞

施設種別	運動・スポーツの提供場所	運動・スポーツの種類	頻度
学校	体育館、運動場、教室	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般 協調運動、サーキット運動、スクーターボード、バランスボール等	週2～3回
障害者支援施設	保有している道場、近隣の小学校の体育館	武道、菜園活動、道場でのストレッチ運動	週2～3回
学校	体育館、運動場、プール	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般（跳び箱、ジャンプ、縄跳び等） 特別支援学級でランニング	体育の授業は週1～2回 ランニングは毎朝
障害者支援施設	プール、体育館、卓球室、トレーニング室、アーチェリー場	水泳、卓球、アーチェリー、バレーボール、バスケットボール	利用者の利用頻度に合わせて実施（週2回程度）
障害者支援施設	施設内及び近隣の学校や公園等	ラジオ体操、ジョギング、フットサル、ニンテンドースイッチのリングフィットアドベンチャーを使用した運動	週2回程度
学校	マルチスペース、体育館、公園	バスケットボール、ボッチャ、トリコロキューブ、ガラッキー、カローリング、テーブルカーリング、ブラインドサッカー、ヨガ	週2回程度

障害者支援施設	施設保有のスペース	ノルディックウォークを毎週実施。エアロバイク、ルームランナー、バランスボール等。長縄。zoom で運動プログラム配信。	週2回程度
学校	体育館、運動場、プール	体作り運動で散歩・ランニング、マーカーを置いてステップワークを踏んでアジリティトレーニング、体幹トレーニング 競技ではドッジボール、バランスボール、ティーボール野球、卓球、バドミントン、バスケットボール等	週1～2回
障害者支援施設	8施設（メインアリーナ、サブアリーナ、プール、フィットネス、サウンドテーブルテニス室、ボウリング、屋外・屋内グラウンド）	ほぼ全ての運動・スポーツ	個人利用で随時指導 小学生から高校生向けのプログラムを月1回開催
学校	体育館、運動場、武道場、プール、グラウンド	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般	週3回
学校	体育館、運動場、プール	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般 技能テストやラジオ体操も実施	週2～3回
学校	体育館、運動場、プール	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般	週2～3回
学校	体育館、運動場、プール	バスケット、バレー、陸上、水泳、アルティメット、バドミントン、ダンス、マット運動	週2回程度
障害者支援施設	施設の空きスペース	バランスボール、刺激のあるボール遊び、シーソー遊び等	週2回程度
学校	運動場の一部、教室、廊下、プール	フロアカーリング、ユニカール、ボッチャ、ゴールボール、キックベースボール、ペガーボール等	週2回程度
障害者支援施設	体育館、卓球室、トレーニング室、サウンドテーブルテニス室、プール	卓球、バレーボール、テニス、バドミントン、車椅子バスケットボール、アーチェリー、トランポリン	利用者の利用頻度に合わせて実施
障害者団体	畑、山、竹林	農作業、山歩き	週1回程度
学校	体育館、運動場、プール	走る、マット運動、ベースボール等	週2回程度

＜地方部＞

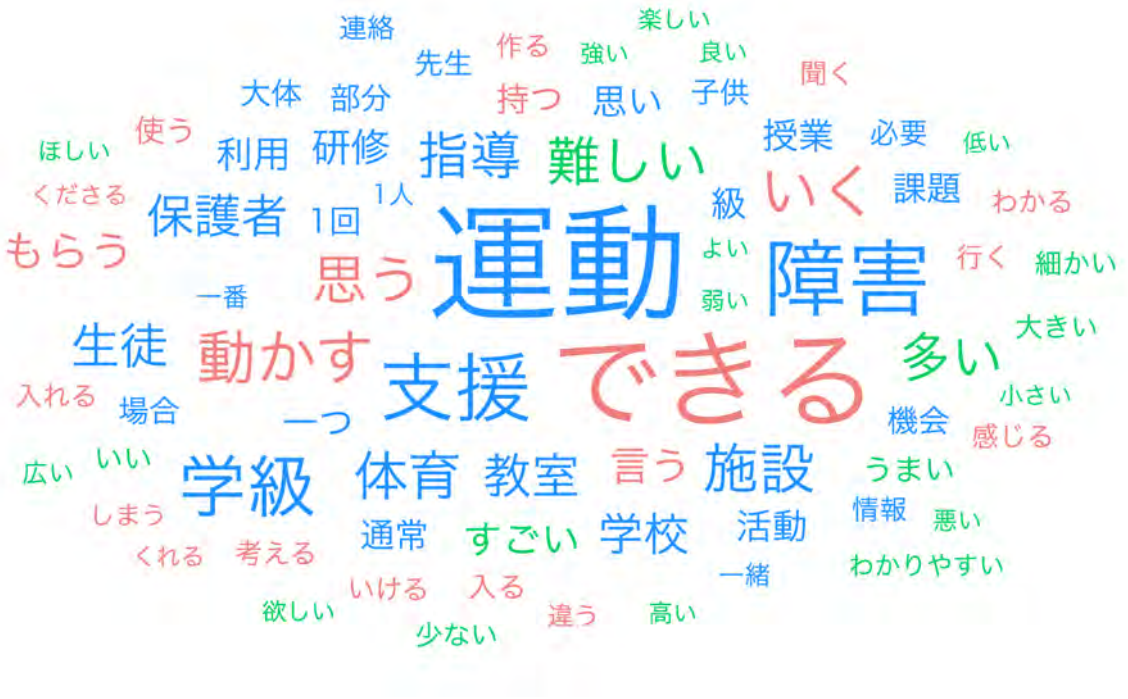
施設種別	運動・スポーツの提供場所	運動・スポーツの種類	頻度
障害者支援施設	体育館、プール、運動場、アーチェリー場、卓球場	アウトドア等を含むほぼ全てのスポーツ	週1回～月1回まで種目によって頻度は異なる
障害者支援施設	リハビリテーション室	ほぼ全ての運動・スポーツ、菜園活動	週1回程度
学校	体育館、運動場	バスケットボール、バレーボール、卓球、サッカー、野球、テニス、陸上競技	週4回
学校	体育館、運動場、プール、一輪車を行うスペース	学校教育で取り扱う運動・スポーツ全般	体育の授業は週2～3回全校で週 1 回、鉄棒や一輪車等を実施
学校	体育館、運動場	体の接触がないスポーツを体育の時間に実施 卓球、バトミントン、柔らかいボールを使ってルールをワンバウンドOKにしたバレーボール	週2回程度
障害者支援施設	体育館、運動場、室内プール	運動・スポーツ全般	体操教室、レクリエーション　随時
障害者支援施設	民間運営のフットサルコート、近隣の障害者スポーツセンターの体育館	ソーシャルフットボール	月2回程度
学校	体育館、教室	ボッチャ、リズムダンス等	自立活動の時間（週1回） 月1回の体幹運動

B）　テキストマイニングによる分析結果

団体ヒアリングの内容を文字起こしし、その上でテキストマイニングツールを活用して分析を行った。スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。

（ア）ヒアリング内容全体について

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ⅰ）からⅳ）のとおり。



①　頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：発団1】の赤枠囲みのとおり、「体育ー授業」の出現頻度が最も高くなっていた。発達障害の方の運動・スポーツの機会として、医療的ケアを必要とする方と同様に、学校における体育の授業が重要な役割を果たしていることを示していると考えられる。

また、「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：発団2】の赤枠囲みのとおり、発達障害の方の特性の一つである「こだわりー強い」という組み合わせの単語の出現頻度が高くなっており、運動・スポーツについて考える際に、団体のスタッフ等にとって、この点をいかに解消できるかが重要な取り組みのキーワードとなっていると考えられる。

【表：発団1】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
体育 - 授業	3.58	19
研修 - 機会	1.29	10
運動 - 苦手	1.04	7
運動 - 機会	0.66	7
学校 - 先生	0.54	7
担任 - 先生	0.54	7
医療 - ケア	2.33	6
情報 - 共有	0.95	6
障害 - 理解	0.68	6
支援 - 必要	0.43	6
体育 - 先生	0.40	6
机 - 椅子	3.75	5
感情 - コントロール	2.31	5
知的障害 - 重複	1.36	5
方々 - 意識	0.79	5

【表：発団2】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
こだわり - 強い	中立	2.90	9
人数 - 少ない	中立	2.14	9
生徒 - 多い	中立	0.25	7
非常 - 難しい	ネガティブ	0.29	6
失礼 - いたい	ネガティブ	3.00	5
非常 - 多い	中立	0.14	5
非常 - 少ない	中立	0.48	4
辺 - 難しい	ネガティブ	0.14	4
笑 - 多い	中立	0.09	4
圧倒的 - 多い	中立	0.09	4
お腹 - 痛い	ネガティブ	2.00	3
非常 - 珍しい	ポジティブ	1.71	3
ハードル - 高い	中立	0.50	3
理解 - 難しい	ネガティブ	0.08	3
運動 - いい	ネガティブ	0.06	3

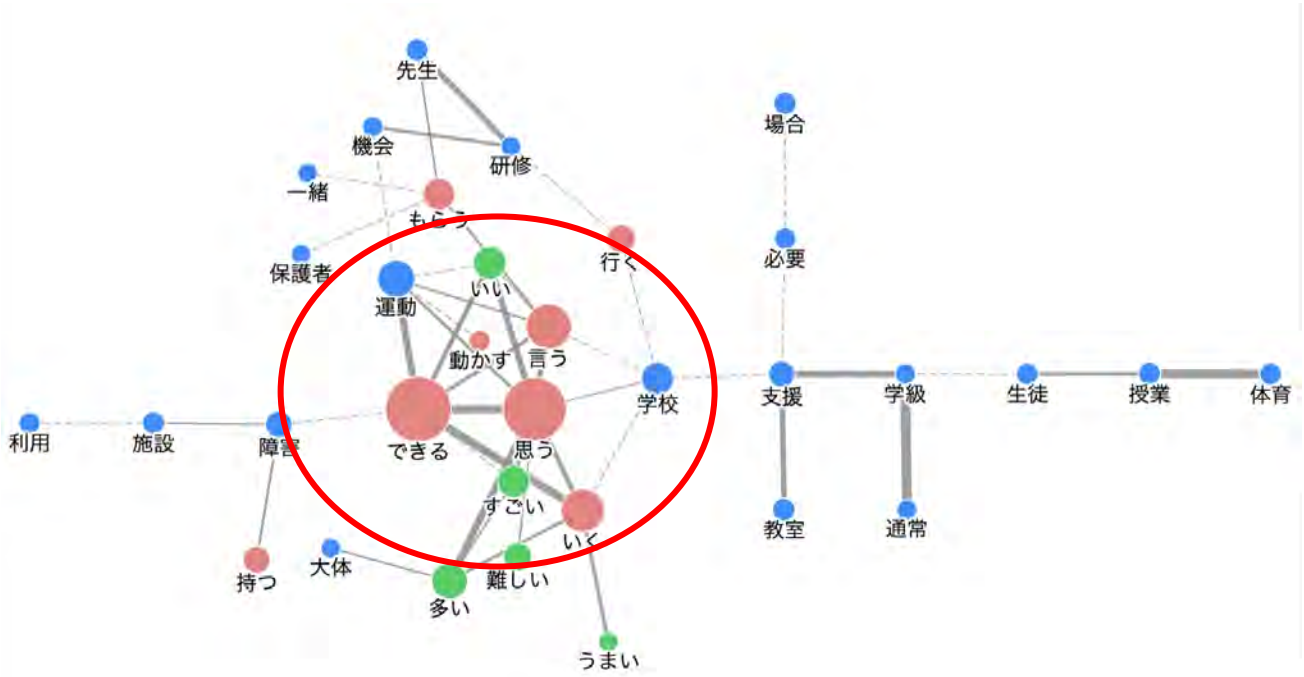
② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

医療的ケアを必要とする方のヒアリング結果と異なり、出現する単語が相互に関連しており、単語群のばらつきが少ない傾向にあると考えられる。このことは、医療的ケアを必要とする方と比較した場合、発達障害の方の特性は多様とは言え、団体のスタッフ等の工夫や配慮、課題感には一定の共通性があるものと考えられる。

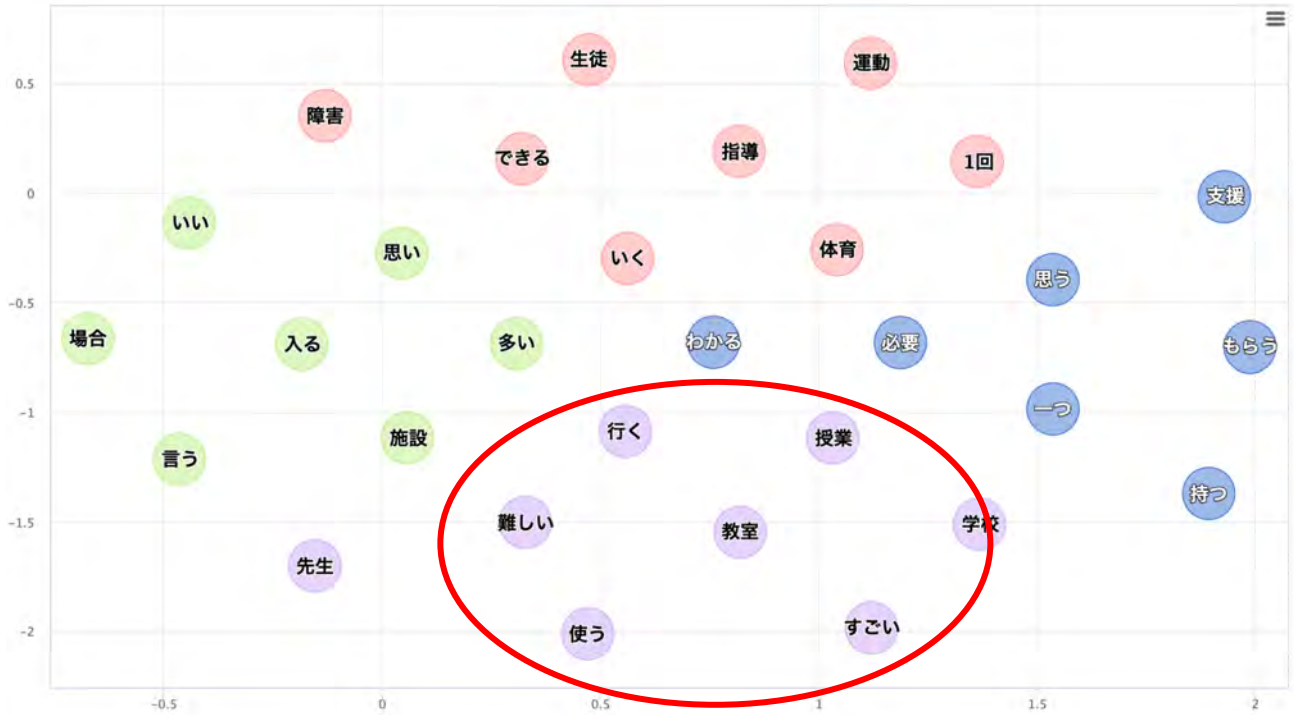
【図：発団1】の赤丸囲みのとおり、「できる」「思う」「言う」「いい」といった動詞、形容詞の相関が見られる。ヒアリングにおいて、サポートをする方が、発達障害の方に対して、「運動に参加できる」というポジティブな姿勢で対応をしていたことと同様の傾向が見て取れる分析結果であると考えられる。

【図：発団1】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。【図：発団2】の赤丸囲みのとおり、「教室」と似た出現傾向がある単語として、「授業」「学校」「使う」「行く」「難しい」という単語が同じグループに分類されており、学校現場で運動・スポーツの機会を創出する上での工夫と試行錯誤について、団体のスタッフ等が発言していたことと同様の傾向を示している。

【図：発団2】相関関係の分析（2次元マップ）

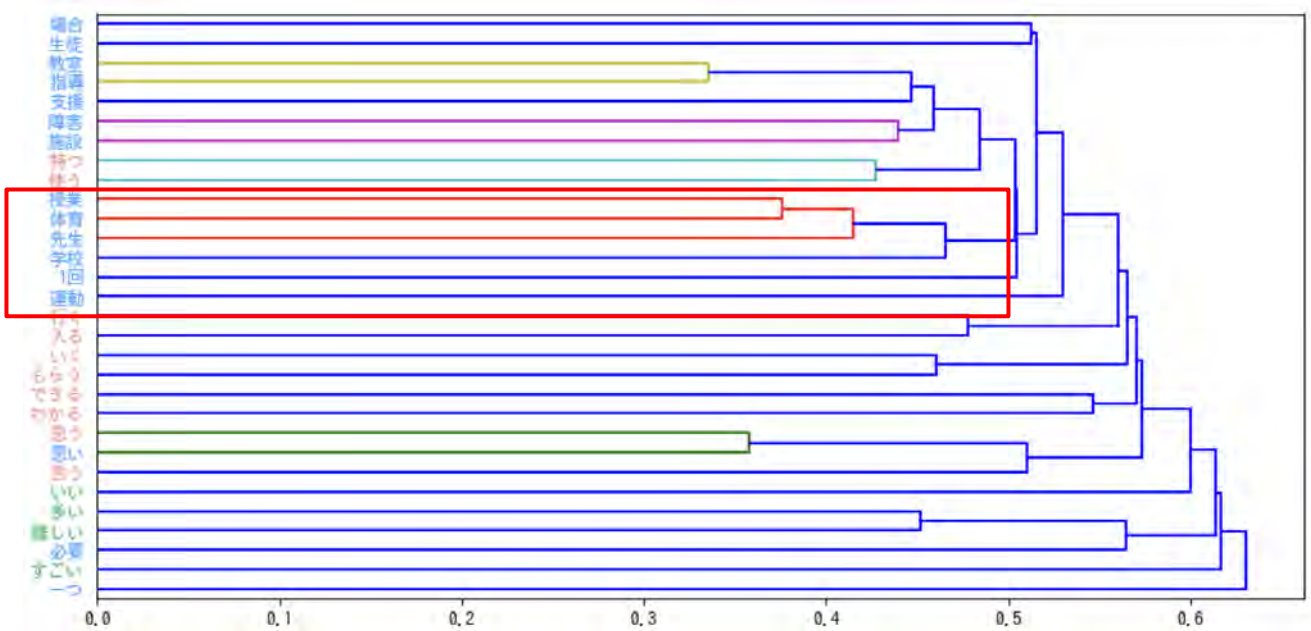


③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：発団3】の赤枠囲みのとおり、「授業」「体育」「先生」「学校」「運動」が同じグループに分類されており、学校における運動・スポーツの機会のウエイトが高い傾向にあると考えられる。

【図：発団3】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。上述の分析結果と同様に「運動」「学校」「教室」といった学校に関連する単語の出現頻度がどれも高くなっている。

【表：発団3】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
運動	944.24	290
学校	266.45	229
障害	591.36	157
支援	521.27	153
教室	300.77	110
場合	96.92	107
授業	154.79	105
施設	353.39	104
先生	63.80	103
一つ	148.36	101
体育	343.61	100
指導	328.47	100
1回	102.20	100
生徒	301.87	98
思い	159.89	98

【表：発団4】頻出率の分析（動詞）

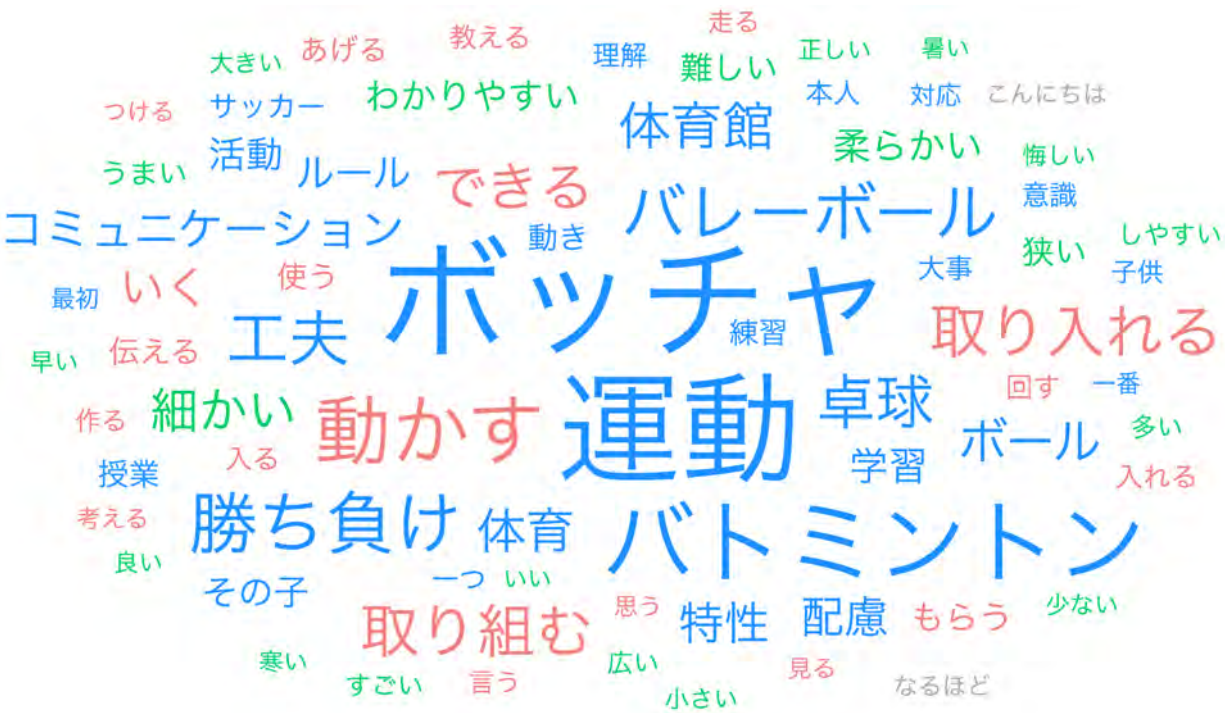
動詞	スコア	出現頻度
できる	275.47	511
思う	125.04	489
言う	75.43	312
いく	138.87	290
もらう	89.70	178
行く	15.30	144
持つ	44.83	131
使う	33.43	125
入る	23.95	106
わかる	16.58	95
聞く	17.16	86
考える	17.97	82
しまう	10.03	81
入れる	20.16	77
作る	16.48	77

【表：発団5】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
多い	116.65	219
いい	26.45	191
すごい	66.64	183
難しい	121.21	142
うまい	29.60	59
大きい	16.61	42
少ない	17.37	41
強い	3.72	30
良い	1.21	30
高い	3.03	23
楽しい	1.22	23
細かい	17.30	21
欲しい	0.96	21
広い	9.12	17
ほしい	0.80	16

（イ） 競技・配慮に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ⅰ）からⅳ）のとおり。



② 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：発団6】の赤枠囲みのとおり、「ベースボール」「水泳」「アーチェリー」「ボーリング」「サッカー」「野球」といった具体的な種目に関する単語の出現頻度が高くなっており、各団体においてスペースを工夫しながら、様々な種目の運動・スポーツに取り組んでいるという発言が多くあったことと同じ傾向となっている。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：発団7】の赤枠囲みのとおり、「一つ一つ一細かい」「仕方ー教えやすい」「予告ー入れやすい」という指導における配慮に関する単語の組み合わせが分析結果として出ている。発達障害の方に指導する際には、体の動きをスモールステップに分けて指導するといった配慮や、時間の過ごし方について予告しておくことで時間感覚を受け入れやすくする等の配慮をしている、という発言が多くあったことと、同一の傾向と言える。

【表：発団6】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
体育 - 授業	2.00	5
運動 - ベースボール	3.00	2
肯定 - 言葉	2.00	2
水泳 - アーチェリー	1.50	2
水中運動 - ボーリング	1.50	2
本人 - 興味	1.20	2
説明 - 仕方	1.20	2
情報 - 共有	0.86	2
苦手 - 生徒	0.67	2
障害 - 特性	0.67	2
野球 - サッカー	0.55	2
肩 - 意識	0.55	2
特性 - 理解	0.46	2
道具 - 工夫	0.43	2
最初 - 大事	0.35	2

【表：発団7】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

名詞 - 形容詞

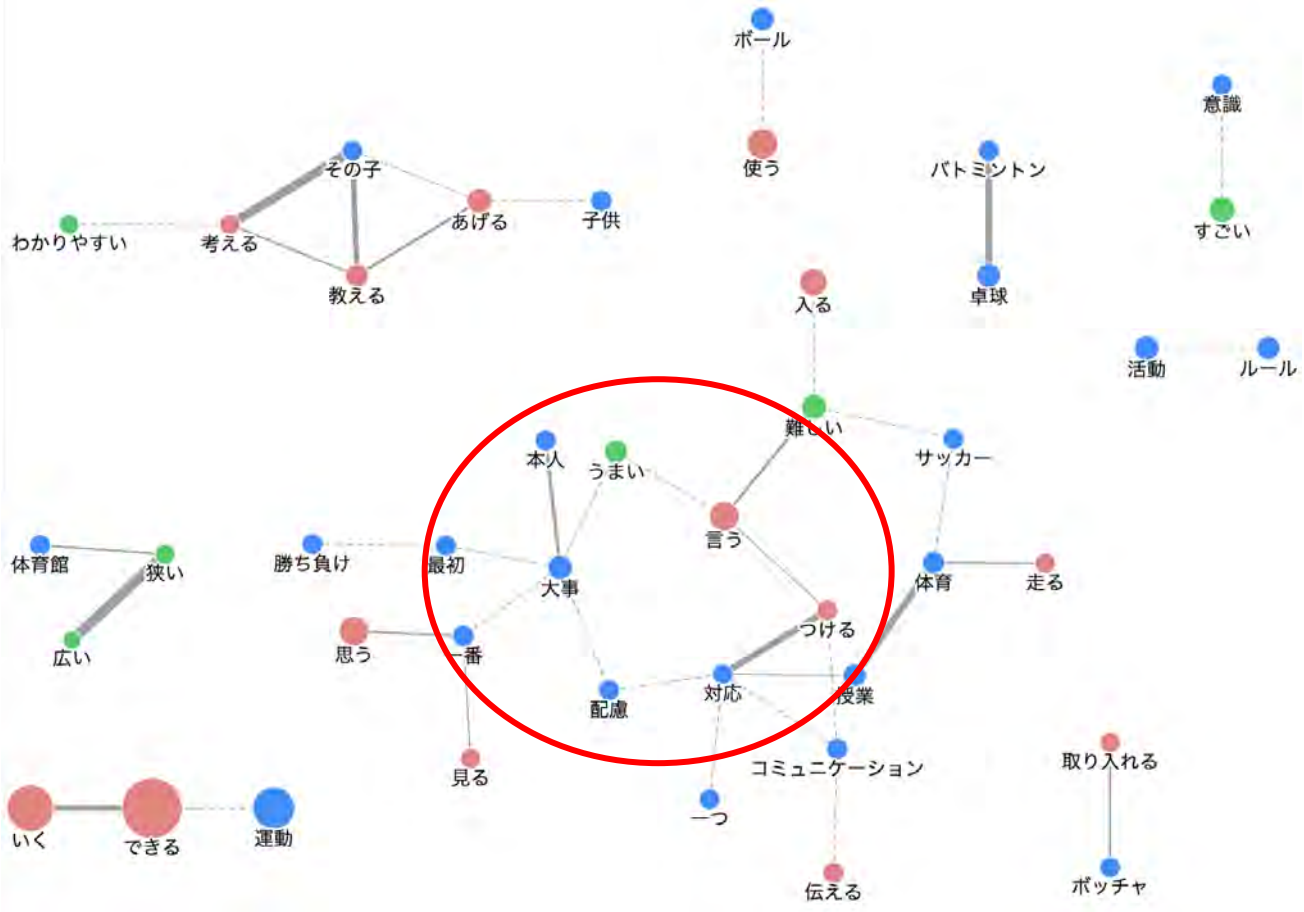
名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
トラブル - 少ない	中立	1.00	2
一つ一つ - 細かい	ネガティブ	0.55	2
プール - 行きにくい	中立	1.00	1
仕方 - 教えやすい	中立	1.00	1
予告 - 入れやすい	中立	1.00	1
高校生 - 近い	ネガティブ	1.00	1
限り - 近い	ネガティブ	1.00	1
忘れ物 - 無い	ネガティブ	1.00	1
真夏 - 暑い	中立	0.67	1
ルール - しやすい	中立	0.50	1
整理 - しやすい	中立	0.50	1
動き - 良い	ポジティブ	0.33	1
人数 - 少ない	中立	0.33	1
その子 - わかりやすい	中立	0.29	1
環境 - 狭い	ネガティブ	0.29	1

③　相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

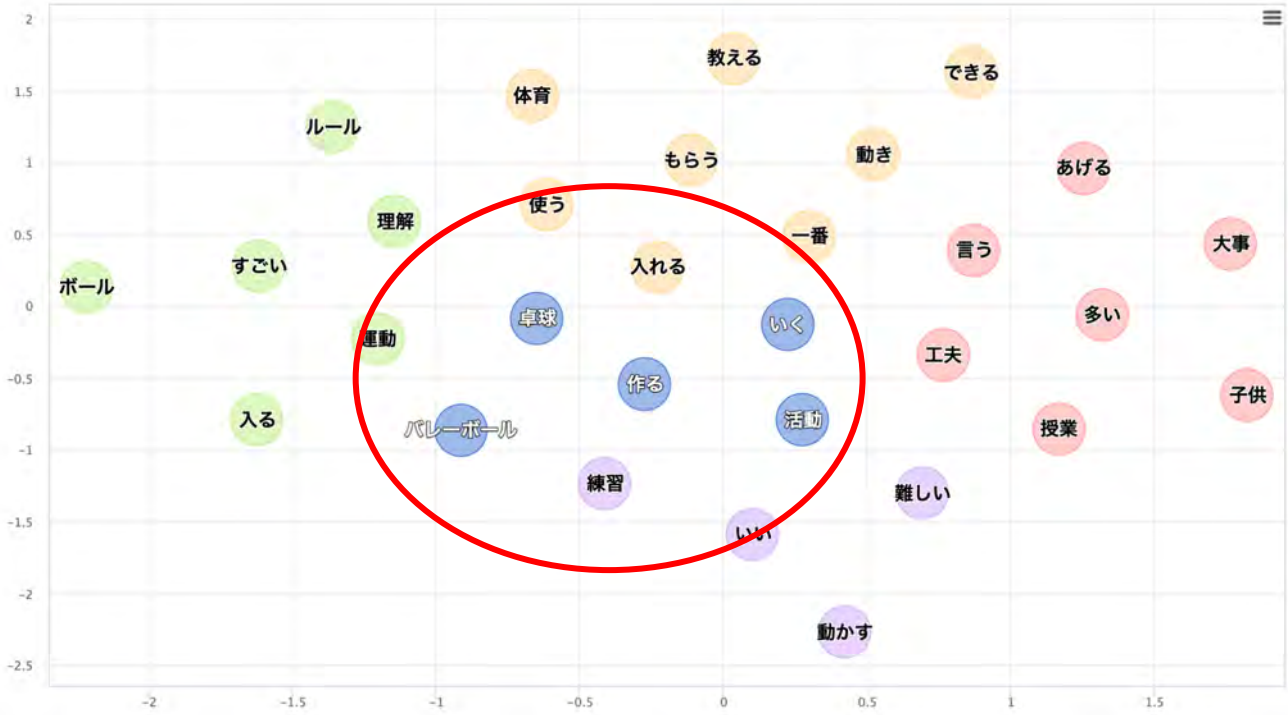
【図：発団4】赤丸囲みのとおり、「対応」「大事」という単語を中心に「コミュニケーション」「本人」「配慮」「うまい」「言う」という単語が連動しており、全体の相関分析と同様、発達障害の方への配慮として、小さくてもできたことを褒めたり、ポジティブなフィードバックをする配慮をしている団体が多くあったことと一致する分析結果である。

【図：発団4】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。【図：発団5】の赤丸囲みのとおり、「作る」という単語を中心に「卓球」「バレーボール」「活動」「練習」という単語が出現しており、運動・スポーツに取り組む機会を創出するために各団体において工夫がされていることが推察される。具体的な工夫の内容は後述のとおり。

【図：発団5】相関関係の分析（2次元マップ）

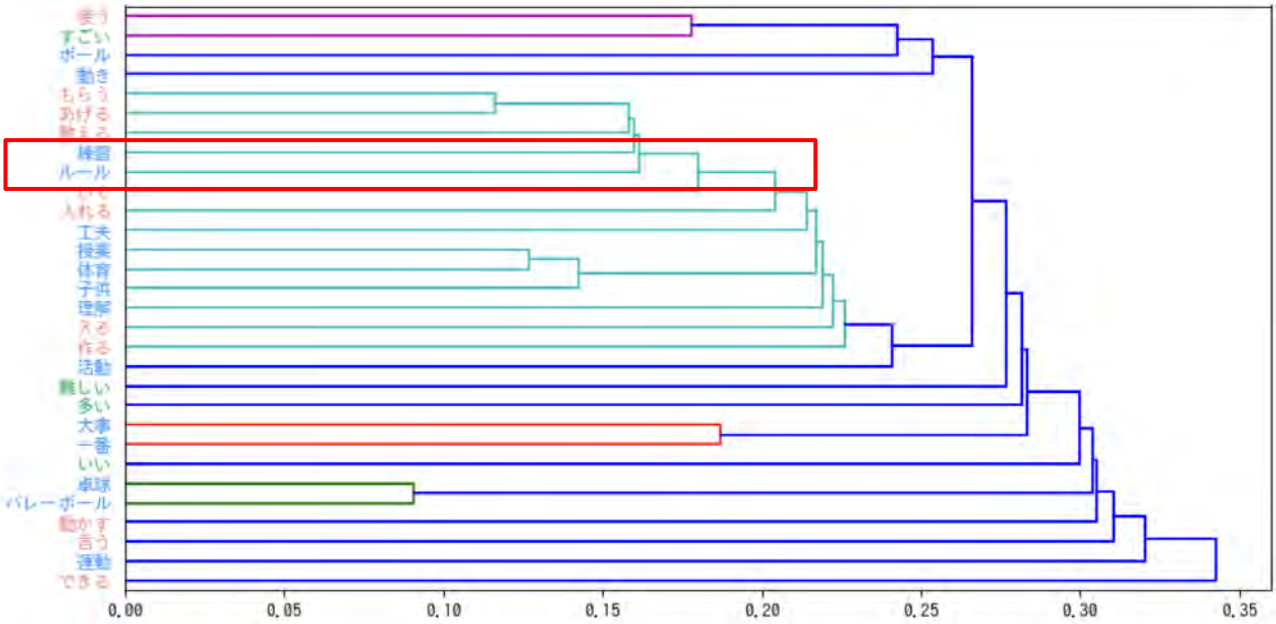


④　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：発団6】の赤枠囲みのとおり、「練習」「ルール」が同じグループに分類されており、各団体において、運動・スポーツの練習のやり方や既存のルールの改変等を柔軟に行っているという配慮の様子がうかがえる。

【図：発団6】クラスター分析



⑤　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

【表：発団8】のとおり、「ルール」「練習」「工夫」「理解」という単語の出現頻度が高くなっており、各団体において発達障害の方が運動・スポーツに参加する際の工夫や特性理解の取り組みが推察される。

【表：発団8】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
運動	65.36	50
活動	7.39	17
卓球	20.83	16
大事	1.97	16
ボール	13.02	15
ルール	8.14	14
授業	4.30	14
練習	2.70	14
工夫	22.19	13
バレーボール	24.26	12
体育	13.48	12
理解	2.20	12
動き	3.70	11
子供	1.32	11
一番	0.69	11

【表：発団9】頻出率の分析（動詞）

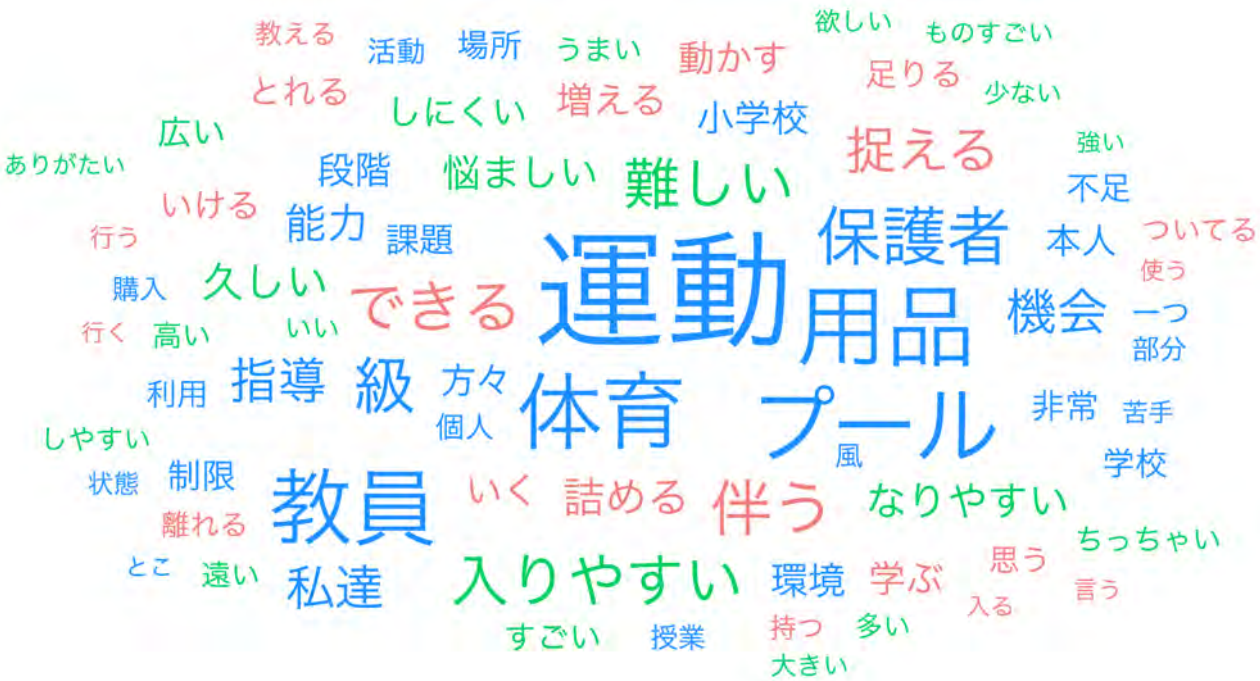
動詞	スコア	出現頻度
できる	5.74	68
いく	4.19	47
もらう	2.06	25
使う	1.22	23
言う	0.37	21
思う	0.25	21
入る	0.74	18
動かす	12.08	17
あげる	0.92	14
入れる	0.72	14
作る	0.43	12
教える	0.76	11
伝える	1.39	8
つける	0.26	8
取り入れる	7.24	7

【表：発団 10】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
いい	0.25	18
すごい	0.50	15
難しい	1.55	14
うまい	1.19	11
多い	0.35	11
細かい	4.51	10
柔らかい	2.66	6
わかりやすい	2.33	6
狭い	1.52	6
少ない	0.29	5
良い	0.03	5
しやすい	0.58	3
広い	0.33	3
大きい	0.10	3
正しい	0.18	2

（ウ）課題に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ⅰ）からⅳ）のとおり。



① 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：発団 11】の赤枠囲みのとおり、「運動ー機会」「機会ースポーツセンターー」「機会ー確保」「体育館ー飽和」が分析結果として出ており、運動・スポーツに取り組む機会や場所の確保に課題があると考えられる。また、【表：発団 11】の青枠囲みのとおり、「レベルアップ」の単語の出現頻度も高く、団体のスタッフ等の指導レベル、知識面でのレベルアップについて、ヒアリングの中で指導者自ら課題感があるという発言が多くあったことと整合する内容となっている。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【表：発団 12】の赤枠囲みのとおり、「部屋ー欲しい」「指導ー欲しい」という単語の組み合わせが出現頻度が高く、運動・スポーツの場所の確保や、指導できる人材不足に課題感があると考えられる。

【表：発団 11】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

名詞 - 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
体育 - 授業	1.50	2
周り - 方々	1.20	2
運動 - 機会	0.67	2
子供 - 知的	1.00	1
機会 - スポーツセンター	1.00	1
機会 - 確保	1.00	1
職員 - レベルアップ	1.00	1
それなり - レベルアップ	1.00	1
非常 - 高価	1.00	1
ルール - 理解	1.00	1
運動 - 身	1.00	1
運動 - 腕	1.00	1
運動 - プロ	1.00	1
キャッチ - 家庭	1.00	1
体育館 - 飽和	1.00	1

【表：発団 12】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

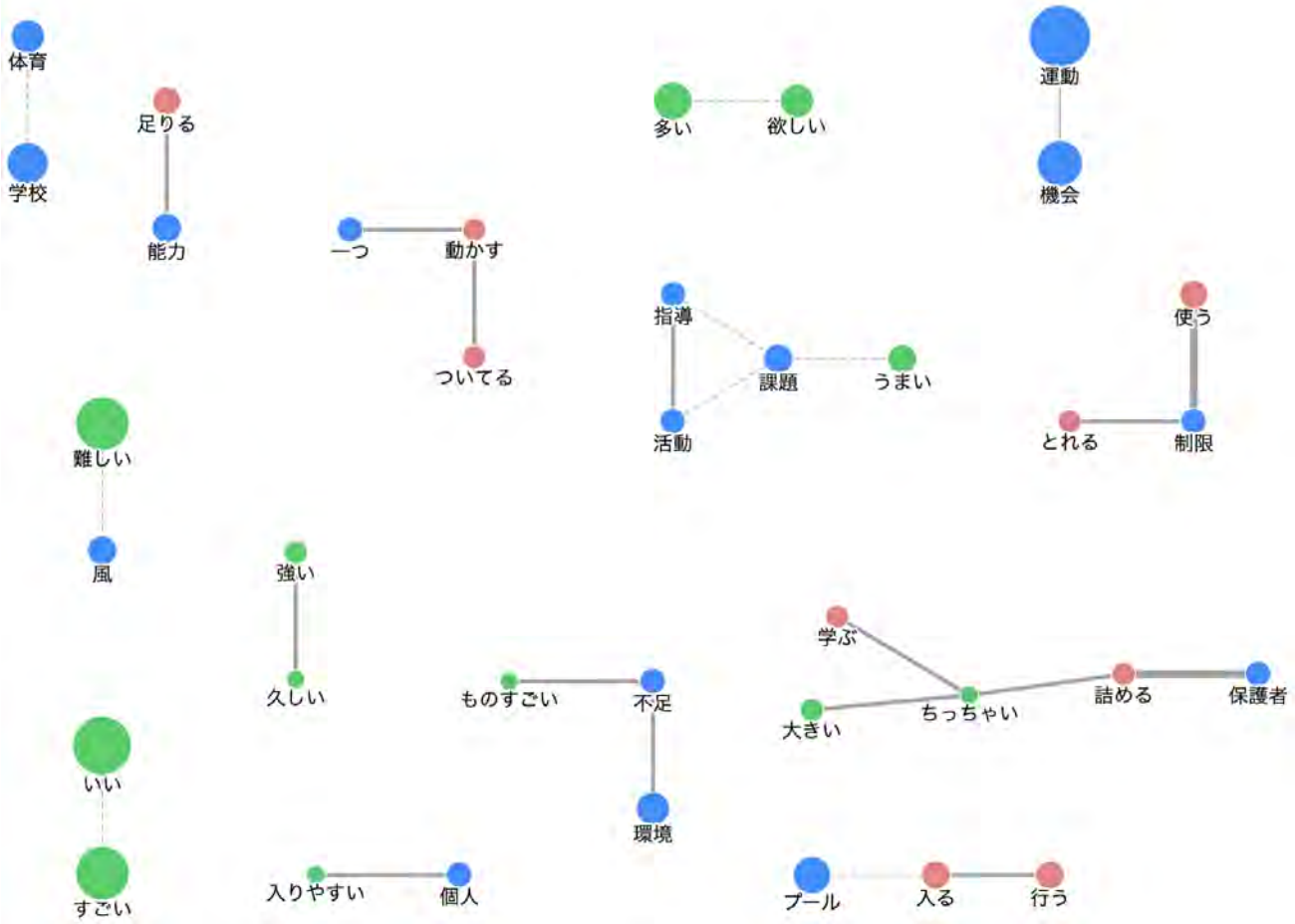
名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
部屋 - 欲しい	ネガティブ	1.20	2
ハードル - 高い	中立	1.20	2
指導 - ほしい	ネガティブ	1.00	1
成人 - 近い	ネガティブ	1.00	1
学校 - ありがたい	ポジティブ	1.00	1
じゃなくて - ありがたい	ポジティブ	1.00	1
喧嘩 - なりやすい	中立	1.00	1
用品 - しやすい	中立	1.00	1
フロート - 入りやすい	中立	1.00	1
懸案 - 悩ましい	ネガティブ	1.00	1
参加 - ほしい	ネガティブ	1.00	1
失敗 - ほしい	ネガティブ	1.00	1
体験 - ほしい	ネガティブ	1.00	1
外部 - ほしい	ネガティブ	1.00	1
機関 - ほしい	ネガティブ	1.00	1

② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

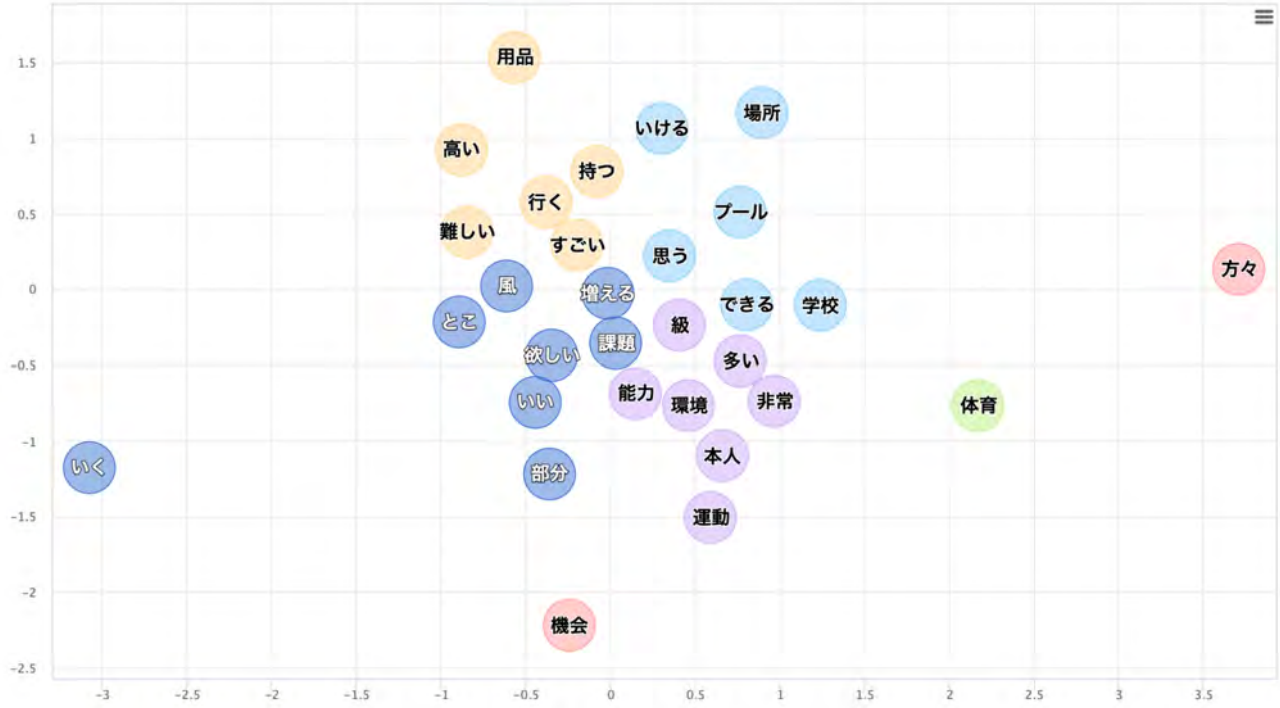
単語の相関関係については、グループが乱立しており、各グループの相関関係は十分に見ることができなかった。

【図：発団7】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。色分けは異なるものの、多くの単語が密接しており、出現傾向として類似していることを示している。

【図：発団8】相関関係の分析（2次元マップ）

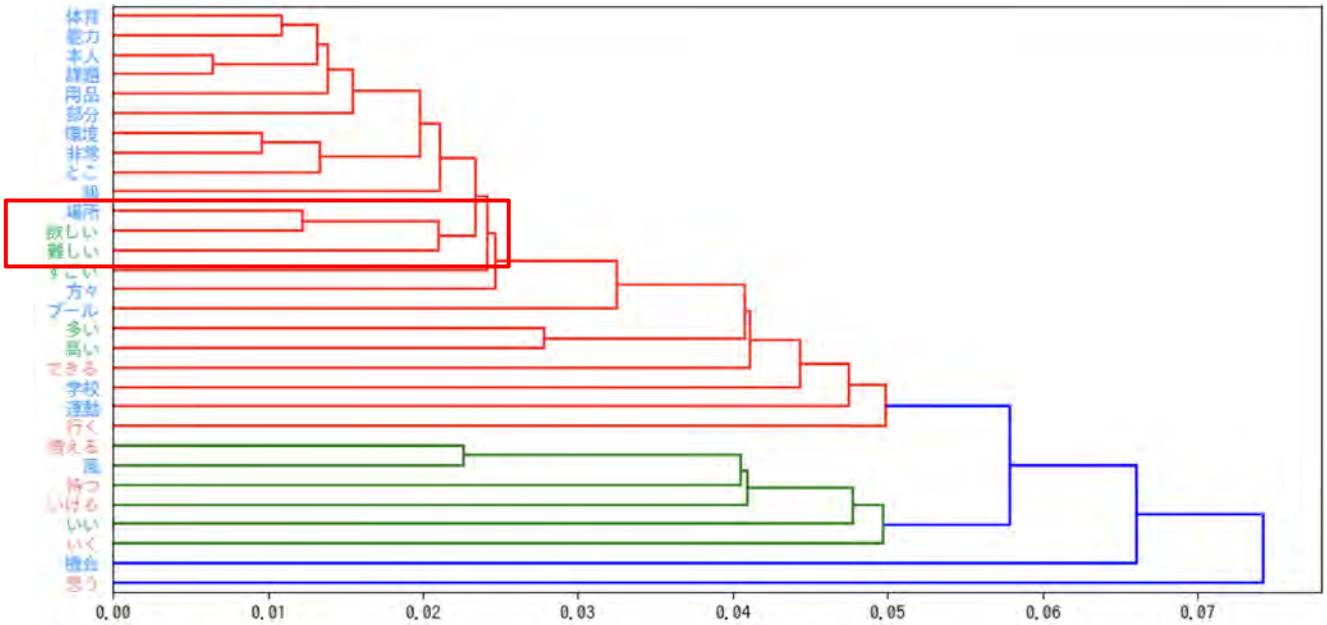


③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：発団9】の赤枠囲みのとおり、「場所」「欲しい」「難しい」という単語が同じグループに分類されており、上述の内容と同様、運動・スポーツの場所の確保に課題があると考えられる。

【図：発団9】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

【表：発団 13】のとおり、「運動」「機会」の出現頻度が高くなっており、運動機会が減ることに対しての課題感を発言する団体が多くあったことと同じ傾向を示している。。

【表：発団 13】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
運動	5.25	12
機会	1.16	8
学校	0.38	7
プール	2.99	6
場所	0.41	6
体育	2.88	5
級	1.77	5
環境	0.60	5
本人	0.50	5
用品	3.15	4
能力	0.76	4
方々	0.50	4
課題	0.48	4
風	0.20	4
とこ	0.08	4

【表：発団 14】頻出率の分析（動詞）

動詞	スコア	出現頻度
できる	0.56	21
思う	0.11	14
いく	0.19	10
いける	0.16	6
増える	0.21	5
持つ	0.07	5
行く	0.02	5
足りる	0.14	3
教える	0.06	3
行う	0.04	3
使う	0.02	3
入る	0.02	3
言う	0.01	3
伴う	0.61	2
捉える	0.44	2

【表：発団 15】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
いい	0.06	9
難しい	0.51	8
すごい	0.14	8
多い	0.07	5
高い	0.10	4
欲しい	0.04	4
うまい	0.09	3
広い	0.15	2
遠い	0.08	2
少ない	0.05	2
大きい	0.04	2
強い	0.02	2
入りやすい	0.55	1
久しい	0.28	1
なりやすい	0.25	1

C） 具体的な工夫及び配慮について

（ア）複数の団体で共通していた工夫及び配慮

- 競争させると喧嘩になりやすいため、勝ち負けがつかないルールへの変更、一人一人のできたことを褒めたり、フィードバックを丁寧に行うことで、参加意欲を高めている。児童・生徒どうしで褒め合うなど、ポジティブなコミュニケーションを増やすことで、自信に繋げている。
- 本人の認知特性や考えの癖等を適切に理解し、スモールステップで指導する、動画教材を有効に活用する、手順を絵に落として伝える等、本人に伝わりやすくしている。また、取り組む時間を大型タイマーを使って分かりやすく明示することで、見通しが立てやすいようにしている。
- 卓球はラリーをしなくても良い、ボールをキャッチして打っても良い、得点化せず、勝敗がつかないようにする、バドミントンラケットのグリップを短くし扱いやすくする、柔らかいボールを使いドッジボールをする等、ルールや道具を変更しスポーツに取り組みやすくしている。
- ラジオ体操、体作り運動、散歩やランニング、ノルディックウォーク等、選択肢を多く提示することで、本人が実施したいスポーツを選べるようにしている。

（イ）「小中学校」における工夫及び配慮

- 複数の教員やスタッフが体育の授業に入ることで、苦手意識を持った児童・生徒に対しての声がけやサポートができるようにしている。
- 球技等、色々な人とチームスポーツを行うことが苦手な児童・生徒が多い。体育の授業の中で個人種目が選べる、チームスポーツであっても小集団の中での明確な役割を決める、上級コース・初心者コースを設置する等を行い、苦手な児童・生徒が参加しやすい環境を作っている。

- 寒がり、暑がりの児童・生徒や光に対する感覚過敏の児童・生徒がいるため、運動・スポーツに取り組む前に適切な室温にする、カーテンを閉めて遮光する等を行っている。
- 児童・生徒が自身の体の動きを統合するイメージを持てるように、教員が自作の器具(左右の手足に巻く色の異なるバンドゴム等)を児童・生徒に提供し、スポーツの基礎となる体の動きを習得できるようにしている。
- 児童・生徒の特性に応じて、同じ体育の授業時間でも、参加時間と見学時間のバランスを変えている。
- 手足を動かす、物を握る、歩く、ジャンプする等のスポーツの基本となるような動作に関して時間をかけて指導し、出来るようになったことも繰り返し継続することで、正しい身体の動きが児童・生徒自身の中で習慣化するようにしている。
- 教室や学校の空きスペースを使って、ボーリングゲームをする等、体育以外の短い時間を活用し、児童・生徒がスポーツする機会を作るようにしている。
- ボッチャを通じて、全ての学年が体験をする機会を創出し、発達障害の児童・生徒だけの特別な運動・スポーツとならないようにしている。

（ウ）「高等学校」における工夫及び配慮

- ニュースポーツ（ガラッキー、カローリング、ブラインドサッカー等）を積極的に取り入れて生徒の興味・関心を引き出したり、ルールを見える化する（ミニチュアを用いて事前学習する等）する工夫を実施。
- 障害特性に関わらず参加することができる競技であるペガーボール（マジックテープのついたボールを投げる競技）を外部講師を呼んで授業の中で指導してもらう等、障害特性に関わらずに生徒が参加しやすい種目を学期の中で数回行うようにしている。
- ミニハードルや、スポンジボールの活用等を屋内で行うことで、日常生活の中に運動・スポーツを埋め込む感覚を持ってもらうようにしている。これにより、体育館や武道場等の施設がある学校内だけでなく、卒業後の家庭での運動にもつながるように工夫している。

（エ）「学校外」における工夫及び配慮

- 異性との距離感を適切に保ちにくいケースがあるため、スタッフがサポート体制を構築し、本人や他の利用者の安心を作っている。
- 障害者スポーツセンターで、月に一度の頻度で、フライングディスク、ボッチャ等、競技を限定してイベントを行っており、スタッフが手厚く指導、フォローできる環境を用意し、運動・スポーツに苦手意識のある子でも参加できる機会提供を行っている。
- 本人のモチベーションと、保護者の期待値のすり合わせを丁寧に行い、本人のやる気を引き出すためにコミュニケーションを増やしたり、プログラムを提供（ゲームソフトを用いる等）したりしている。また、できることを保護者に伝達し、スポーツ施設以外の場所や家庭の時間でも本人ができることを保護者と一緒に考えながら、運動・スポーツの機会を提供している。
- 体作りを柱に据えてアセスメントを行い、段階付けをして、個別に運動プログラムを提供している。
- 体育館の照明が眩しいという感覚過敏の方への対応として、（1）照明を半分に落とし、（2）サングラスをかけて、（3）一対一で指導者がフォローできる環境で、運動・スポーツに参加してもらっている　。
- スポーツ後の体力消耗が激しい方が多く、スポーツに参加した当日や翌日の睡眠時間、日常生活に支障がなかったか確認し、スポーツが無理なく本人の日常に位置づけられるように、実施するスポーツの強度を調整している。

（オ）「卒業後」における工夫及び配慮

- 運動・スポーツに対して苦手意識を持った人が多いため、小さな成功体験を掴んでもらうために、当事者が出来るレベルの簡単な動きからまずは行う等の個別サポートや声かけを行っている。
- 卒業後の方の場合、特に自分の障害の特性や身体の稼働領域等について十分に理解できていないケースが多いため、自分の身体のことを理解してもらうことから始めている。
- 身体の動きがぎこちなかったり、体幹が弱い方が多いため、できる動きを切り出して、椅子に座って上半身だけでできる運動や、逆に立ったままできる運動など、一人一人に合わせた運動に落とし込んでいる。

D） 具体的な課題について

（ア）複数の団体で共通していた課題

- 運動・スポーツの継続性をどのように担保するか。
- 人によって多種多様、異なる認知特性に対し、スタッフの人数、知識、経験が不足している。
- サポートや、支援に関わる大人の意識変革の難しさに課題がある。本人たち以上に大人が運動・スポーツに対してブレーキをかけるケースが多い。

（イ）「小中学校」における課題

- どの運動・スポーツが児童・生徒、一人一人にマッチしているかを教員の知識が不足していて、見立てることができない、指導できる教員が少ない。
- 水に対しての感覚過敏を持った児童・生徒が多く、水泳の授業を行う際に本人と会話して可能な形で体育の授業に参加してもらう、実施内容を変更する等を行っているが、専門的な知見を持った外部の方に指導して欲しいと思うことがある。
- 体幹の弱さや、バランス調整の苦手さがある児童・生徒が多く、基礎的な動きから指導をしていく必要があり、幼少期からの積み重ねが不足していると感じるケースが多い。
- 学校では運動・スポーツに慣れる環境を作ることができるが、見知らぬ人と一緒に運動・スポーツに取り組む際に、同じような力を発揮できない場合も多い。

（ウ）「高等学校」における課題

- 地域のクラブやサークル活動の場は大人のメンバーが多く、高校生等学生メンバーを対象とした活動がもっと増えると、部活動以外の場でスポーツを楽しめる機会が増える。
- 部活動に上手く参加できず、体育の授業以外で、体が動かせる機会が不足している。

（エ）「学校外」における課題

- 感覚統合に関するトレーニングや運動は、本来、幼い時に行なうと良い。　そのような運動を成人に近い年齢の方に、抵抗なく取り組んでもらうことが課題で

あり、イラストや映像を用いて説明している。習得するのに時間がかかるので丁寧に時間をかけて指導するようにしている。

- リハビリテーションセンターにおいては本人ができることに着目して、本人の自信につながるようにしている。 学校での体育の授業との接続が必要だと考えているが、人手や時間が足りず、学校教育との十分な連携ができていない。

（オ）「卒業後」における課題

- 児童・生徒が参加しやすいように小集団を作ったり、役割を設定する等の対応をしているが、卒業後はそうした対応を行なってくれる場所が少ないため、運動・スポーツに取り組むことができなくなっている。
- 音や外部からの光に配慮したスペースがあるが、そのスペースに行くまでの導線上に刺激（人が多く滞在するスペースがある、売店がある等）があり、利用しにくい。

iv. 調査結果及び分析（個人）

A） 運動・スポーツの実施状況等の現状

本事業を行う上で事前に行ったヒアリングでは、「都市部」と「地方部」に運動・スポーツの実施状況や、運動・スポーツの提供場所等に大きな違いがあるのではないか、という仮説があった。

したがって、個人ヒアリングを通じて、本仮説を検証するため、対象となる方がどのような場所で、どのような運動・スポーツに取り組んでいるか、どのくらいの頻度で行っているか等の現状を明らかにし、「都市部」と「地方部」に分けて整理を行った。

都市部及び地方部ともに、自宅や近所の公園、地域の運動施設を利用して、運動・スポーツに取り組む方が多かった。

実施される運動・スポーツの種類についても、都市部と地方部で大きな違いはみられず、個人で取り組める運動・スポーツ（散歩、自転車、筋力トレーニング等）のケースもあれば、チームスポーツ（卓球、テニス、サッカー等）に取り組むケースもあった。

頻度については、週１回～５回、時間は 30 分程度～２時間程度で、運動・スポーツを実施しているケースが多かった。

＜都市部＞

運動・スポーツの実施場所	運動・スポーツの種類	頻度
自宅、市民プール、デイサービス施設内、近隣の公園、スポーツクラブ内	体操、水泳、縄跳び、サッカー、自転車、運動遊び、バルシューレ	・軽い体操(1日5分)×週7回) ・水泳(1日 30 分×週1回) ・なわとび(1日5分× 5回) ・サッカー(1日あたりの実施時間: 60 分～90 分)(1週間あたりの実施回数:1 回) ・自転車(1日あたりの実施時間: 10 分)(1週間あたりの実施回数: 1回) ・運動遊び(1日あたりの実施時間: 50 分)(1週間あたりの実施回数: 1回) ・バルシューレ(1日あたりの実施時間: 60 分)(1週間あたりの実施回数: 1回)
学校	サッカー、テニス、空手	各種目週1日、1回 60 分
自宅近辺	ウォーキング、散歩	月 10 回、1回 30 分ほど
自宅近辺	散歩、筋トレ	散歩週7回・1回 60 分、筋トレ週7回・1回 30 分
ヨガ教室、ジム、自宅近辺	ヨガ、マシーントレーニング、ウォーキング、ランニング、ロードバイク	週2、1回2～3時間
自宅近辺	ジョギング、散歩	週4回、1回 60 分
地域の体育館	ハンドボール	週2回、1時間 30 分程度

水泳：スイミングスクール 自転車：自宅近辺 体操：地域のサークル 卓球：学校の部活動	水泳、自転車、体操、卓球	水泳：週2回、1時間 自転車：週4回、1時間程度 体操：週1回、1時間程度 卓球：週4回、1時間程度
自宅近辺、地域のサークル	自転車、鉄棒、縄跳び	週2回ほど、1回 15 分～1時間

＜地方部＞

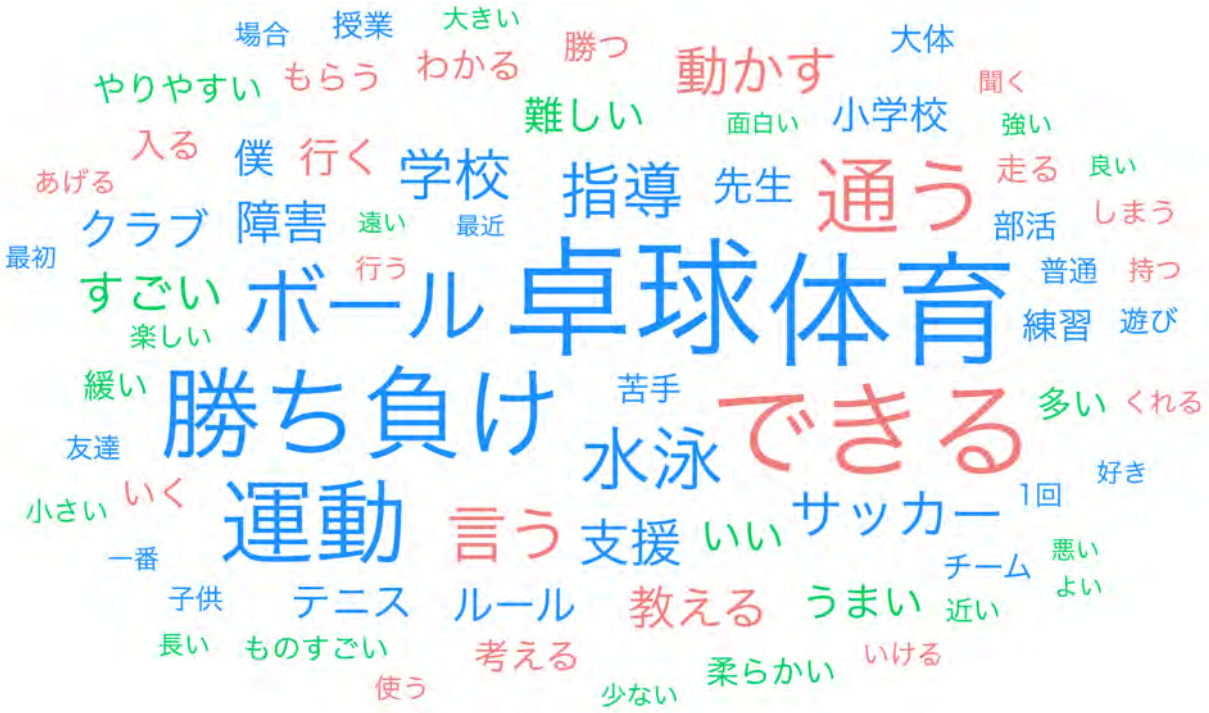
運動・スポーツの提供場所	運動・スポーツの種類	頻度
学校	卓球	週に数回、クラブ活動に参加。また、休み時間に友達と実施。
近所の公園	公園遊び、散歩	週2日、1～2時間
学校、地域の体育館	卓球、散歩	卓球は週1～2回、1時間程度。散歩は毎日、10 分程度。
テニス同好会、近所のゴルフ場、スキー場	スキー、硬式テニス、ゴルフ	テニスは週1回・2～4時間、ゴルフは月1～2回、スキーはシーズンに2～3回
地域のサークル、地域のサッカーチーム	バレー、風船バレー、サッカー、キックベース	週5回、1日2時間程度

B）　テキストマイニングによる分析結果

個人ヒアリングの内容を文字起こしし、その上でテキストマイニングツールを活用して分析を行った。スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している

（ア）ヒアリング内容全体について

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ⅰ）からⅳ）のとおり。



①　頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【発個1】の赤枠囲みのとおり、「体育ー授業」「学校ー体育」の出現頻度が高くなっており、個人の運動・スポーツの参加機会の創出を想定する際にも、学校現場での参加が重要な役割を果たしていると考えられる。また、【発個1】の青枠囲みのとおり、「動きー動き」の組み合わせの出現頻度が高くなっているのは、例えば肩の動きと足の動き等のように、体の異なる部位の動きを調整することについての発言が多くあったことに関係している。

「名詞ー形容詞」の関係性については、【発個2】の赤枠囲みのとおり、「楽しい」という単語に連動して「卓球」や「授業」が出現頻度が高くなっており、個人においても運動・スポーツにポジティブに取り組むことができている現状と一致する。

【表：発個1】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
体育 - 授業	3.27	8
腕 - 肩	3.33	5
学校 - 体育	0.67	5
ボール - 行方	3.00	3
嫌 - 思い出	2.40	3
動き - 動き	0.80	3
担任 - 先生	0.20	3
学区 - 学校	0.15	3
大会 - 出場	3.00	2
友達 - 会話	2.00	2
昭和 - ゴリ	2.00	2
レベル - なのか	2.00	2
スポーツ庁 - 狙い	2.00	2
グローブ - キャッチ	1.50	2
車 - 大好き	1.50	2

【表：発個2】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

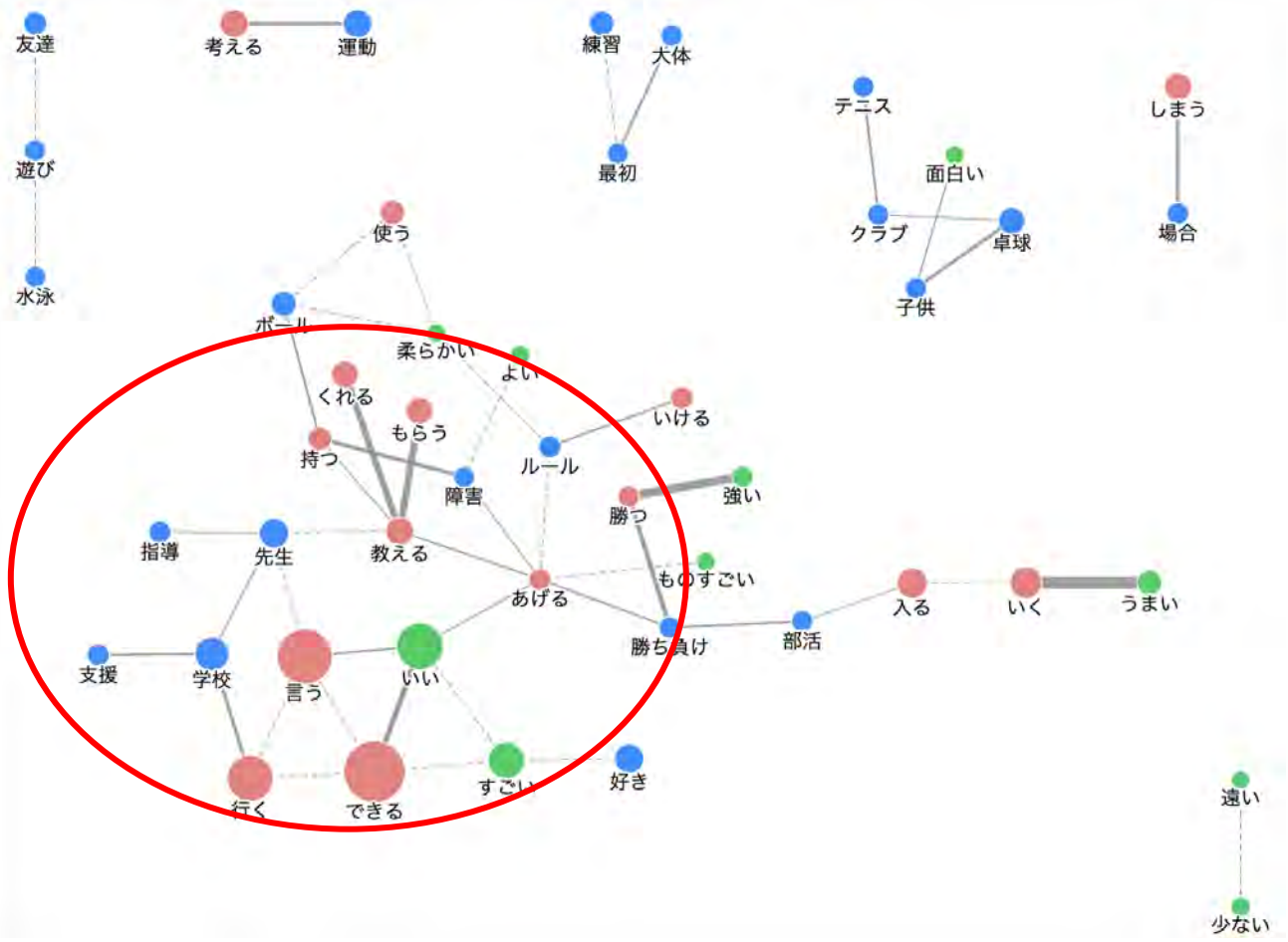
名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
過敏 - 強い	中立	0.67	3
ルール - 正しい	ポジティブ	1.50	2
お腹 - 痛い	ネガティブ	0.86	2
調子 - 悪い	ネガティブ	0.50	2
運動神経 - 悪い	ネガティブ	0.50	2
学校 - 近い	ネガティブ	0.46	2
視覚 - 強い	中立	0.33	2
人間関係 - 良い	ポジティブ	0.32	2
卓球 - 楽しい	ポジティブ	0.19	2
授業 - 楽しい	ポジティブ	0.19	2
キャッチ - 難しい	ネガティブ	0.18	2
ルール - 難しい	ネガティブ	0.18	2
先生 - 多い	中立	0.13	2
ドリブル - いい	ネガティブ	0.06	2
スピード - いい	ネガティブ	0.06	2

② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

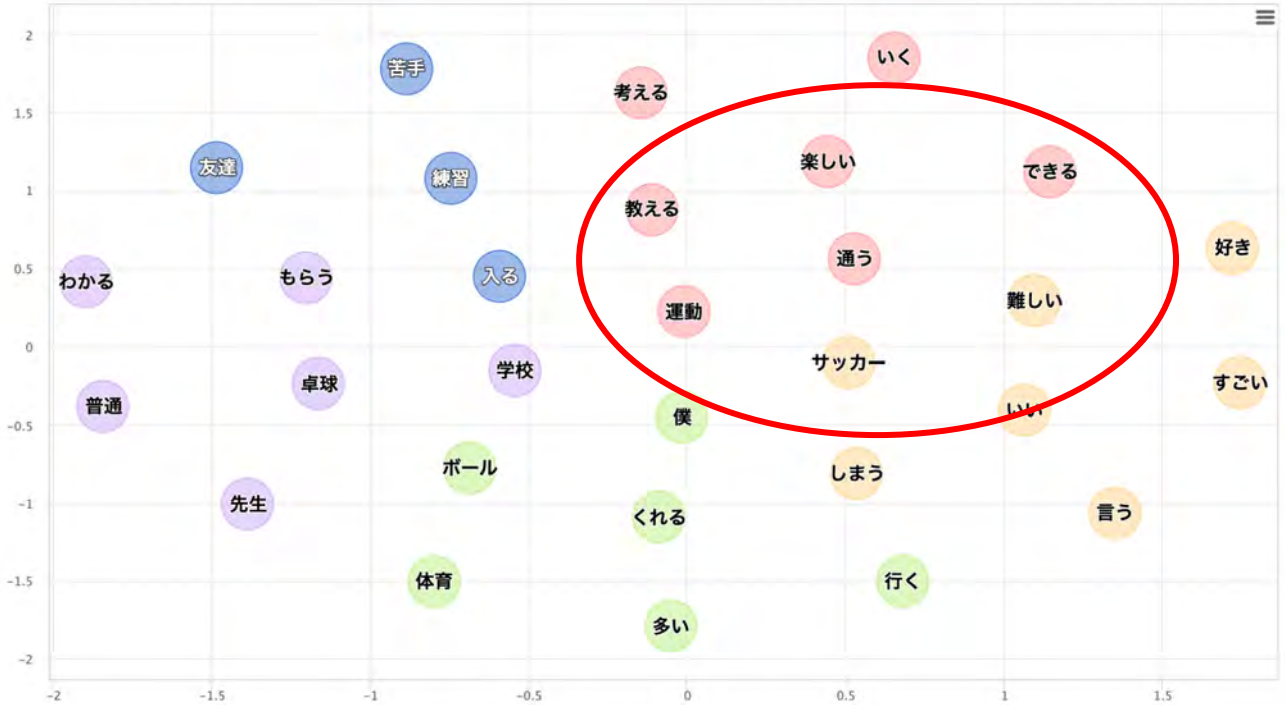
【図：発個1】の赤丸囲みのとおり、「教える」という単語を中心に、「先生」「学校」「指導」「支援」といった学校関連の単語が出現していたり、「あげる」「勝ち負け」「ルール」といった運動・スポーツに参加する際の配慮に関連する単語が出現しており、発達障害の方が運動・スポーツに参加する際の様々な配慮が実施されていると考えられる。

【図：発個1】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。【図：発個2】の赤丸囲みのとおり、「楽しい」という単語を中心に、「できる」「通う」「教える」「運動」といった単語が似た出現傾向があり、個人として運動・スポーツに参加する上で、前向きな姿勢で臨んでいることが想定され、ヒアリングで聴取した具体的なエピソードとも整合する。

【図：発個2】相関関係の分析（2次元マップ）

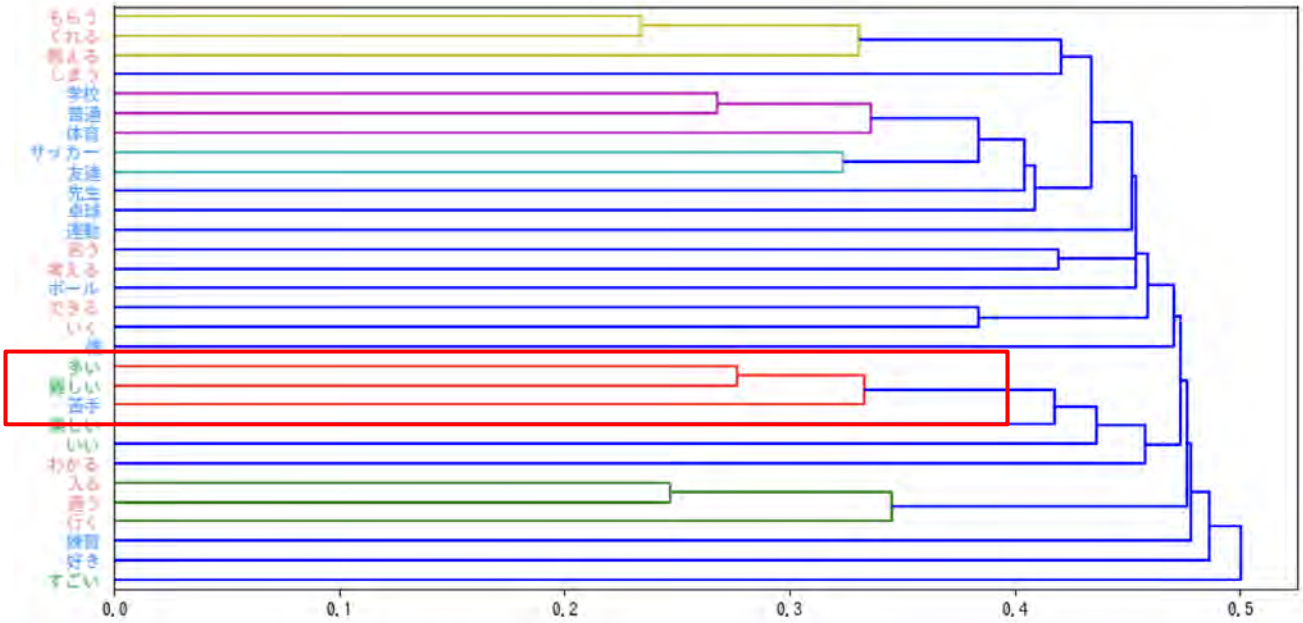


③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：発個3】の赤枠囲みのとおり、「多い」「難しい」「苦手」という単語が同じグループに分類されており、運動・スポーツに参加する際の課題につながる発言が多くあったことと同様の傾向となっている。

【図：発個3】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

個人ヒアリングにおいても「学校」「先生」「体育」「指導」といった学校関連の単語が多く出現しており、【表：発個3】でも同様の傾向が出ており、改めて運動・スポーツの機会創出において学校が果たす役割が大きいと考えられる。

また、【表：発個4】のとおり、「できる」「行く」「通う」という運動・スポーツに対して前向きな動詞や、「楽しい」「うまい」「良い」という形容詞の出現頻度も高くなっており、発達障害の方が積極的に運動・スポーツに参加している実態を裏付ける分析結果と考えられる。

同時に【表：発個5】のとおり、「難しい」「少ない」「小さい」という形容詞の出現頻度もあり、発達障害の方の運動・スポーツへの参加ニーズが十分に満たされていない状況が推察される。

【表：発個3】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
学校	39.65	78
僕	21.85	72
先生	22.80	59
好き	3.97	57
運動	76.49	55
卓球	109.59	46
体育	106.13	44
普通	8.06	42
ボール	67.15	40
サッカー	37.23	40
練習	17.13	37
苦手	11.53	31
友達	4.80	31
指導	44.48	26
支援	36.31	26

【表：発個4】頻出率の分析（動詞）

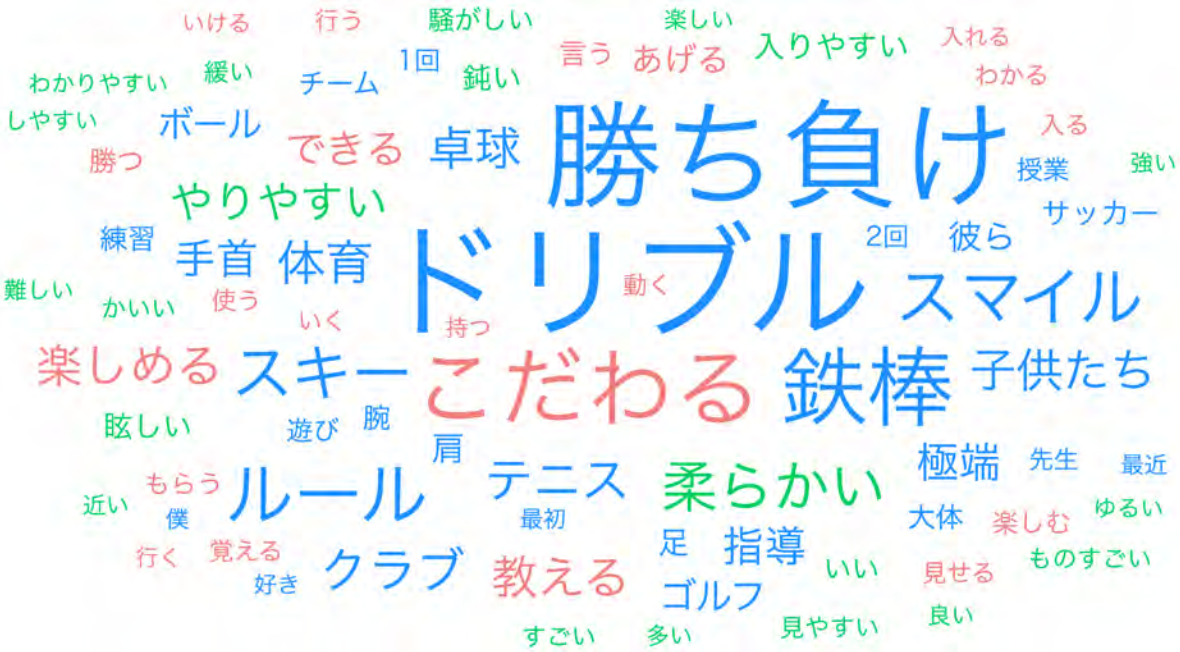
動詞	スコア	出現頻度
できる	31.37	162
言う	15.67	139
行く	8.52	107
いく	5.71	55
わかる	5.50	54
入る	5.55	50
考える	5.36	44
教える	10.40	42
しまう	2.50	40
もらう	4.69	38
くれる	1.71	38
通う	23.89	31
使う	1.93	29
持つ	1.94	26
行う	2.10	23

【表：発個5】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
いい	8.63	108
すごい	11.12	72
多い	5.95	46
難しい	8.18	33
楽しい	2.07	30
うまい	7.78	29
良い	0.44	18
強い	1.22	17
近い	1.75	12
小さい	2.19	11
少ない	1.39	11
大きい	1.26	11
悪い	0.45	11
長い	1.12	10
よい	0.21	10

（イ） 競技・配慮に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ｉ）からⅳ）のとおり。



① 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞ー名詞」の関係性については、【表：発個6】の赤枠囲みのとおり、「腕ー肩」「足ー集中」「腕ー手首」という体の部位に関する単語の出現頻度が高くなっており、発達障害の方が、体のそれぞれの部位を意識して、運動・スポーツに取り組んでいる状況であると考えられる。このことは、協調運動が苦手な方が多いという発達障害の方の特性と関連しているものと推察される。

「説明ーわかりやすい」「少人数ーしやすい」「行動ーしやすい」等、【表：発個7】の赤枠囲みのとおり、運動・スポーツの指導に関する単語の出現頻度が高くなっており、本人にとって参加しやすい環境の中で、運動・スポーツに取り組むことができている実態が推察される。

【表：発個6】頻出語に関する分析（名詞ー名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
腕 - 肩	3.33	5
足 - 集中	2.00	2
遊具 - 興味	2.00	2
腕 - 手首	1.00	2
ドリブル - ドリブル	0.60	2
友達 - 顔	1.00	1
友達 - 名前	1.00	1
運動 - バルシューレ	1.00	1
遊び - バルシューレ	1.00	1
遊び - つけたり	1.00	1
体育 - 退屈	1.00	1
バレーボール - 単元	1.00	1
配慮 - 始まり	1.00	1
風船 - 開催	1.00	1
バレー - 開催	1.00	1

【表：発個7】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
ドリブル - いい	ネガティブ	0.27	2
自転車 - こい	ネガティブ	1.00	1
だし - 細かい	ネガティブ	1.00	1
説明 - わかりやすい	中立	1.00	1
アウト - 見やすい	中立	1.00	1
運動神経 - 悪い	ネガティブ	1.00	1
少人数 - しやすい	中立	1.00	1
行動 - しやすい	中立	1.00	1
間隔 - 鈍い	ネガティブ	1.00	1
練習 - 近い	ネガティブ	0.67	1
視覚 - 強い	中立	0.67	1
過敏 - 強い	中立	0.67	1
ランニング - 近い	ネガティブ	0.67	1
運動神経 - 良い	ポジティブ	0.67	1
最初 - 近い	ネガティブ	0.67	1

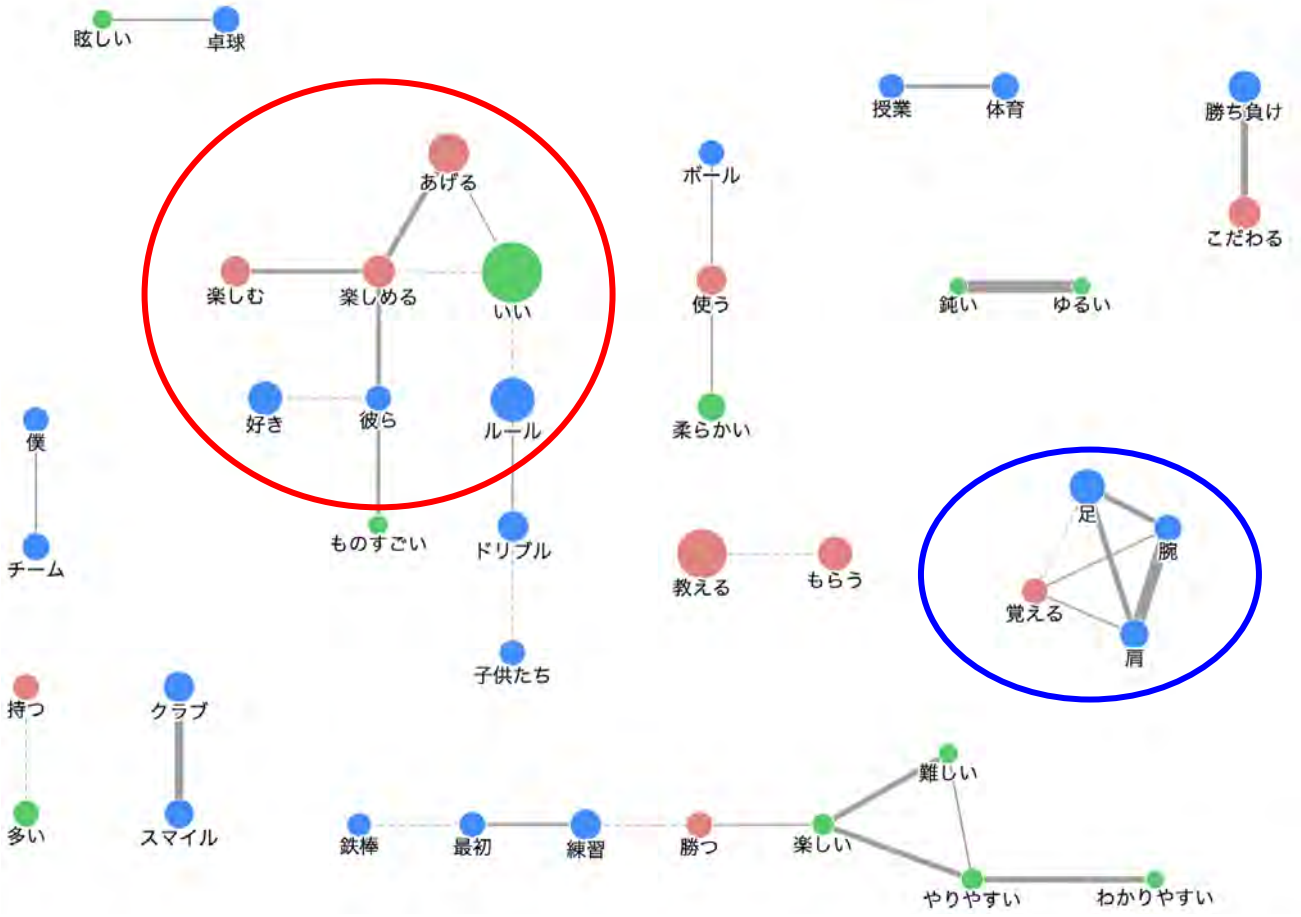
② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：発個4】赤丸囲みのとおり、「楽しめる」という単語を中心として、「好き」「いい」「ルール」といった単語が連関しており、発達障害の方が楽しんで運動・スポーツに参加できるように、本人や保護者が工夫している実態と同様の傾向となっている。。

また、【図：発団4】青丸囲みのとおり、「覚える」という単語に連動して、「足」「腕」「肩」という単語が出現しており、前述と同様、体の異なる部位を意識して運動・スポーツに参加している実態と同一の傾向である。

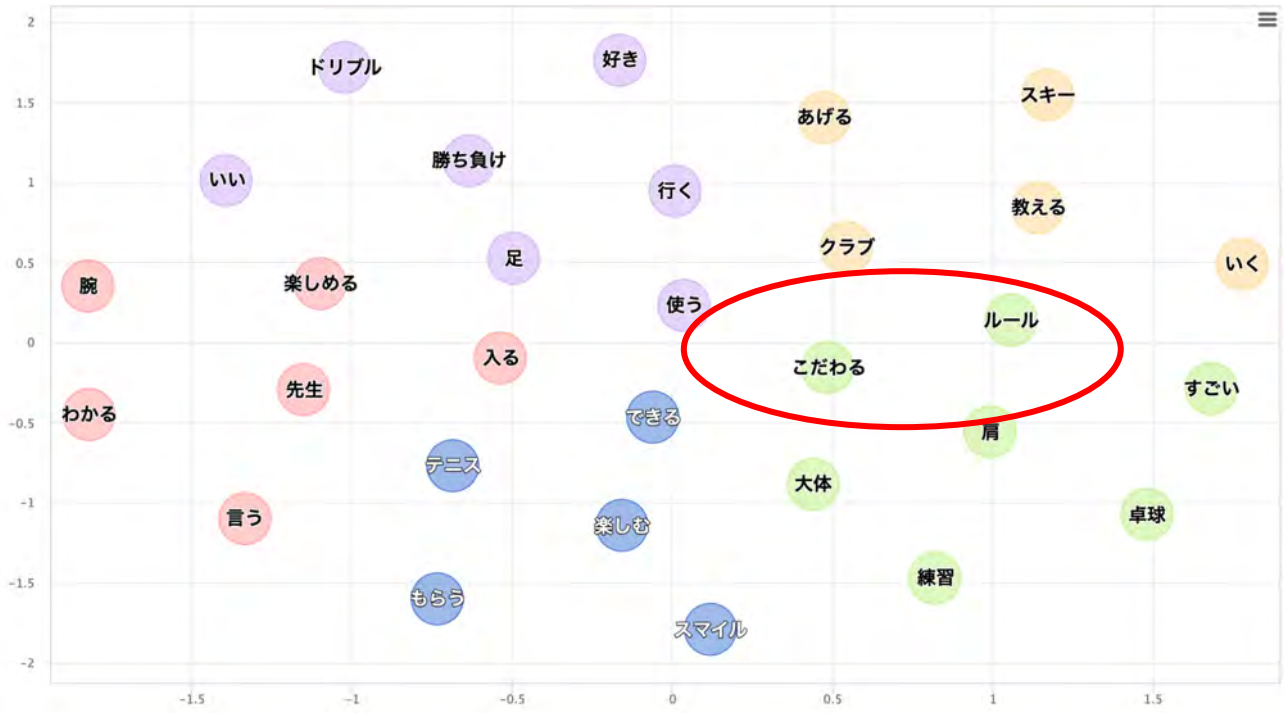
【図：発個4】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：発個5】の赤丸囲みのとおり、「こだわる」と同じグループに「ルール」が出現しており、本人が運動・スポーツに参加するにあたり、既存のルールの改変が柔軟にされているという工夫があると考えられる。

【図：発個5】相関関係の分析（2次元マップ）

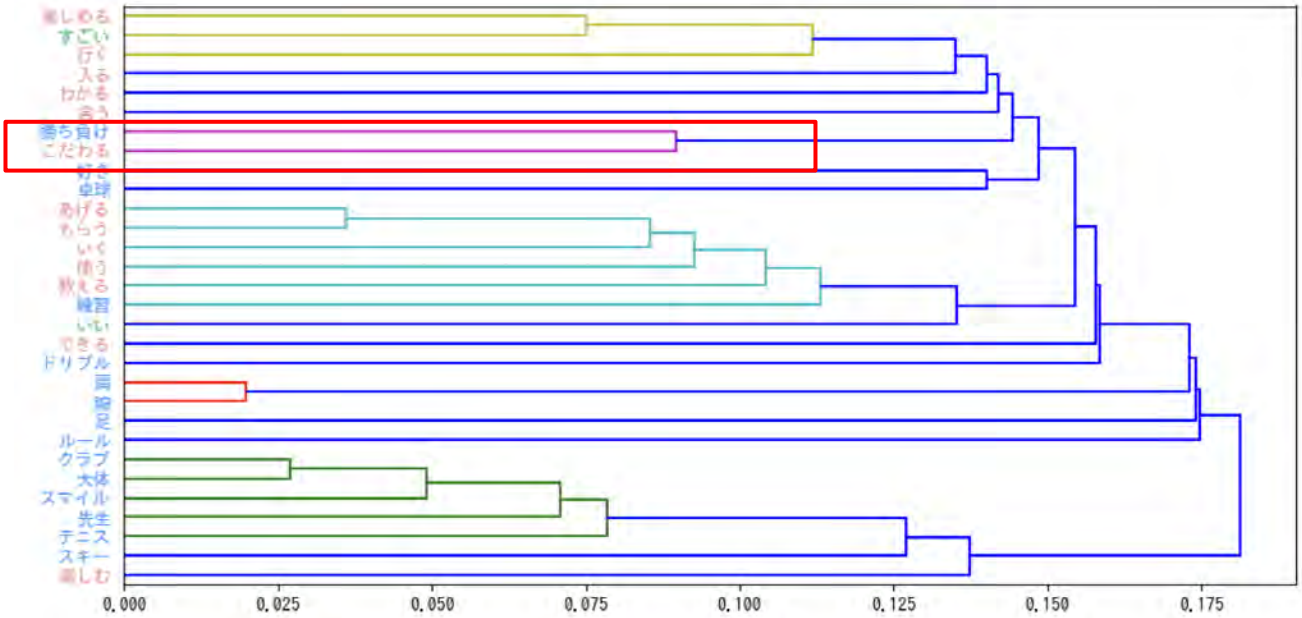


③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

【図：発個6】の赤枠囲みのとおり、前述と同様に「勝ち負け」と「こだわる」が同じグループに分類されており、発達障害の方が運動・スポーツに参加するにあたり、配慮する事項として共通しているものと考えられる。このことについて、本人や保護者も理解しており、ヒアリングの中でも複数の回答があった。

【図：発個6】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

前述のとおり、【表：発個8】において、「ルール」「勝ち負け」「こだわる」の出現頻度が高くなっており、配慮事項として意識されている。

【表：発個8】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
ルール	11.57	17
足	1.54	12
好き	0.15	11
勝ち負け	27.16	10
テニス	5.27	10
ドリブル	28.95	9
クラブ	5.44	9
練習	1.14	9
スマイル	10.11	8
スキー	9.09	8
肩	1.94	8
体育	5.28	7
卓球	5.00	7
サッカー	1.49	7
腕	1.21	7

【表：発個9】頻出率の分析（動詞）

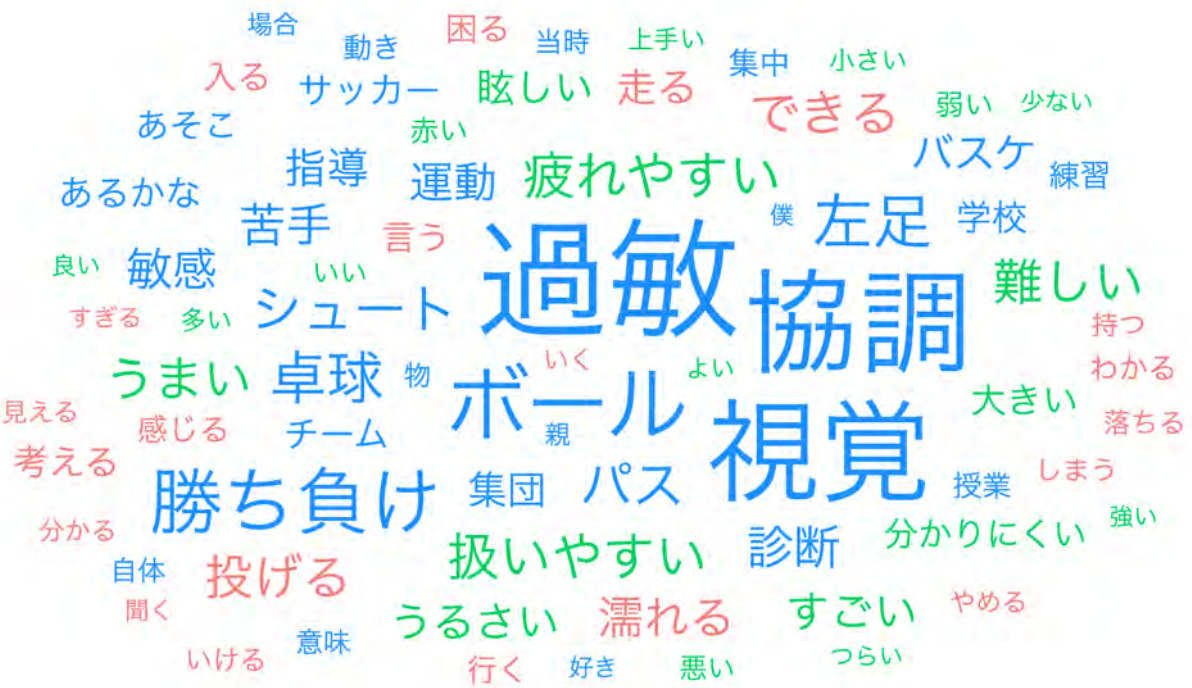
動詞	スコア	出現頻度
できる	1.21	31
言う	0.37	21
教える	1.59	16
あげる	0.68	12
もらう	0.27	9
入る	0.19	9
わかる	0.16	9
こだわる	6.13	8
楽しめる	1.72	8
いく	0.12	8
楽しむ	0.29	7
使う	0.11	7
行く	0.04	7
行う	0.15	6
勝つ	0.35	5

【表：発個 10】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
いい	0.33	21
すごい	0.14	8
柔らかい	2.66	6
多い	0.07	5
やりやすい	1.48	3
楽しい	0.02	3
眩しい	0.52	2
ものすごい	0.17	2
近い	0.05	2
難しい	0.03	2
強い	0.02	2
良い	0.01	2
入りやすい	0.55	1
鈍い	0.43	1
騒がしい	0.25	1

（ウ）課題に関すること

スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示した結果を示している。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。詳細な分析は以下ｉ）からⅳ）のとおり。



① 頻出語に関する分析

頻出語に関する関係性を分析すると以下のような傾向がみられた。

「名詞一名詞」の関係性については、【表：発個 11】の赤枠囲みのとおり、「動き一動き」の組み合わせの出現頻度が高くなっているのは、例えば肩の動きと足の動き等のように、体の異なる部位の動きを調整することについての課題感についての発言が多くあったことに関係しているものと考えられる。

また、【表：発個 11】の青枠囲みのとおり、「高さ」「距離」「把握」「空振り」といった単語の出現頻度も高く、空間認知に関する苦手要素が、課題として語られることが多かった。

「名詞一形容詞」の組み合わせについては、【表：発個 12】の赤枠囲みのとおり、「過敏一強い」「聴覚一強い」「視覚一強い」といった感覚過敏に関する単語の出現頻度が高くなっており、運動・スポーツに参加する上での課題となっていると考えられる。

【表：発個 11】頻出語に関する分析（名詞一名詞）

■ 名詞 - ■ 名詞

名詞 - 名詞	スコア	出現頻度
動き - 動き	2.40	3
嫌 - 思い出	1.50	2
自体 - 好き	0.75	2
左足 - 苦手	0.43	2
卓球 - クラブチーム	1.00	1
学校 - 集団生活	1.00	1
学校 - 主催	1.00	1
サッカー - 役割	1.00	1
ボール - 行方	1.00	1
自転車 - バス	1.00	1
親 - 意欲	1.00	1
ラケット - 高さ	1.00	1
距離 - 高さ	1.00	1
高さ - 把握	1.00	1
把握 - 空振り	1.00	1

【表：発個 12】頻出語に関する分析（名詞ー形容詞）

■ 名詞 - ■ 形容詞

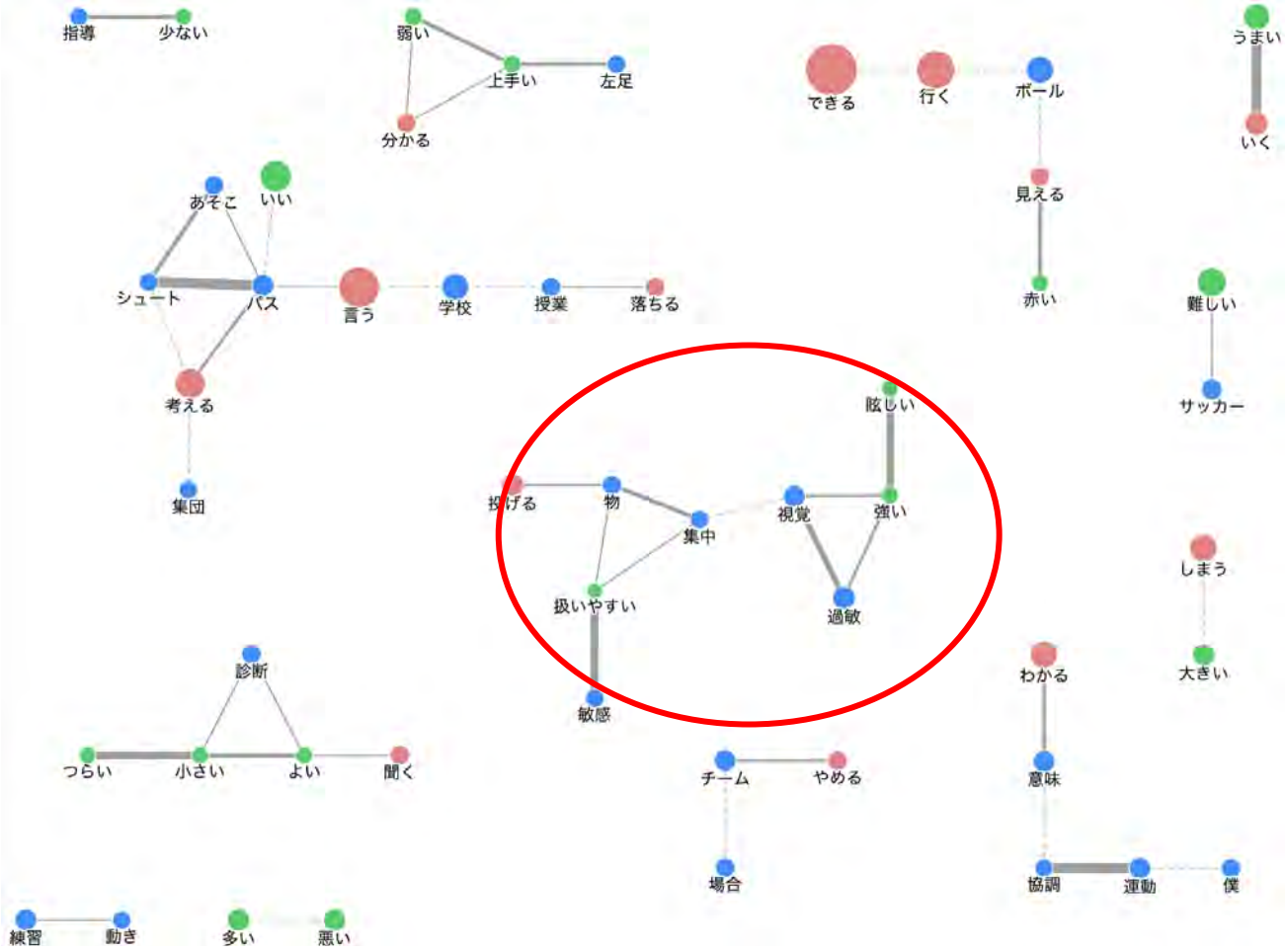
名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
過敏 - 強い	中立	2.00	2
人間関係 - 良い	ポジティブ	2.00	2
卓球 - ほしい	ネガティブ	1.00	1
授業 - 楽しい	ポジティブ	1.00	1
役割 - 詳しい（否: 100.00%）	ポジティブ	1.00	1（否: 1）
ルール - 分かりにくい	中立	1.00	1
物 - 速い	中立	1.00	1
アレルギー - ひどい	ネガティブ	1.00	1
差 - 激しい	ネガティブ	1.00	1
インドア - 暗い	ネガティブ	1.00	1
先生 - 少ない	中立	0.67	1
聴覚 - 強い	中立	0.67	1
視覚 - 強い	中立	0.67	1
テレビ - 眩しい	中立	0.67	1
大人 - よい	中立	0.67	1

② 相関関係の分析

出現する単語の出現パターンが似たものを線で結ぶ「共起キーワード」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：発個7】の赤丸囲みのとおり、「視覚」に連動して「過敏」「集中」「敏感」「強い」「眩しい」という単語が出現しており、発達障害の方の特性の一つに感覚過敏が、運動・スポーツの参加に際しての課題となっていることが推察される。

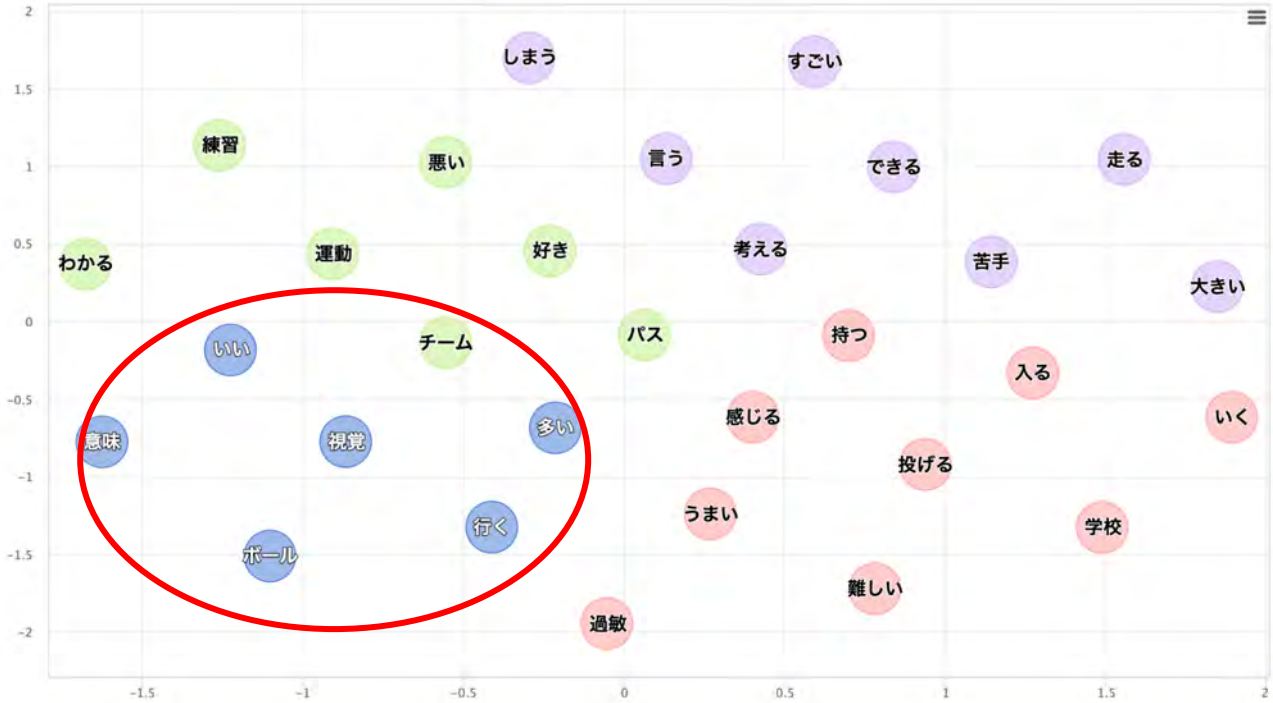
【図：発個7】相関関係の分析（共起キーワード）



また、出現傾向が似ている単語を分類する「2次元マップ」機能を用いて、相関関係の分析を行った。

【図：発個8】の赤丸囲みのとおり、「視覚」「ボール」が同じグループに分類されているが、大きな場所（グラウンドや体育館）でボールを追いかけることが苦手で、卓球台であればボールを追いかけることができる、という発言があったことに関連している。

【図：発個8】相関関係の分析（2次元マップ）

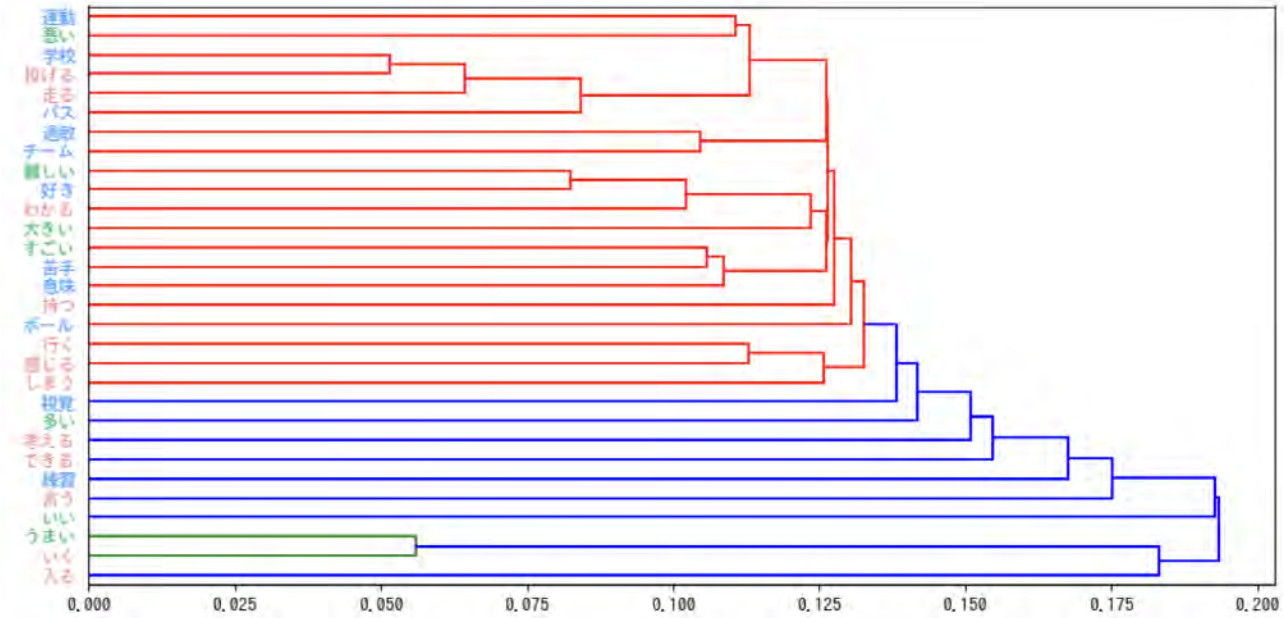


③　クラスター分析

文章中での出現傾向が高い単語をグループ化して色分けした結果は以下の通り。

課題に関連する単語が多く抽出されたが、個々のグループにおける関連性は分析できなかった。

【図：発個9】クラスター分析



④　頻出率の分析

名詞、動詞、形容詞のそれぞれについて、頻出率の分析を行なった結果は以下の通り。

名詞については、【表：発個 13】のとおり、「苦手」「過敏」「視覚」といった発達障害の特性や本人に関する単語の出現頻度が高くなっており、運動・スポーツへの参加のために、周りからのサポートや苦手意識の克服といったアプローチが必要であることが推察される。

【表：発個 13】頻出率の分析（名詞）

名詞	スコア	出現頻度
苦手	2.18	13
ボール	8.78	12
学校	1.09	12
過敏	17.19	8
視覚	14.13	7
パス	3.09	7
運動	1.90	7
チーム	1.08	7
練習	0.70	7
意味	0.32	7
好き	0.06	7
卓球	3.79	6
サッカー	1.10	6
診断	2.27	5

【表：発個 14】頻出率の分析（動詞）

動詞	スコア	出現頻度
できる	0.99	28
言う	0.34	20
行く	0.25	18
考える	0.41	12
入る	0.33	12
わかる	0.19	10
しまう	0.16	10
走る	0.58	7
感じる	0.27	7
持つ	0.14	7
いく	0.10	7
投げる	0.87	6
いける	0.16	6
困る	0.30	5
落ちる	0.14	4

【表：発個 15】頻出率の分析（形容詞）

形容詞	スコア	出現頻度
すごい	0.65	17
いい	0.13	13
難しい	0.96	11
うまい	0.80	9
大きい	0.38	6
悪い	0.13	6
多い	0.11	6
うるさい	0.61	5
弱い	0.17	3
上手い	0.11	3
眩しい	0.52	2
赤い	0.17	2
小さい	0.08	2
少ない	0.05	2
つらい	0.04	2

C） 個人における具体的な工夫及び配慮について

14 名の個人に対して行ったヒアリングについて、工夫及び配慮の共通点、個別の工夫及び配慮について、得られた情報はそれぞれ以下のとおり。

（ア）工夫及び配慮の共通点

＜本人から得られた工夫及び配慮＞

■ 球技やチームスポーツが苦手であるため（自己で理解できているケースもある）、一人で取り組むことができる運動・スポーツ（ラジオ体操、ランニング、ウォーキング、ジムでのトレーニング、サイクリング）を積極的に選ぶように本人や保護者がしている。

＜保護者等から得られた工夫及び配慮＞

■ 複数の運動・スポーツに参加できているが、教えてくれる人の教え方、フィードバックや声かけ、褒められるということによって、楽しさを感じることができており、本人の反応も良くなっている。
■ 発達障害者や知的障害者のスポーツ支援をしている団体の活動では、補助具や色が判別しやすい道具を使う等、指導する上での配慮があるおかげで、成功体験を積むことができている。
■ 個人の体力やレベルに合わせ無理のない形で楽しみながら運動・スポーツに取り組むことができる環境によって、運動・スポーツを継続して取り組むことができている。

（イ）個別の工夫及び配慮

＜本人から得られた工夫及び配慮＞

- 施設に通って多くの人がいる環境で運動・スポーツに取り組むことに苦手意識があるため、そのような環境で運動・スポーツを行わないようにしている。その代わりに、自宅で個人でできるトレーニングをしている。
- 楽しみながらステップアップするという指導計画があるおかげで、水泳について、遊びながら少しずつレベルアップし、4泳法のトレーニングに取り組むことができた。

＜保護者等から得られた工夫及び配慮＞

- 一度、運動・スポーツを始めると、没頭し時間を気にしなくなってしまうため、スケジュールを立てて、決められた時間内で取り組むようにしている。
- 目に見える形で運動・スポーツへの参加インセンティブが提示された（賞状を集めると景品と交換できる）ことがきっかけになり、運動・スポーツを継続するようになり、そのうちに運動・スポーツの楽しさを理解してきている。
- 指導者がゆっくり説明し、細かくステップを区切って指導してくれるおかげで、運動・スポーツに参加することができている。
- 保護者の視点から、他の人と比較するのではなく、出来ないことが出来るようになったなどの本人の成長を意識して、褒めるコミュニケーションを取るようにしている。

D） 個人における課題について

共通の課題点及び個別の課題点について、得られた情報はそれぞれ以下のとおり。

（ア）課題の共通点

＜本人から得られた課題＞

- 障害特性を受け入れてくれるサービスが少なく、指導してくれる人も少ないため、結果として運動・スポーツに参加しづらい。

＜保護者等から得られた課題＞

- 本人の運動・スポーツへのモチベーションがまだそれほど高いわけではないため、地域のクラブやサークルへの参加には至っていない。また、物理的な距離もあり、本人の年齢が低いと、保護者が連れていくことに対しての負担感、移動手段の課題がある。

（イ）個別の課題

＜本人から得られた課題＞

- 高校卒業まで通常クラスに通っていたので、学校の体育指導において、運動が得意でない子にとっても使いやすいようなラケットや柔らかいボールを使う等の配慮がなかった。そのため、運動・スポーツへの参加に対して痛さや怖さが想起され、大人になった現在でも、運動・スポーツに参加しにくい。

＜保護者等から得られた課題＞

- 運動・スポーツの場を提供しているところの多くが、競技性や真剣度が高く、「運動が苦手な自分は参加が難しい」という感覚になり参加できていない。